
野口君観察日記

inisie

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野口君観察日記

【Nコード】

N3918Y

【作者名】

inissie

【あらすじ】

一人の女の子と一人の男の子。
とても仲の良い幼馴染。
二人で一緒に過ごしていました。
一人では駄目だったのでしよう。
二人だから・・・。

—
このお話は異世界ファンタジー幼馴染物となります。

第1話：学校編。

.....

手の中にある剣が血に染まっていく。

「わりいな。手間かけたわ。」

「・・・君ならいいよ。」

「泣くな。」

「・・・君こそ泣いているじゃないか。」

「俺は泣かねーよ。」

「そうだね。」

.....

なんだったのだ今の夢は。

どうかしたのだろう。

現代社会に剣などもっている人など居ない。

不思議な夢だったのだろう。

「ん。いい朝だね。」

天気は快晴。雲ひとつ無い。

一つ不快なのが携帯電話がなり続けていることだけか。
携帯電話を取り電話に出る。

「どうしたんだい？野口君？」

「やっと出たか・・・時間見る。」

時間？何を言っているのかな？今日は春休みのはずで。

「言っておくが今日は始業式だ。」

そうだったね。

今日は高校生最後の1年の初日だったね。

「もう一度言うからよーく聞け南。」

「時計だね？分かってるよ野口君。」

9時15分？どうしたことだろう。私の熊さん時計が壊れてしまっているね。

「野口君。時計が壊れていたよ。今9時15分と表示されている。」

この時計も小学校から使っているからね。さすがに寿命なのだろう。

「壊れてねーよ！どこをどうみたらそうなるんだよ！良いから早く学校にこい！」

「壊れていないのかい……。」

天気は快晴、目覚ましを使わず起きた気分の良さが全て飛んでいてしまったね。

「失礼致しました。」

まったく1度や2度の遅刻で先生方も口うるさい事だ。

「おはよーさん？南。」

「やあ、野口君。」

何故疑問系？と思ったらもう10時。

これは”おはよう”なのか”こんにちわ”なのか迷う時間だね。

「南……お前去年一昨年で懲りてねーのか……？」

「なんのことだい？」

「……お前2年間で50回以上遅刻してんだぞ……。」

なんで徒歩15分の学校でこんなに遅刻してるんだよ！」

「なぜだろうね。不思議だね。世界のななふし……。」

「七不思議にはなんねーよ！只の遅刻だろうが！」

「今日は時計が故障してね。アラームが鳴らなかったのだよ。」
嘘ではない。はずだ。

「嘘をつけ！嘘を！」

「おや？野口君？もう戻ってきたのかい。」

「滝川先生への用事は終わったのかい？」

「あーあの人が今日から担任だからな。」

「・・・つかいつぱしりも大変だね・・・。」

「部活の顧問が担任というのも大変だね。」

「まあいいんじゃない？どうせ誰が担任でもかわんねーよ。生徒会長なんて使われてなんぼだろ。」

「そうだろうね。」

「お前らー仲良いのはいいが席に座れ！」

滝川先生が来たようだね。

周りは皆座っているようだ。

「げ、はい。失礼しました。」

本音が漏れているよ野口君。

2時間目はHRのようだね。というか始業式が終わって皆集まったという感じが。

「俺は担任の滝川だ。これから1年間よろしく。」

「じゃあーまあ、全員自己紹介してもらおう。」

「とりあえず野口、お前からしろ。その後進行も頼む。」

「はい。」

野口 のぐち 克也君 かつや。

私の幼馴染だ。

この北真学校の生徒会長を務める。

学力テストにおいては学年1位。

陸上部においては400mをインターハイ出場。

高校2年生の時に出た論文コンクールでは優秀賞。
囲碁部においては団体戦で県2位。

いやはや完璧だね。

とても私には真似出来ないよ。

顔は良いほうだろう。少々子供っぽい所があるのだが。

髪はツンツン伸びる真っ黒な短髪。

身長は185cmぐらいだったかな。

小林 絢子さん《こばやし あやこ》さん。

学業優秀 眉目秀麗 品行方正

学校のアイドル的存在だね。

髪はショートの薄い茶色。

目が大きく。

誰からも好かれそうな顔をしている。

身長は私より高く160cmぐらい。

胸が大きい。

大きいね……。

そして、私の二人目の幼馴染だ。

「久坂……久坂!!」

「なんででしょうか滝川先生。」

せっかく絢子さんのことを考えていたのに邪魔をされてしまったね。

「……はぁ……お前の番だ。問題児っていうのは本当だったみたいだね……」

失礼な。私のどこが問題児だと……っとおっと自己紹介だったね。

「私の名前は、久坂くさか 南みなみ」

部活は囲碁部の部長。部員は3名。

文化祭での女子ランキングは何故か3票だけ入っていて30位タイだったかな？」

「南！それは言わないって……！あ……」

髪は長く、腰まである。

1度も髪の毛は染めた時がないので真っ黒だ。

身長は150cm 体重42kg

スリーサイズは秘密だ。

絢子さん程ではないが整っていないほどでは無いだろう。

少し釣り目がちなのが……気になるがね。

それにしても野口君。

君は本当に墓穴を掘るね。

それを言ってしまったては自分がばらしたと言っているようなものだよ。

フフフ。

席替えも済んだ。

野口君は教壇の前か、隣が良かったのだがね。

絢子さんは前の入り口の近くと。

私は窓際が一番後ろと……

これは作弄的なものを感じるよ……。

滝川先生……やっかいなのを後ろにしましたね……？

休み時間になったね。

野口君は寝た振りか。

それはそうだろうね・・・この状況を見ると寝たくなるのは分かるよ・・・。

「ねえねえ！久坂さん！野口君とはどんな仲なの？」

「恋人だよ。今日も朝電話で起こしてもらったのだよ。」

大きな声で言った。

クラス中の視線が集まる。

「嘘をつけ嘘を！ただの幼馴染だろうが！」

起きたね。野口君。一人だけ寝た振りなのは卑怯だよ。

「そうだね。幼馴染だね。小学校中学校は違うが。」

「あー小学、中学が違うのは家同士が道路を挟んでて学区が違うんだよ。」

何故道路を一つ挟んだだけで学校が違うのだろうか。

選べたら良かったのだけでも。

「え？そうなの？けど二人は高校で・・・一緒と・・・。」

もしかして高校は一緒の高校になりたかったとか！？キヤー！」

「そうなのだよ。野口君が高校は一緒になりたいと言いついてね。」

ずっと寂しかったと泣いて・・・。」

「だから真顔で嘘をつくな！」

真顔ではなく、これが素の顔なんだがね。

「ただ近くの高校を選んだら、南もまったく同じ理由だったじゃないか！」

「そうだね。そういう事にしておいてあげようじゃないか。」

「だあー！！！」

叫び出したよ。

「・・・もう良い。」

拗ねてしまったよ。

「野口君・・・頑張つてね・・・色々。」

色々な意味が気になるね・・・。

絢子さんを見てみる。

ため息ついているね。
ふふ。ため息をついている顔も綺麗だね。

さて3時間目が始まったね。

先生のお話か・・・眠くなるね。

先程の夢の事を考えよう。

私には予知能力がある。いや予知と言う程大した事は無いかな。

精々、明日雨が降る。くじで当たりが出る事が分かった。程度だ。

それも自分が関係している事でなければ駄目だ。

自分がまったく関係無い事やあまりに突拍子も無い事は当たった試しがない。

それに加えて、自分の意識で見る事が出来ない。

夢で見る。現象が起きる直前に眩暈が起きる。

そしてフラッシュバックが起きて、
が起きる。という事が分かる。

今回は前者のようだね。

何故、野口君を私が剣で刺さなければならぬのか。

・・・これはあまりに突拍子も無い事だね。

この夢は外れるのだろう。

今までの夢でさえ外れる可能性はたくさん有った。

くじなど引かなければ当たらなかつただろうしな。

もし私が、野口君のことが好きではなくなつて刺した・・・有り得ないな。

私が嫌いならば刺すだけでは済まないだろう。

もし正夢だったというのなら逆夢にしてしまえば良い。

キスでもすれば大丈夫だろう。

おや？雨？

先程はすごい快晴だったのに、残念だな。

せっかく今日は散歩にでも行こうと思っただがな。

色々と買いたい物があつただけども。

そっいえば、野口君の部活も今日は無いはずだ。

食料とか服とか見たかったのだけでも、どうしようか。

また下着売り場に連れていくのも楽しいかもしれない。

ん？野口君の頭が揺れている？

野口君も昨日は寝不足だったのかな。

先生の目の前で寝るわけにはいかないだろうから頑張っているのだろ。フッフ。

野口君は見ていて飽きない・・・ね。

椅子が倒れる音がした。

気にしてられない。

先生が何か叫んでいる。

気にしてられない。

クラスメイトの悲鳴があがった。

机が邪魔だ。

野口君に届かない。

すまない。

机の上に飛び上がる。

スカートが翻る。

野口君。

なんで、消えようとしているんだい！

また、私を一人にする気かい！？

届いてくれ。

届いて！

もう体が見えない。

動いて。

壊れても良い。

もっと速く動いて！

指が光に消える一瞬。

私の指先が、その光に・・・野口君の指に触れた。

「良かった・・・」

私の意識はそこで途絶えた。

第1話：学校編。（後書き）

第1話読んでいただきありがとうございます。

第2話：異世界へ。

目が覚める。

枕はどこだろう。

硬い……。

床で寝てしまったのだろうか……

草の匂いがする……

私は外で寝てしまったのだろうか……

「いや。それはない。」

目が覚めた。

さすがに外で寝る趣味は無い。

ここはどこだろう？

庭？公園？

「ハッ……野口君？」

野口君はどこへ行ったのだろうか？

確か……立ちくらみができる。

ずっと寝ていたような感覚だな。

……近くにいるのだろうか。

ガサッ

音がした。

何かいるのか？

警戒心が高まるのが分かる。

「君？なんでここに？」

人だった。それも日本語のようだね。

野口君が……消えて……消える？

……ここは本当に日本なのか？

「君？言葉は通じる？」

「はい。大丈夫です。私は久坂 南。ここの近くに短髪で黒髪の大柄の男の人が倒れていませんでしたか？」
つとまじまじと相手の顔を見る。

20歳前後。私より年上といった所かな。
髪は・・・白？銀？

顔立ちは端整だな。

学校に居たらファンクラブができそうだね。

「私より大柄で、短髪の黒髪の男？」

「はい。知っていたら教えて欲しいのですが。」

考えてる仕草が様になっている人だね。

「ああ失礼した。淑女に名前も教えていなかったとは、私はエル・シユタイン。エルとでも呼んでくれ。」

・・・日本語で喋る外人。何故でしょう違和感がたつぷりですね。

「こんな所で、話すのもなんだろう。館のほうへは連れていけないが警備用の建物で話しよう。少しは役に立てるかもしれない。」
ありがたい・・・喉が渴いてしょうがなかったのだ。

私は頷いてエルさんの後について行った。

「黒髪の男性・・・そういえば私は黒髪の女性を見るのは生まれて初めてだ。こんなに綺麗なのだな。」

・・・日本では無い事が早速確定してしまった・・・いや、もしかしたらこの家から出た事が無い人なのかもしれない・・・なさそうだね・・・。

「ここだよ。」

大きいですね・・・私の家より大きいでしょう。

どれだけ大きい邸宅なのでしょうね・・・。

これだけの警備の人が必要ということはよっぽど大きな家なのでしょう。

よう。

応接室らしき部屋へ通された。

この明かりは一体なんだろう？

天井に吊るされてる明かりは全く無く、壁にかかった明かりのみ。

「ミナミ・・・で良いかい？」

「ええ、大丈夫です。出来れば何か飲み物を頂けませんか？」

「ああ・・・失礼した。何が飲みたい？」

「出来ればコーヒーが良いのですが。」

「コーヒーとはなんだ？」

・・・コーヒーを知らない地というのは世界にあるのか・・・あるだろうと思う。

「紅茶はありますか？」

「ああグリユツデルとブルーゲンがあるがどちらが良い？」

「なんでしょうその名称は・・・。」

「適当に言っ私を騙そうとしていませんか？」

「紅茶には詳しくないので・・・というか午後ティーとかテイステイ
ーぐらいしか飲みません・・・。」

「ここでグリユツデルを下さいとか言ったら」そんな銘柄ねーよ！騙
されたー！ばーかばーか！」とか言われませんよね？」

「どちらでも良いですよ。エルさんのお勧めのほうを。」

「では、ブルーゲンで。」

「びっくりしました。」

「真っ黒です。」

「コーヒーじゃないんですか？これは？」

「どうだい？美味しいだろう？」

「ええ。とつても。」

「味は紅茶だ。なんだろうこれは、違和感ばかりで頭がおかしくなり

そっだ。

「それで、黒髪の男性の事だったね。あそこには君しか居なかったよ？」

「そうですか……。」

野口君はどこに行ったのだろうね。

「その男性を捜すというのなら近くの大きな街まで送るよ？」

「いいのですか？」

なんといい人なのだろう。

「ここから二日程馬を走らせれば到着する。」

……馬？馬と言いましたか？

「その街の名前は？」

「イクエルという街だが？」

……おかしい気がします。いや最初から全ておかしいのでしょうか。ここは私が生きてきた世界なのでしょうか？

「……ナミ！ミナミ！」

「失礼しました？なんでしょうか。」

話をまったく聞いていなかったね。困った。

「私は主の所へミナミの事を伝えにいく。少ししたら戻るよ。休みの許可も貰わないといけないからね。」

「はい。分かりました。……ああ最後に一つ良いですか？」

「なんだい？」

「アメリカ・イギリス・ドイツ・フランス・ロシア・中国・日本この単語に知っているものはありますか？」

「……分からないな。ドイツとかいうのはドゥーイテという村が近くにあつたがその事かい？」

確定しましたね。

……野口君……君は一体なんなんだい？

「いいえ。有難うございました。」

さて・・・人も居なくなつた事だし纏めよう。
ここは違う世界。99%確定していいだろう。

もしかしたら絶海のとてつもなく大きな孤島で地図にも乗っていない場所の可能性もある。

・・・ないね。今の地球の技術でそんな島があるとは思えない。

・・・ならば、なぜ野口君がここに呼ばれたのか。

まったく分らないね。

情報が足りない。

足り無すぎる。

いや・・・まずは私の状態だ。野口君の事も大事だけでも。

制服。ブレザー。黒いセーター。スカート。靴下。ローファー。

持ち物。ブレザーに入れっぱなしのボールペン。

そして携帯のみ。

携帯は・・・圏外と。

時間は9時と表示されているね。

外は明るかったから間違つてはいないだろう。

・・・きた。

眩暈が来るのが分かった。

頭痛が酷い。

倒れそうだ。

・・・私が縛られている？何故？

・・・いやおかしいだろう？

エル・シユタインという人はこの館の警備をしていると言った。

何故、私を捕まえない？

こんなに怪しい私を捕まえない？

何故、こんなに優しい？

ここが日本ではなく地球上に無い場所ならば唐突に捕まえられて奴隷にでもされてもおかしくない。

・・・この眩暈はそういう事？

いや・・・エル・シユタインという人がただ単にお人よしで優しいという可能性もある。

・・・野口君・・・君ならどうする？

第2話：異世界へ。(後書き)

第2話読んで頂きありがとうございました。

第3話：村へ。

野口君・・・君ならどうするかな・・・？

ああ・・・いや野口君は単純な所があるからね・・・。

多分普通に優しい人だな。で済ませてしまう可能性が高い。

それをずっと私が諫めて来たんじゃないか。

そうと決まったらする事は一つだね。

どうやって逃げるか。

・・・窓。開いた。けど人が通れる程じゃないね。

・・・ドア。もしさっきの予知があっているのなら警備がいるだろうね。保留。

・・・他の出口。ないね。そういえば野口君が持ってきた漫画にヨコキとかいうのがあったね。けれども私に念能力はないから、壁は壊せないね。

・・・消去法でドアか・・・。

「すみません。・・・お手洗いにいきたいのですが？誰かいますか？」

「あっ失礼しました。今、開けますね。」

鍵がやはりかかっていたか。

ガチャガチャと動かしていたら怪しまれたかもしれないな。

「どうぞ、こちらです。」

「ありがとうございます。」

・・・びっくりした。

なんだあの髪は緑色？

これは99%が100%に変わった……かな。

「こちらです。」

振り向いた瞬間に腕を振り上げる。

綺麗に顎に入ったね。

「うっ……。」

ふう……男の人といえど執事みたいな人で助かった……。

エルさんのような人だったら危なかったね……。

何か持っている……？

園芸用みたいなナイフがあるね。

貰っていいこう。

ここがどれだけ危険な所か分からないしね。

明かりが欲しい所だね……。

この照明みたいのは……外せるんだね……

一体この照明はどこから電気や電池をとっているのだろう……？

ただの球体だね。

電池をいれる穴もないと……。

異世界だとしたら電気以外で動くものがあるのかもしれないね。

「行こう……。」

もう盗れそうな物は無いね。

ばれないように歩く。

誰も……居ない？

トイレが入り口の傍で助かったよ……。

脱出出来たね。

野口君。今行くよ。

今頃泣いていないといいけどね。

泣くわけねーだろ！とか言いそうだね。フッフ。

早く会いたいよ。

入り口へと向かう。

車輪の痕。

馬と言っていたから馬車はあるのかもね。

この車輪に沿って歩いていけばどこか村には着くのだろう。

一応道もあるようだしね。

・・・アスファルトで舗装されていない道路を歩くのは久しぶりだね。

ガサツ。

音がした。

・・・風か。

犯罪行為をしているのは理解している。

捕まる訳にはいかない。

早く村か街に着くといいのだけでも。

「はぁ・・・はぁ・・・」

4・5時間は歩いただろうか・・・

こんなに歩いたのは久々だね・・・

整備されていない道というのはこんなにも疲れるものなのか・・・

「お腹が空いたな・・・喉が渴く。」

そういえばお昼を食べないでこちらへ来ていたね・・・

1日何も食べていないのか。

夜になってしまったね・・・外で寝た事は1度もなかったね・・・

せめて火があれば良いのだが・・・
異世界だと言うのなら魔法などがあれば楽なのだがな。
空を飛んだりするのは気持ち良さそうだな。

FFやDQよろしく手から火でも出ればいいのにな。

「ファイヤー・・・」

出るわけがないか。

ポツという音がした。

なんだ？今の音は？

手を見る。火が手の数cm手前にある？直径10cmぐらいの炎の塊のようだね・・・。

これはどうした事か。

この世界には本当に魔法があるのだろうか？

いやいや有り得ないだろう？

・・・消えるのかこれは？

「・・・消えて下さい。」

消えた。

「ファイヤー。」

手元が光る。

フッフ。野口君。私は手から火が出るようになったよ。

多分君は、羨ましがらるだろうね。

火とか主人公の特権だろうに。

私よりも野口君に魔法を使えるようにしてあげてくれると良かったのだけどね。

すごい良い笑顔が見れそうだな。

うん。想像の中とはいえ良い笑顔だね野口君。

私も笑顔になってしまおうよ。

明るくなってきたね。

うたた寝ぐらいしか出来なかったね。

さすがに寝れないか……。
歩こう……。歩かないと野口君に会えないぞ……

陽射しが強いね。

日焼けか……。ずっとしてなかったね。

小さい時はずっと外で走り回っていたから黒かったしね。

今は外で遊ぶという事も無くなった。

白くなってしまったね……。

人が騒いでる声が聞こえた……。

お祭り？

助かったというべきか。

せめて水が欲しい所だね……。

「うわぁー！」

「モンスターがきたぞー！」

……。この村は避けるべきか……。
なんだあの猪は……。大きいな……。人の2倍はありますね……
どこの恐竜ですか。

何を喋っているか聞こえないね……。

頭が働かない。

……。大きい人が3人出てきたね。

大丈夫なのでしょうか？

私に魔法が使えるというのなら、この世界の人にも使えるだろう。

……。剣か……。嫌な事を思い出すね。

……。人が飛んだね……。

はあ……。

まあいい。なんでもいい。あれを倒せればご飯を食べれるだろうか。
「ファイヤ。」

これはどうすればいいのだろうね。投げればいいのかな？

上に放り投げてみる。ボールのようだね。

あたってください。出来れば1発で倒れてほしいね。

オーバースローで投げる。

綺麗に飛んでいく。

人のほうに……。

私にコントロールは無いようだね……

モンスターのほうを見る。

火の弾が曲る。

……意識すれば曲ると。

当たったね。

300mは離れていたのだが良く当たるものだ。

的が大きいのもあるね。

声が聞こえる。

燃えている……。

倒れたね。

申し訳ない猪さん。私のご飯の為に死んでください。

「お嬢ちゃん!!助かったよ!」

「いえ、お礼よりも……ご飯とお水を下さい。」

ぽかーんとした顔をしていますね。

それはそうでしょう……見た事も無い格好をした女があんな大きな猪を倒し。ご飯をくれと催促しているのですから。

「あつはつは!お嬢ちゃん!腹が空いてるのか!いいぞいいぞ!俺の宿にこい。」

「お腹が空きました・・・」

ぱくぱくと食べていく。

塩味が基本なのだろうか。

「お嬢ちゃん・・・その体のどこにそれだけ入るんだよ・・・」
しまった食べ過ぎましたか・・・。

ぺたぺたとお腹を触る。

「すみません・・・2日程何も食べていませんでしたので。」

「そうなのかい？見た所良い所のお嬢ちゃんのようにだけでも。」

「道に迷ってしまつて。」

嘘は言つていないだろう。道は道でも世界の道を間違えてしまつて
いるわけだが。

「ハツハツハ！いいぞ。どんどん食べる。」

・・・食べれるうちに食べましょう・・・次はいつ食べれるか分
りません。

「ふう・・・」

お腹いっぱいですね。

「お嬢ちゃん強いな。俺も村の中じゃ強いほうだったんだが。」

「いえ、それ程でも。」

「あの猪は畑を荒らしまわつていてな。助かったよ。今日の夜はあ
れを料理するから楽しみにしてな。」

ぼたん鍋でしょうか・・・ちょっと楽しみですね。

「ああ・・・俺の名前はアルフっていうんだ。」

アルフさんですか。私は偽名とか使つたほうがいいのでしょうか・・・

・いやどこから名前が野口君に届くか分かりません。

「南です。久坂 南です。」

「家名が南？珍しいな。」

・・・家名？苗字のことでしょうかね。

「いえ、違います。ミナミ・クサ力です。久坂が家名ですね。」

「ミナミ嬢ちゃんか。で・・・あの火はどこで覚えたんだ？」

ん？珍しいのだろうか？

「私の国の国民的英雄の勇者さんから教えて頂いたのですよ。」

嘘ではないだろう。存在はしていないが。

「ハツハツハ！勇者か！うちの国の勇者とどちらが強いのだろうか
！今回の勇者は強いからしいからな。」

・・・冗談でしょう？

悪の大魔王でもいるのですか？この世界には？

・・・冗談であってください。

すごい嫌な予感がします。

「母ちゃん！あれどこやったっけか！あの紙！」

・・・冗談・・・ではなさそうですね・・・証拠品を見せられそうです。

「ああ・・・これだこれだ。国から配られた紙だな。」

我が国イスターナ皇国に新たな勇者が誕生した。

名はカツヤ・ノグチ。

聡明であり力は強く、モンスターが太刀打ち出来ない程の俊敏さをもつ。

それに加えて若く、猛々しいほどだ。

長い文章を纏めるとこんな感じだね。

・・・野口君、私が苦勞している間に君は王宮にいたのかい・・・
・・・なんで君はこう面倒ごとの中心にいるのかな・・・。

・・・絶対に君は姫様やメイドさん達にフラグを立てているのだからね。

優しいからね。

フフフフフ。今から会うのが楽しみだよ。

君が鼻の下を伸ばしているのだったら、殴って蹴って……

そして抱きしめて。
日本に帰ろう。

ここは私達の居る世界では無いのだからね。

知っているかい？野口君。

勇者というものは脅威が終わった後は厄介者でしか無いんだよ。

第3話・村へ。(後書き)

第3話読んで頂きありがとうございます。

第4話：思い出と共に。

「ふう……」

ここに来て……何度ため息をついたかな……。
たった2日。

まだ2日なのか。

1年分は何かあった気がするな。

「ミナミちゃん？貴女……昨日？寝てないでしょう？目の下に隈
ができてるよ。それにご飯を食べた後ずっと欠伸してるじゃない。」
ああ……アルフさんの奥さん……。

「上の部屋にお湯もつていくから、体を拭いたら1度寝たほうがい
いわ。女の子がそんな顔をしていては駄目よ？ああ、着替えは部屋
に持っていくわ。」

「ありがとうございます。」

せつかくの好意だ……休ませて貰おう。

……眠いね……。

それに体が拭けるのは有り難い。

昨日は何も出来なかったからね……髪がぺたつとしてて気持ち悪
い……。

「夜になったら起こすわ。夜ご飯は美味しいものがたべれるわよ？」

「楽しみです。」

猪を食べるのは初めてだ。美味しいのだろうか？

制服を脱いでベッドの上に。

硬いベッドだね……いや贅沢だねそれは。

横になれるだけでもありがたい事だ。

お風呂は無いのだろうか？シャワーぐらいありそうだが・・・？
いや、ありそうだが一般には出回ってないのだろうか？
体を拭く。

髪を濡らし汚れを落とす。

「ふふ。こんなに髪が伸びると大変だな。」

昔は短かった。男の子とほとんど変わらなかったな。

野口君。君は髪の長い子が好きだと思ったのだが、どうなのだろう
ね。

女性らしくなろうとしているのだけでもね。

？・・・？

小学2年生になった。友達も出来た。そして・・・

「おい久坂！勝負だ！」

「なんだい？野口君、またかい？昨日負けたばかりだろう？」

「うるせえー！昨日の事なんかしらねえー！」

「うるさい。」

「・・・ともかく勝負だ！」

「良いよ。では、あの木までどちらが早いか。どうだい？」

「今日はまけねえ！絶対に泣かせてやる！」

「泣くのは君のほうだと思っけどね。」

「ふん！いくぞ。よーい！」

「どん。」

二人で走り出す。あの木まで100mと言った所かな？ランドセル
は重いけども調子は悪くない・・・勝ったね。

「くそっ！なんでお前そんなに足が速いんだよ！」

「フフフ。野口君には負けられないからね。では、私は宿題があるから家に帰るね。」

「いやいや！じゃあどっちが宿題を早く終わらせられるか勝負だ！」

「いいよ。じゃあ私の家に行こうか。」

「おう！今度は負けねえ！じゃあランドセル置いてから久坂の家にいくな！」

「期待しているよ。」

「お母さん、野口君が後で来るから、来たら私の部屋に通して欲しい。」

「仲が良いのね。分かったわ。後でジュースもっていくわね。ふふっ。」

”優しい優しいお母さん。”

今考えるとすごく野口君の事を気に入っていたのだろうね。”

「ただいま！」

大きな声だね……。2階の私の部屋まで声が聞こえてきたよ。後、ここは君の家じゃないよ。野口君。

「久坂ー！きたぞー！」

「よく来たね。どうぞ。」

学習机ではなく足が短いタイプのガラステーブルに二人で座る。

「はい。」クッションを手渡す。

「さんきゅー。ってなんでパンダなんだよ！」

「君はパンダみたいだからね。」

「どっついう意味だよ！」

「うるさい。」

「俺は算数のドリルだ！久坂は？」

「漢字の書き取りだね。」

「じゃあ勝負だ！よいい！」
「どん。」

二人で黙々と宿題を進めていく。
今日は静かだね。

野口君もやれば静かになるんじゃないか。

「・・・うーん。えーっと。あー！・・・ここが。」
「うるさい。」

静かだと思っただらうるさかった。

「野口君、君は喋らないと勉強が出来ないのかい？」

「うるせー！良いのか？喋ってて？俺が勝っちゃう・・・」
「終わったよ。」

「・・・また負けかよー！」

「算数はどこをやっているんだい？」

「算数なら得意だよ。見て上げられるかもしれない。隣に座るね。」
「・・・お、おう。」

「なんで顔が赤いんだね？野口君。」

「うるせー！赤くなんてねーよ！」
真っ赤だよ野口君。

コンコン。

ノックだ。お母さんが飲み物を持ってきてくれたのだろう。

「二人共。勉強ばかりしていると頭痛くなっちゃうわよー。少し休憩したらどう？」

「そうだね。野口君休憩にしよう。」

「はー・・・つかれたー半分は超えたな。」

カフェオレが私の所に。野口君の所にオレンジジュース。
美味しい。喉が渴いてたのだろうね。

いつもより美味しく感じる。

「おーい久坂ー！」

「南でいいよ。」

「み、・・・それは名前だろ？ちつつち！」
「なんだろうその仕草は。また漫画の影響かな。」

「久坂！ライバルはな！名前で呼ばないんだ！まあ俺が勝ったら呼んでやつてもいいかな？」

「残念だね・・・野口君にこれから先、一生名前を呼ばれないんだね・・・。」

「一生俺が負け続けかよ！！」

「うるさい。あ・・・黙ってしまつては駄目だよ。さっきは何で呼んだんだい？」

「あ、あ・・・なんだっけ？」と首を傾げている。

「私に聞かれても困るな。」

「そうだそうだ。久坂つてなんでかふえおれなんて飲んでんだ？それすげー苦いだろ？」

「美味しいよ？飲んでみるかい？」

カップを差し出す。

「う・・・・・・飲んでみる。」

「なんで顔が赤いんだい？」

「うるせー！」

一口舐めるように飲んでいるね。野口君。犬のようだよ。

「にげえー！超にげえー！なんだこれウルトラにげーんだけど！」

「うるさい。」

「・・・」

「・・・美味しいのだけどね。野口君には早かったようだね。」

「な！おばさん！俺も明日からかふえおれにする！その勝負買った！」

勝負では無いのだけどね。

勝負だしたら私はもう飲めるのだから、私の勝ちが決まつてしまつている。

けども私は笑顔で答えた。

「ああ、良いよ勝負だよ野口君。」

「本当に二人は仲が良いのね。」

お母さんが笑っている。

すごく嬉しそうだ。お母さんが嬉しいのは私も嬉しい。

? . . . ?

? . . . ?

小学5年生になった。

雨の日だった。

お母さんが死んでしまった。

今日はお母さんのお葬式だ。

「酷かったらしいね。トラックとトラックに挟まれ . . . 。」

「しっ。子供がいるんですよ?」

そんな声が聞こえる。

「庭に行つてきます。」親戚の叔父さんに伝える。

庭へ向かう。

なんでだろうね。

唐突すぎて実感が湧かない。

ぽっ

ぽっ

雨の音が聞こえる。

庭についた。

誰がいるようだね。

「うっ . . . 叔母さん . . . 。」

野口君のようだね。

「あ、久坂 . . . 叔母さん . . . 死んじゃったん . . . だな。」

「そうだね。」

「なんでだろうな。」

「なんでだろうね。」

「久坂・・・落ち着いてるんだな。」

「そうだね。落ち着いているというかは・・・。」

ぽっ

ぽっ

雨が少し強くなったようだ。

「野口君、そこにいると風邪を引いてしまっよ。家に入ろっ。」

庭から家へ視線を移す。

「ああ・・・そうだな。」

・・・抱きしめられた。

「どうしたんだい？」

「・・・」

「ふふ。私を抱きしめなくなったのかい？野口君も男の子だね・・・」

「。」

「南・・・。」

「おや？名前では呼ばないのではないのかい？確かライバルは名前で呼ばないのでは？」

「そんな昔の事・・・良く覚えてるな。」

覚えてるよ。

ずっと野口君、君の事を考えていたのだから。

「南、俺お前が頼れるようなやつになる。」

「そうかい。」

「お前がいつでも泣けるようにしてやるよ。」

「そう・・・かい。」

「もう5年も一緒にいるんだからな。南の考えてる事ぐらいは分かる。」

「ふふ。すごい自信だね。」

「ああ俺達はライバルだからな。」

「そして幼馴染と。」

「そうだ。」

「そうだね。」

雨の音が強くなる。

「野口君。そろそろ抱きしめられていると窮屈なのだが？」

「・・・！」

「顔が真っ赤だよ。」

「うるせー！」

「うるさいよ。」

笑えているだろうか。

大丈夫だろうか。

いつもの私になれただろうか。

「野口君勝手に女の子を抱きしめた罰だよ。」

「うつ・・・なんだよ・・・。分かったわかあ！なんでも

こい！」

「そこに正座で座ってくれ。」

座った。

「足を崩してくれてもいいよ。痺れてしまいそうだからね。」

「・・・正座かよ・・・ぶつぶつ。」

私は野口君の足に頭を置く。

「な！あ！」

「これが罰だよ。少しの間庭が見たいんだ。こうしていてくれるか

い？」

「・・・はあ・・・分かったよ。」

？・・・？

あれからだったね・・・もう6年・・・いや7年か？
伸びる訳だ。

チリンと音がなる。

そういえば持ち物にはこれがあったね。

忘れていたよ。

ずっと・・・つけていると持ち物というか、私の体の一部のような
感じがしてね。

チリン

チリン

音が鳴る。

片方だけの小さなリングイヤリングの音が鳴る。

第4話：思い出と共に。（後書き）

第4話読んで頂きありがとうございます。

第5話・ピンチ？（前書き）

第5話：ピンチ？

ドン。

ボタン。

すごい音がしている。

目が覚めてしまった・・・まだ明るいな。

数時間は寝れたのだろうか？

それにしてもこのパジャマは・・・一気に目が覚めるね。

ミニにしても程があるだろう。

膝丈で薄い一枚だけと・・・まあ寝る分には楽で良いのだけどね。

ドアが開く。

なんだろうね。

「お前がミニミ・クサカか？」

全身鎧が5人と。

顔が分からないね。

とりあえず違いますと答えておこつ。

「違います。人違いでは？」

「嘘をつかないでもらえるかな？」

後ろの人が兜を外した。

ああ・・・エル・・・なんとかさんか。

「俺がいるからな、顔は覚えていてよかったよ。俺の主がお待ちだ。

一緒に来てもらおうか。」

・・・追いついたのか。

さすがだね・・・。

アルフさん達に売られた・・・？

いやどうだろう。

まあそんなのはどうでも良い事か。

「お嬢ちゃん逃げる!!」
フルプレートの一人に体当たりをするアルフさん。
「アルフさん。止めて下さい。貴方が死んでしまいます。」
さすがに体格が良いアルフさんとはいえ鎧と剣持ちに素手は危ない。
「私なら大丈夫です。安心して下さい。」
「・・・お嬢ちゃん・・・。すまん・・・騎士さん方許してくれ・・・」
「ふん。今回は見逃してやる。少し時間をやる。村にこの娘を連れて行くことを伝えて来い。同意の上だとな。」
「くっ・・・分かった・・・。」
同意とは言い難いですけどね。

「こいつを縛れ。」

「縛ったら同意の上に見えないのでは？後、出来れば着替えさせて欲しいです。」

火を出したほうが良いのだろうか・・・

いや・・・殺してしまいかねないね。

人殺しというのはしたくない。

「着替えさせる訳が無いだろう！何を隠しているか分からないのだからな！」

おや・・・緑髪の人だね。・・・ピッコロさんみたいだね。

「何を笑っている。」

「いえいえ、私の知り合いにとても良く似ていたので。」

「手を出せ。縛らせてもらう。右手を隊長と繋がせてもらう。」

・・・縄ブレイですか。

「変態ですね。寝着に縄で手繋ぎなど。」

「ふん。言っている。隊長！準備出来ました。」

「よし行くぞ。ミナミ制服が入った袋は預からせてもらう。」

「匂いは嗅がないで下さいね。」

1 日外を歩き続けた制服・・・汗もかいたからね・・・。

「誰が嗅ぐか！」
「それは良かった。」

馬車へ連れていかれる。

「すみません、アルフさん。ありがとうございます。ご飯美味しかったですよ。」

「・・・私の為にそんな顔をしてくれるんですね。さっきあったばかりですよ。」

「何も出来なくて・・・すまねえ・・・」

「いえ、ご飯美味しかったです。体も洗えました。睡眠も取れました。すごく助かりました。」

「・・・頭も働くようになりました。」

あの状態で捕まっていたら錯乱した可能性もあるでしょう。本当に助かりました。アルフさん。

「行くぞミナミ。乗れ。」

「はい。引つ張らないで下さい。エルさん。」
痛いですよ。

ガタッ

ガタッ

音がする。

馬車には私とエルさんだけと・・・暇ですね。

沈黙は嫌いではないのですけど苦手・・・ですね。

「ミナミ、何故・・・逃げた？」

「説明しづらいですね。」

予知が起きたといって信用してくれるでしょうか？無いですね。

「まあ・・・良い。一応強盗の罪なんだがな。そんなのはどうでも良いらしい。」

「そうなのですか？」

「つきりそれで捕まえられたと思ったのだけでも・・・？」

「主が呼んでいる。俺はお前を連れて行く。それだけだ。」

「そうなのですか・・・エルさんは何歳なのですか？」

「25だ。そんな事を聞いてどうする？」

「暇つぶしです。付き合ってください。こことは違う世界があるとは思いますが？」

「あるわけがないだろう・・・ああ勇者はどこから来るのか。という事か？」

頭は良いほうのようですね。

「勇者は娘が生み出すものだ。生殖的ではなく。儀式によって生み出される。」

「お姫様が・・・ですか。」

お姫様が野口君を呼んだと。

では、何故一緒に来た私がここにいるのでしょうかね。

「先代の勇者は10年前に来た。だがすぐにモンスターに殺された。さすがにあの勇者ではどうにもならなかったのだろう。」

「どういう事ですか？」

「歳が62歳と言っていたな。確かに雰囲気は強者のそれだったが・・・さすがにあの高齢では無理があるだろう。」

「・・・それはその勇者さんも大変でしたね・・・。」

ご冥福をお祈りします。見たこともない勇者さん。

こんな世界に呼ばれてさぞ大変だったでしょう。

「ミナミ、お前は今までの勇者達と同じく黒髪だ。何か関係があるのか？」

「一緒の学生でした。と言って信じてくれますか？」

「はっはっは！笑い話だな！そんな事があるわけが無い。お前が勇

者の仲間ならばここから逃げるのも容易いだろう。先代の勇者ですら何匹もモンスターを一人で狩っていたのだからな。」

「そうですね。突然変異で黒くなってしまったんですよ。」

「まあその黒髪のお陰で主に呼ばれたのだろう。良かったと思っておけ。」

「ええ。有り難いことです。罪にも問われないのですから。」

ガタ

ガタ

馬車が揺れる。

情報が少し集まってきたね。

・・・予知というのは外れないのかな。

今までののは夢通りに動いてきたので分からないが。

・・・逃げても縛られる。

いや・・・動いたから縛られている。

多分動かなくても縛られる結果にはなっていたんだろうね。

昔も私がかくじを引かなくても一緒にいた誰がかくじを引いて当てて、
いらぬものだったりして私にくれる。そういう事になっていたの
かもしれない。

確かこれは・・・なんというんだったかな？結果が一緒なのを・・・
タイム・・・・・・・・いいか。

次は野口君の事・・・。

野口君はよっぽど強くなっているようだね。

あの猪やこの鎧を来た5人では適わない・・・と。

後、黒髪がよっぽど珍しいですね。

あの大きな屋敷の主さんが私に会いたくなるほどと・・・
最悪、火を出して逃げるべきなのでしょう。

私は野口君以外に体を差し出す気など無いのですから。

・・・野口君。勇者だというのなら今がピンチだよ。
助けには来てくれないのかな？

第5話・ピンチ？（後書き）

第5話読んで頂きありがとうございます。

第6話：そして振り出しに。

また振り出しに戻ってしまったか。

スゴロクで言うところを出したらスタートに戻るがあった気分だね。

憂鬱だ……。

一体何時になったら野口君に会えるのだろうか。

「エル・シユタイン様お戻りになりました！」

メイドの人達が世話しなく動いているね。

「マールさん。ミナミを着替えさせてくれ。」

「はい。エル様。」

では、ミナミ様こちらへ。」

「逃げるとは思わないのかい？」

当然だろう。女の人1人ならば逃げられない事は無さそうだ。

「逃げれるものなら逃げてみる。マールさんは俺より恐ろしいぞ。」

「……」

「では、ミナミ様こちらへどうぞ。」

いきなり笑顔が恐ろしくなったね。

取り合えず話を聞いてからにしよう。

「ミナミ様、こちらのドレスに着替えて頂きます。」

真っ黒なドレスだね。

「なんでですか？」

「主様がこちらのドレスに着替えて連れて来いとおっしゃっております。」

「どんな趣味なのですか……。」

「では、失礼します。」

ワンピース型のパジャマを一気に脱がされた。

「え？あの？」

「足を上げて頂けますか？下着も黒のものが似合うと思いますか？」
「いやいやいや頭が真っ白に一瞬なっただよ？」

「一人で着替える事が出来ます。下着は大丈夫です。」

「そうですね、ではお願い致します。」

ふう……さすがに人に着替えさせられるは少し……ね。

……何故そこから離れないのですか？

「そこにいと着替えづらいのですが？」

「脱がしましょうか？」

……怖いとはこういう事か……。

ドレスに袖を通す。

ふむ……似合うのだろうか？

「良くお似合いですよ。少し髪を梳かさせて頂きますね。」

「ありがとうございます。」
似合うそうだ。

野口君に見て欲しい所だね。

けれどもドレスを着させてどうするつもりなのでしょう？

「主様という人は、何を考えているのですか？」

「私達は主の命令に従うだけです。」

「そうですね。このメイド。」

「メイド、ではなく侍従です。」

瀟洒じゃないメイドさんですね。

「では、主様の所までお連れ致します。」

「はい。」

歩く。歩きづらい……ヒールが高い靴は歩きづらいな……。
普段はほとんどローファーだからね……。

コンコンコン

「主様。ミナミ様をお連れ致しました。」

「ああマールか入れ。」

エルさんもいるようだね。少しは安心。・・・出来るわけがないだろう。

あまりに安心出来ないから顔見知りがいるだけで安心してしまった。

「ほお・・・良く似合ってるじゃないか。さっきの情婦のような格好も良かったがな。」

「変態ですね。エルさん。私はどちらに座れば？」

奥に30台の銀髪の男性の方がいる。

これが主様と。

マールさんが主さんの横に行ったね。

入り口から入って右にエルさん。

私は左かな。

「ミナミ、お前はそこだ。」
指を指された。

「床に座るのはちょっと・・・そこまで変態だったのですか？あつ後マールさん、グリユツデルを下さい。」

ブルーゲンはコーヒーのようなもの。グリユツデルはどんなのか試してみたかったのだ。

「お前・・・自分の立場が分かっているのか？はあ・・・私の反対側の椅子に座れ。」

「ええ。分かっていますよ。あそこの主様は私に用があるのでしょ？それも私に大きな利用価値があると。内容までは想像出来ませんでしたね。このドレスはその為に必要な事。そんな所でしよう。」
エルさんの顔が引きつりましたね。

「ミナミ。お前は馬鹿な振りをしているのだな。何故わざわざ？」

「乙女の秘密ですよ、エルさん。」

「まあいい。主、ミナミ・クサ……」

「お前がミナミ・クサカか？」

主様が喋りましたね。さて何の用でしょうかね。

「そうです。私に何の用があつてここまで大事にしたのですか？」

「ミナミ・クサカ。俺の娘となれ。」

……首を傾げる。

何故かすごい突拍子も無い事を言われたような？

「ミナミ・クサカ。俺の娘となれ。と言ったのだ。」

「聞こえていますよ。理解が出来なかつたのです。」

「ふん、まあ良い。俺の娘となつたら、服も食べ物も好きにさせてやろつ。」

……そんなのが聞きたい訳ではないのですけどね……。

「理由はなんですか？」

「勇者の陥落だ。まさか、こんな近くに勇者を落とせそんな奴がいるとはな。その黒い髪。」

勇者と同一のものだろう？エルに聞いた時に閃いてな。同郷とまでは言わんでも勇者と話すにはうつつつけだろう？」

まさか野口君に会わせてくれるのだろうか？

これは願つたり叶つたりですね。

他にも理由はありそうですね。

「そうなのですか？勇者という方と結婚。それが理由と。」

「ああ、結婚は無理だろうが、勇者と深い繋がりをもつ。それがお前に与える条件だ。」

それさえ出来るのならば、何でも願いを叶えてやろつ。」

……結婚は無理？

異世界で野口君と擬似結婚も悪くないね……と考えていたのだが？

「何故、結婚は無理なのでしょう？」

「はっはっは！面白い事をいうやつだな。勇者はノーラ姫と仲が良
いというのが国では一般的だと思っていたのだがな！お前みたいな
無知もいるものなのだな！」

眉間に皺が寄ったのが分かりました。

くーるに行きましよう。くーるに。落ち着いて。

「そうでしたか。それはそれはノーラ姫とやらはそれだけお綺麗な
のでしょうね。」

言葉に棘がいつぱいついていて気がするね。

「うむ。勇者はノーラ姫と毎晩・・・」

びきっ

・・・カップにヒビが入ってしまいました。

「マールさん。これを・・・すいません。」

「俺の名前はトラビア・シュタイン。ミナミ、お前はミナミ・シュ
タインとこれから名乗り1月後の夜会に出てもらう。」

「夜会というのは1ヶ月後しかないのですか？・・・と、その前に
エルさん・・・？なんで貴方は警備なんてしているのでしょうか？」

何故主と同じ家名を持つ人が警備なんて？

「長男は対外的な事を。次男以降は家の事を。王都の家には執事の
3男もいるぞ。全て家の事に関しての長は家の者がやる。ああマー
ルさんは別だがな。あいつは別格だ。」

「1月以上後がいいのか？そうなるとノーラ姫と勇者が結婚しかね
ないな。」

「いえ、違います。明日出発しましようと言っているのです。」

悠長に構えている気などありません。

「そこまで、勇者を落とす自信があるのか・・・？」

「ええ、勿論。」

目を合わせる。

揺るがせない。

真剣勝負だね・・・。

「・・・分かった。マール、明日王都へ行く準備だけ済ませておけ。

後、グーラ卿が開く夜会が7日後にあったな。一人走らせる。3日で行かせて夜会に出席すると伝えておけ。」

「畏まりました。主様。」

野口君、すぐ行くよ。

お姫様と二人で何をしていたのかじっくり聞かせてもらおうじゃないか。

「忘れていたな。マール、飯が終わった後こいつに作法を仕込んでおけ。」

「畏まりました。」

・・・作法・・・私も忘れていたね。

野口君と会えるだけで良いと思っていたのだがね・・・。

ああそうだ。トラビアさんに言わないとね。

「トラビアさん。これから、よろしくお願いします。」

「えらく殊勝になったな。先程とは別人のようだ。」

「ええ、私は貴方の娘なのでしょう?」

「そうだな。」

「お義父様”これから、よろしくお願いしますね。」

・・・先は長いね。

まあ1歩ずつ進んでいこう。

焦れば焦る程遠くなるものだからね。

第6話・そして振り出した。(後書き)

第6話読んで頂きありがとうございます。

第7話・お風呂回。(前書き)

第7話：お風呂回。

・・・豪華ですね。

食事となったのですが・・・フォークとナイフですか。純日本人の私には辛いですね・・・。使えないという事は無いのですが。

「ミナミ、食べ終わったか？」

遠いですよ。お義父様。

5m近くは、ありそうですね。

「はい。大丈夫です。」

「そうか。マール、この後は任せたぞ。」

「畏まりました。」

「では、ミナミ様。城でといますか、常識的に使われる貴族の作法を教えさせて頂きます。」

「一般常識も教えて欲しいのですが・・・。」
色々と質問もあるのだが、

「王都まで、どれぐらいかかるのですか？」

「馬車で5日程ですね。街道に沿っていればほぼ、モンスターも現れません。」

そこらへんはRPGの様なだね。

道に沿っていると敵が出づらい。不思議だね。

「モンスターという存在は・・・。」

「ミナミ様、先にドレスを脱がせて頂いてもよろしいですか？」

「ええ、構いません、一人で・・・。」

「では、失礼します。」

・・・早いですね・・・

「これは良いのです・・・よね？」

下着を指差す。

「ええ、何着もあるものです。ドレスに関しては胸のほうと裾のほうの調整が必要です。」

「大きすぎましたか、いやはや困りました。」

「いいえ、まったく逆ですね。胸はあまり気味、裾は引きずり気味・

・・・新しいドレスの寸法を王都へ一緒に送っておきます。」
うるさい。

少しくらいはお世辞をいつてくれても良いではないか。

「ミナミ様、先程のお話は？」

「えっと・・・」

何だったかな。ああそうだモンスターの事が聞きたかったのだね。

「モンスターの定義を教えてくださいませんか？」

「モンスターとは動物が大きくなったものを言います。大体が2倍〜3倍と行った所でしょう。稀に5〜10倍といった大きなものがあります。数年に1度大掛かりなモンスター討伐が王都で行われるので、そこまでの大きさのものはほとんど存在しません。

他に人に寄生する類でしょうか。」

・・・人に寄生？そんなものまでいるのかい？

「人に寄生するものは1年以上身体の奥に住み込んだ病気が刺青と現れます。そうした人は凶暴になり力が増し、理性を失うと聞きました。私も見た事はありませんので何とも言えませんが。」

・・・それはモンスターではなくただのイカれた狂人なのは・・・刺青が現れる以外はこちらの世界でもいる可能性はあるね。多分理性を失って人間の力を100%引き出したのだらう。

人間は30%程度の力で日々生きていると聞いたからね。

一般人の全力でも50%といったところかな？

アスリートでも70%も出せないものだろう。

「ああ・・・後、」

ん？なんでしよう・・・？

「人外と言ったら言い方が悪いのですが、モンスターとほぼ大差が無い理性を保った人間もいると聞きました。

なにせ300年以上生きて、人の世を自由に駆け回っていると聞きました。」

「何を言っているのですか？150年以上人が生き続ける事が出来るのですか？」

ありえないだろう？確か人間の脳や身体はどんなに見た目が若くとも150年までしか持たないと聞いた。DNA上不可能という事だね。

「ええ、私達は100歳まで生きられたら奇跡でしょう。」

ですが・・・何事も例外があるので。

その人は時を操り、自分の姿を若いまま保ち続けていると聞きました。

まあ噂の類です。本当に存在するのかも分かりかねます。」

はあ・・・日本に連れ帰ったのならば、億万長者になりそうな人だね。

現代科学で不老不死を解明出来るチャンスじゃないか。

人間の昔からの大願だね。

まあ噂の類・・・いや、ここは異世界何があっても可笑しくないと思う。

いや、100%いると考えましょう。

話の流れ的に私が聞かなくても出て来た答え。

神様。いるのかは分かりませんがシナリオ通りと言った所ですか？

歩き方を習う。

動き方を習う。

お辞儀の仕方。

「ふう・・・疲れたね。マールさん、一緒に来て練習に手伝って欲しい所です。」

「主命がありましたら。」

喋り方。

笑顔の作り方。

「ミナミ様は万能ですね。元々そのような事を習っていたのですか？」

「そう・・・ですね。先生が優秀だったのでしょう。」

「そうですか？ありがとございます。」

普段のお喋りが少し硬い所がある私としては、楽なほうではあった。

「笑顔が硬いのが難点ですね。」

「頑張ります。」

笑顔が硬いのは許して下さい。

「もう遅いですから、本日は休みましょうか。」

「そうですね・・・疲れましたね。汗もかきました。お風呂に入りたいですね。」

外は真つ暗だね。

また拭うだけなのだろうか・・・そろそろ髪が洗いたいな。

「でしたら、主様に許可を出して貰いましょう。3日に1度なのですが1日ぐらいいは良いでしょう。」

お風呂があるのですか？浴槽は無いと思っていたのですが、これは嬉しい誤算ですね。

言ってみるものです。

「ふん、良いだろう。用意しておけ、俺も入りたいからな。先に入っているマール。」

「畏まりました。」

「一緒に入るのですか・・・さすがですね。」

制服を脱いでお風呂に入る。

大きいね、10人は一緒に入れそうだね…

「ミナミ様。髪と体を洗わせて頂きます。」

「一人で出来るのだがね…。」

断つてもしてくるだろうね…。」

まあ、髪は助かるかな・・・いつも一人だと大変だからね。」

「綺麗な髪ですね。ミナミ様。このような黒髪手入れが大変でしたしょう。」

「そうですね。お風呂には毎日1時間程入っていましたね。」

「・・・いちじかん？どれぐらいですか？」

「・・・時間の概念がないのかな。」

「1日は何刻ですか？」

質問に質問で答えてしまいました。

「1日は24刻です。」

ああ、これは楽だね。」

「1刻の事ですね。」

「そうでしたか、それは大変ですね。」

「苦労はなかつたけどもね。楽しかったよ。」

野口君は・・・この髪が好きだったからね。」

1回髪が野口君に当たった時、何しやがると言いながらも顔は赤かったからね。」

良い匂いがしただろう。フッフ。

「ミナミ様、そのお顔ですよ。」
何をいつているのかな？

「そのお顔が出来るのでしたら、勇者様とはいえ男です。簡単に落ちるでしょう。」

「どんな顔をしていましたか？」

「とても優しく、誰かの事を思う笑顔でしたよ。思い人がいるのですか？」

「いませんよ。いるとしたら勇者さんの事を考えていたからですかね。」

「それはそれは相思相愛となるとよろしいですね。」
そうだね。

どうなるかは分からないけどもね。

ぺた

音がした。

「ミナミが洗ってもらっていたか。マール俺も後で頼む。」
何をしているのでしょうかこの馬鹿は。

「何をしているのですか？お義父様？」

タオルらしき布で身体を隠して聞く。

「何を言っているのだ？風呂に入りに来たのだが？ここは俺の風呂だからな。」

・・・そうですよね。

そんなの気にしなそうですしね。

「死んでください。」

お腹を殴った。

「マールさん……髪は私自身で洗いますので、お義父様を洗ってあげてください。」

「畏まりました……」

悶絶してますね。

そこまで痛かったのでしょうか……。

湯船に浸かり、身体を休ませる。

「ミナミ。こんな事で恥ずかしがっていては……」

「近づかないで下さい。」

イケメンでも許されないことはあるのですよ？

「まあ良い……。明日の朝出る。今日はきちんと身体を休めるのだぞ。」

はあ……まあいい。

なんでも良いのだろう。

ここはこういう世界。

貴族とはこういうもの。

気にするだけ無駄でしょう。

野口君。

……お姫様と一緒にお風呂なぞ入っていないだろうね。

……無理かな。

フフフ。

そんな事を考え……。

私は湯船に身体を預けていました……。

第7話…お風呂回。(後書き)

第7話読んで頂きありがとうございます。

第8話：魔法。思い出と共に2。

「……て下さい。起きて下さいミナミ様。眠いです。」

「起きて下さい。」

まだ暗いじゃないですか。

「起きろ。」

・・・

「起きないと……脱がしますよ?」

目が覚めました。

「そういうのは良くないと思います。」

「おはようございます。ミナミ様。主様が下で待っています。お早めに。」

ワンピース……ですか。色は薄い青と……。

制服以外のスカートなどあまり着ないのですけれどもね。

肩が出ていて少し肌寒いですね。

出来れば羽織る物が……

「ミナミ様、こちらを。」

ストールですね、暖かいです。

「ミナミ起きたか。目は覚めたか?」

「大丈夫です。まだ暗いのですが。」

「早めに行動しなければ間に合わないからな。ここから王都まで5日、あちらに着いてからは1日しかない。用意もしなければならぬいからな。早く着くに越した事はない。」

「そうですね。」

それもそうですね。お義父様も準備があるでしょうしね。

馬車というのは初めて見ましたね。

北海道に行けばまだあるのでしょうか……？

……ありそうですね。無さそうですね。

イメージはぴったりののですが。

「ミナミ、手を出せ。」

なんででしょう？

「はい。」

引っ張り上げられました。

すごい力ですね。

「ミナミ様。主名があったため、王都まで馬車の御者を務めさせて

頂きます。」

マールさんも一緒だね。

「エルさんは行かないのですか？」

「エルは離れられん。俺が居ない間は家の事は全てあいつが取り仕

切るのだからな。」

そうですね。

ガタ

ガタ

馬車が揺れる。

森の中を馬車が走っています。

……ん。中々風情のある体験ですが。

暇ですね。

お義父様は本を読んでいます。

私も欲しいですね。

「読みたいのか？」

「どんな本を読んでいるのですか？」

目も合わさしないで良く私の考えてる事が分かりますね。

「王とは。という本だな。」

「王様が書いた本なのですか？」

「違うな。王の側近が書いた本だな。王に必要なもの、今の王はここが素晴らしいという本だな。」

「それは・・・面白そうですが遠慮しておきます。」

それよりも聞きたい事がありました。

「お義父様。手から火の球を出す事は可能なのですか？」

「不可能だな。」

・・・不可能を可能にしたのですか私は。

「ですが私が捕まった村で、火の球を出して大きなモンスターを倒した人がいました。」

「それは、火の球ではなく矢だろう。この力は誰にでも使える。だが媒体が必要だ。」

媒体？何か必要なものがあるのでしょうか。

「ふん。見せてやろう。マール馬車を止める。俺の剣を寄こせ。」

どういう事でしょうね。

ズ、ズズズ・・・

・・・木が大きくなりました。

「これが俺の力だ。土の力だな。」

剣で木を斬り付けました。

傷一つ有りませんでした。

そしたら木が大きくなりました。

これは不思議ですね・・・。

魔法というのは便利ですね・・・。

「このようにな。俺はこの剣が媒体だ。

何か媒体を用意し、想像する。

それを行う。

それにより結果が伴う。

手から火が出るといふ事はあり得ないのだ。武器となるものが必要なのだからな。」

「その媒体というのは、どうしたら手に入れられるのですか？」

「ずっと使い続けているものだ。それも思いを込めてな。

人というものは、消費する生き物だ。一つのものを使い続けることは不可能に近い。

服などはずっと使うものもあるだろう。だが、思いを込めて使い続けるか？」

「……そうですね。ほとんどの人は使い続ける事が出来ないでしょう。」

「俺のこの剣は剣を初めて握った時のものだ。この剣でモンスターを斬る事はない。

例え、折れてしまったとしても使えるだろうがな。」

「とても大事なもののですね。」

「ああ。父からもらった。初めての俺の物だ。」

通りで短いわけですね。お義父様の身長には合わないものだと思います。

「……では何故、私は火を手から出せるのでしょうか。」

「……これでしょうか。」

耳をさわる。

装飾品というのは珍しいのでしょうかね。

ああ……これは野口君から貰ったものだからでしょうか。フッフ。そういえば、中学生の時からずっと着けていますしね。」

？・・・・・・・・・・・・・・・・？

中学にあがったある日だった。

「南！南！チョコくれよチョコ！」

野口君？突然だね。

「野口君、何を言っているのかな？チョコレートは私の栄養素なんだよ？君は私から栄養素を奪ってしまうのかい？君はなんて残酷なんだい……。このチョコレートは私のもの。君にあげるチョコレートなんて無いよ。」

「そんなの初めて聞いたわ！……ん？お前コーヒーとか好きなのになんで甘い物が好きなんだよ。」

「それにはまったく関連性がないね。苦い物が美味しいからこそ甘い物が倍美味しくなるのじゃないか。何故、私からチョコレートを奪おうとしたんだい？」

「ああ……。俺の学校の奴がな。明日はバレンタイン。だから誰が何個貰えるか勝負だと言ってきてな……」

「で、まんまと勝負と言われた野口君は挑発に乗ってしまったと。」

「う……。良いじゃねーか！南くれよ！1個ぐれー良いだろ？」

「ご愁傷様。チョコレートを1個も貰えなかった野口君。」

「うるせー！まだバレンタインは始まってないねえ！」

「うるさい。」

「……。はあ……。まあしょうがねーかー明日になれば誰かから貰えるかもしれないしな。」

「そうだよ野口君。明日になったら下駄箱や机の中にも入ってるかもしれないよ？」

「そんな漫画みたいな事ありえねーよ！」

「そうなのかい？」

「南！南！」

声が大きいのよ野口君……。

「どうしたんだい？」

「これ見てくれよこれ！チョコだぜ！下駄箱に入ってたんだ！いやー昨日はあんな事いっただが、漫画見たいな事って本当にあるんだな！」

「良かったじゃないか。野口君はもてもてなんだね。」

「いやー良かった良かった。あいつら1個も貰えてなかったからな！今日は俺の圧勝だったな！」

1個は勝ちに入るのかな……？0と1なら勝ち……なのかな。低レベルな争いだね……。

「誰かは知らないけど嬉しいな！結構入ってるみたいだから南一つ食べるか？」

「いや、遠慮しておくよ。」

「遠慮しないでいいんだぞ？お前の栄養なんだから？」

「それは野口君の事を思って誰かが作ってくれたものなのだから野口君が食べるべきだよ。」

「そうか。そうかもしれないな！じゃあ早速1個。」

……鞆から水を取り出す。

「かれえ！超かれえ！なんだ……ゲホッ……ウルトラかれえ！」

「はい。野口君。」

「さんきゅ……なんでこんなに辛いチョコが……」

「それはタバスコチョコだね。野口君は甘いものが苦手だったろう？」

「……ん？南！てめえ！何しやがる！死ぬかと思ってたわ！」

「頑張ったのだよ……？」

「う……はあ……初めて貰ったチョコがこれかよー！」

「そうかい。では、2番目も私だね。」

「……ん？何が2番目だった？」

「南！よお！」

声が大きいの野口君。

「どうしたんだい？野口君？」

「いやー今日はホワイトデーだろ？これさ、南の為に買って来たんだよ！」

小さな箱が渡される。

「そういえば今日はホワイトデーだったね。忘れていたよ。ありがとう野口君。」

「選ぶの苦労したんだぜ！マネージャーに入れ物とか売ってるお店聞いてな！すげーファンシーなお店で入るの苦労したんだぜ。」

「そこまでしてくれたのかい？嬉しいね……。本当にありがとう野口君。」

「お、おう。飴程度でそんなに喜んで貰えるとは思わなかったわ。」

「こづいっちは気持ちだよ？野口君。……なんで目が泳いだのかな？」

「いや、早く渡したくて走ってきたからな！息があがっちゃまって！」

「そうなのかい？それは悪い事をしたね。では1個もらっね。」

丁寧に包装を解いて1個口に運ぶ。

「ケホツ……ケホツ……野口君……？」

「へっへー！引つ掛かった！バレンタインの仕返しだよ！」

「そうなのかい？では来年のバレンタインを楽しみにしているんだね。精々今後1年間は夜、一人で外を歩く時は背中に気をつけると良い。」

振り返り歩く。少し嬉しかったのだがね。

「怖っ！なんだその台詞！おい南！待て、待てっば！」

「まだ、何かようかい？」

「こっち見るよ。」

「なんだい？」

振り向いた。

頭の上に何か乗つけられた。

「これは？なんだい？」

大きくなつたね。野口君。上を見れないと顔が見れないね。

「まあ！またな！」

走って行ってしまった・・・足が速くなつたね・・・。

昔は私に負けていたというのに・・・もう勝てる事はなさそうだね。

？・・・・・・・・・・・・・・・・？

チリン

昔は両方あつたイヤリング。

今は片方しかない。

けれども大事な、大事なもの。

「何を笑っていたのだ？」

「少々、昔の事を。」

「ふん。いつもその顔をしておけ。」

そうすれば勇者に限らず、世界中の男を虜に出来るぞ。」

「無理・・・ですね。」

お義父様、これは野口君と一緒に無いと出来ませんよ。

第8話：魔法。思い出と共に？。（後書き）

第8話を読んで頂きありがとうございます。

第9話：そして王都へ。

1日が過ぎた。

森を抜けた。

モンスターには合わなかったね。

けれどもお義父様は強いのでしょうか。

あれだけの事をしてしまうのですから。

「マールさん。お疲れ様です。変わってあげれば良いのですが。」

「いえいえ。お気遣いならさらず。」

広大な平地だね。

道がなければどこへ向かっていいのかも分からないね。

日本では見れない光景かもしれないね。

日本は山があるから地平線まで平地というのは見れるものじゃない。

「広大な平地だね。」

「ミナミ様の住んでいた所は違うのですか？」

「街だったね。大きな建物がそこかしこに建っていた。」

「ミナミ様の住んでいた街はとても栄えていたのですね。」

「そうだね。これだけ大きな土地というのは残っていませんでしたよ。」

「土地が無い程建物があったのですか？」

「そうだね。見渡す限りの建物ばかり、農作物を建築物の中で作り出した時は正気の沙汰なのかと疑ったよ。」

「それは、それはその国はいずれ近い時、滅ぶでしょうね。」

「何故そう思うのだい？」

「あるがまま、ありのまま。それが出来なくなった国から滅ぶものですよ。」

「そうなの・・・かもね。」

「どうやって育てているのは想像出来ませんが、その国は余程切迫

した状況なのでしょうね。」

「切迫はしていなかったとは思う。けれども・・・時代の変換期だったのだろうね。」

「まあ、この国も切羽詰まった状況なのだろう？勇者を召還してまでモンスターから守ってもらうなどしている国に未来はあると思えないのだが？」

「どうなのでしょう。ですが、モンスターに関しては勇者など必要ありません。王都やその周辺の街々はモンスターなど脅威では無いですね。」

「・・・モンスターは脅威ではない？では・・・何故勇者を？」

「なんで勇者を呼ぶのですか？」

「知らないのですか？まあ前回起こったのは100年前と言われていきますからね。もう誰も生きていた人はいません。」

「何があつたのだろう？」
「100年前。隣国のエルニール帝国は1度滅んでおります。」

「滅ぶ？人災や災害で？」

「それは何故？」

「ええ、災厄と言われる自然災害みたいなものと聞いております。」

「災厄？」
「なんだろう？それは。」

「その時に我が国では全ての騎士が集まり、エルニール帝国を救援に向かいました。」

「ですがその騎士達で帰ってきたものは十数人。それも途中で危険と判断し、隊長の方々が逃がした者達のみと。」

「・・・それは大災害だね・・・。」
「全滅と言うわけだね・・・。」

「その時に地底から一人の黒髪の青年が現れたそうです。」
「それが・・・勇者と言うわけですか？」

「それはそれはその黒髪の青年はなんて事をしてくれたんだろうね。」

「その青年はその災厄に一人で立ち向かい、そして、災厄が消えた。」

瞬間にその青年は剣を杖にそのまま死んでいたそうです。」

「美談だね。」

御伽噺のようだ。．．．勇者は死んでなお、その災厄からこの地を守った？

おかしくないだろうか．．．野口君と同じように呼ばれたのだったら私だったら絶対に拒否するね。

何かの理由があつたのだろうか？

．．．野口君がその勇者足りえると．．．野口君に死ねと言つのか。この世界は。

いや．．．100年前と言つていたではないか。時代が違う。死なないでなんとかなるのかもしいないね。

けれども、勇者足り得る何かが必要と。

．．．伝説の剣やら伝説の鎧でもあるのかな？

．．．まあ災厄．．．か悪の大魔王みたいなものだろう。

これを倒せば元の世界へ．．．

来た．．．

こちらの世界に来てから眩暈の頻度があがりすぎだね．．．

．．．

「ミナミ！やめろ！」

「どうしてだい？野口君は．．．本当に．．．私の事が．．．」

．．．

．．．なんだろう今のは．．．

．．．最初に見た夢と関係があるのだろうか．．．？
いやまったく違う風景なのだろうか？

．．．分からないね．．．

繋がりが無いように思う。

けれども実際に・・・いや・・・1度思考を止めよう。

これは迷路に嵌るパターンだ。

1度落ち着いて・・・

「ふう・・・」

「ミナミ様！ミナミ様！どうしたのです？顔が真っ青です！」
呼ばれていたようだね。

「大丈夫です。マールさん少し休めば治ります。」

「そうして下さい。主様！」

「どうした？ミナミどうした、その顔は。」

「大丈夫です。お義父様。横にならせてもらいます。」

「ならいい。少し横になっている。マール！少しの間馬車を止めておけ。俺は狩りにでる。」

「畏まりました。主様。」

2〜3時間は寝ただろうか。携帯を見る。

・・・電池がなくなっていたね。そういえば最初の日以来1度も携帯をいじっていなかったね。

元々あまりいじらないほうだったからね・・・。

「ミナミ様？起きましたか。顔色は・・・大丈夫そうですね。」

「ご心配おかけしました。」

「こちらを。ウサギ肉と山菜が入ったスープです。」

・・・お義父様が取ってきてくれたのでしょうか。

「ありがとうございます。マールさん、お義父様。」

「いえいえ、私は料理をしただけです。御礼ならば主様のほうへ。」
・・・寝ていますね・・・。

「お休みのようですが・・・？」

「久々の狩りで疲れたようです。最近は狩りなどしませんでしたか

らね。」

「・・・フフフ。」

お義父様、ツンデレでしたか。

「・・・獣臭いスープです。インスタントのスープのほうが美味しいけど暖かいスープだね・・・それだけで十分美味しい。」

「ふふ。獣の匂いがするでしょう？野生の動物の肉というのは熟成させなければ本当の味にはなりません。」

「すごく美味しいです。本当に。」

「そう言っただけで頂けると助かります。」

「ミナミ、体調管理はきちんとして。お前は勇者に会うのだから？俺はその品物を運ぶだけだ、その後はお前の役目だ。そんな顔をしていては勇者にも振り向いてもらえないだろう。」

「ご忠告ありがとうございます。お義父様、起きていたのですね。」

「ふん、俺は寝る。後1日もすればイクエルに到着する。ゆっくり休みたければそこまで我慢しろ。」

お義父様や、エルさん、マールさんやアルフさん・・・なんだかんだ言っただけで助けられてばかりだね。

一人では今頃食事にもありつけていなかったのだから・・・。何かしてもらったならば返さなければね・・・。

野口君。君も助けしてくれる人が近くにいるんだろうね。

異世界に飛ばされて一人で大変だとは思っている。けど、助けしてくれる人もいるのだからきちんと恩は返すのだよ。

「・・・ふふ。」

思わず笑ってしまった。

高校に入ってから私が心配する事などほとんど無く、私が心配されてばかりだったのだからね。小学生の時に戻ったようだね。

・・・いぢぢぢぢぢ・・・ 舞へぢ無くな。

第9話・そして王都へ。(後書き)

第9話読んで頂きありがとうございます。

第10話：砂糖菓子のように甘い時間の終わり。

・・・街が見えてきました。
確か・・・イクエルと言いましたか？

「ミナミ様、イクエルに到着しますよ。本日は宿に泊まれそうですね。」

「嬉しいですね。さすがに馬車の中というのは身体が痛くなります。ところでお義父様？」

「なんだ？」

「この街には何があるのでしょうか？」

「何も無い。ただの拠点だな。王都へ行くまでの拠点と行った所だな。」

「・・・なんてつまらないだろう。」

「ここは異世界らしく、冒険者ギルドとか。」

「迷宮とかモンスターの巣窟が近くにあるとか無いのでしょうか？」

「言っておくが王都の近くにそんなものがあるほうが不自然だろう？」

「なぜ、私の心の声に分かるのですか？」

「顔を見れば分かる。」

「そんなに分かりやすかったですか？」

「あからさまにつまりならぬような顔をしたからな。」

「わざとですよ。」

「そうか。」

「この国は結構平和なのではないだろうか。」

「広大な森、そして土地。」

「あの大きなモンスターさえなんとか出来れば・・・。
いや駄目です。」

「戻れない事など考えては。」

野口君と一緒に戻ると決めたではないですか。

何がなんでも帰ってあの甘味所にいかなくては・・・

・・・チョコレートも食べたいです。

コーヒーも飲みたいです。

この世界は色々足りないものが多いのですから。

・・・甘いものが食べたいですね。

糖分が不足している気がします。

「お義父様、甘いものが食べたいです。何か甘いものを希望します。

」

「何を突然。イグルでも食べたいのか？」

・・・イグル？なんでしようねそれは。

「イグルとは何ですか？」

「砂糖菓子だな。子供が食べるものだな。」

砂糖はあるのですね。

楽しみが一つ出来ましたね。

街へ馬車が入る。

入り口でマイルさんが門の人と少し話をしていましたね。

何かあるのでしょうか？

ガタ

ガタ

石畳の通路を進んで行く。

石で出来た街並み、これはこれはすごいですね。

日本とは違うのが分かります。

煙突らしきものがそこかしこに立っています。

暖炉があるのでしょいか？少し楽しみです。

スノーボードに行った時に泊まったホテルには暖炉がありませんが、

あれは良いものです。
眠くなります。

「おい主人」

馬車の中から露天の人に話かけていますね……。失礼ではないのでしょうか？

「ど、どうか致しましたか！？何か失礼でもありましたか！？」

「違う。イグルを1つ売ってくれ。」

「へ、へい！今すぐ用意致します！少々お待ちを！」

……。露天の人がすごい焦っているのが分かりますね……。

これは、私が欲しいなどと言ったせいなのでしょうか……。

不可抗力だと思いたいですね……。

「お待たせしました！お3方でしたよね、2つはあっしの気持ちです！貰ってくださいえ！」

……。何故そこまで媚び諂うのでしょうか……。

「ふん……。有り難く貰っておこう。マール、謝礼を渡しておけ。」

「……。ありがとうございます！こんなによろしいので？」

「構いません。これは主様の家証かしょうです。次からはここで商売をする時はこの家証をつけて商売して下さい。」

「……。へい。大事にいたしやす。」

……。なんでしょう……。この違和感。

貴族の家紋らしきものを渡して、それをつけて商売をする。

その看板を背負う。という事はブランドが付くという事ですね。

ブランドがあれば品質に問題ないという事になる。お客さんも沢山入るでしょう。

……。その代わりがありそうですね。

売上げの数%はシユタイン家に入るとい事でしょうかね……。まさか私の我俣からこんな事になるとは……。

貴族というのは買い物も大変なのですね。

「お義父様は、もしかして偉いのですか？」

「気にするな。それよりも食べ。お前が欲しいと言ったのだろう？」

「そうですね。では一口。」

小さなフォークで刺す。透明な固形物のキューブですか。柔らかいですね。

キャラメルみたいです。

「すごい甘いですね……。」

「そうだろう？だから言っただろう。子供の食べ物だと。」

水あめを固めたキャラメルと言った所でしょうか。

「美味しいですよ。」

けど食べたいものとは……少し違うね……。

「宿へ迎えマール。いつもの所だ。」

「畏まりました。」

……砂糖はある。牛乳らしきものは料理に入っていた。パンはある。バターは確か牛乳を振れば作れる筈でしたね。

クッキーが作れそうですね。

ふふふ。

都へ行ったら作るのも良いですね。

野口君も食べたがりそうですね。

作って持っていくのも喜んでもらえるかもしれません。

……大きい宿です。横に……。

日本の建物は上に上に大きくしますからね。

広大な土地があるこの世界は高さよりも横幅という事でしょう。

「失礼します。」

「これはこれは！シユタイン様！本日は当宿をご利用ですか？」

「ああ、いつもの部屋を用意してくれ。」

「畏まりました。おい！あの部屋の客を違う部屋へ移動だ！すぐ用意いたします。」

「分かった。待たせてもらうな。」

ロビーらしき所の椅子に座る。

柔らかいですね。

「・・・ふう・・・じゃないですよ。人をどかしてまでその部屋なのですか？」

「ミナミ様。主様が泊まる部屋はそこ以外に無いのです。誰が泊まっていようと関係ありません。そこのお客様も主様が来たと分かれば快くあけてくださいます。」

「どういう事でしょうね・・・。」

・・・貴族専用部屋。という事でしょうか。

「おい！お前か！私を部屋から追い出すなどと・・・。」
金髪です。歳は50前後と言った所でしょうか・・・。
貴族の方でしょうか？

「・・・失礼致しました。シユタイン様でしたか。すぐに部屋のほうは空けさせて頂きます。おいお前ら！部屋の物の移動を手伝ってこい！」

・・・お義父様。

想像がつかしました。

何故、私を勇者に近づけようとするのかも。

・・・大きな部屋です。30人は泊まれるのではないのでしょうか・・・。

インテリアは暖色系で落ち着いていますね。

ベットは柔らかいですし。

食事も期待出来そうです。

「お義父様。少しお話が。」

「なんだ？」

「お義父様はすごい偉い方なのです。それも、この国で並ぶ人がほぼ居ない程の。」

「そうだ。」

「勇者に私を近づける理由はそれが一番の理由ですね？」

「そうだ。」

「お義父様は、次の王候補と。そしてそれにはノーラ姫と勇者が結婚というのが邪魔と。」

「ノーラ姫が勇者と結婚する。という事は勇者が次の王になる。その可能性が高い。・・・高い所ではないのでしょうか？確実と。」

「そうだな。」

「私を勇者に近づけて、ノーラ姫と勇者の仲を今の最高の状態から少しでも落として欲しい訳ですね。結婚してくれば最高。最悪勇者の気を引いて結婚を王が死ぬまで伸ばしてくれれば良いと。」

「ふん。そこまでは考えてはいないがな。」

「どうでしょうね。」

「お姫様はどうなるのですか？」

「飾りになるだけだ。俺の養子としてな。」

「王様は何歳ぐらいなので？」

「70を超えている。」

「そうですか。」

「そういう理由でしたか。」

「トラビアさん」。良いですよ。その策に乗らしましょう。」

「・・・私も野口君を取り返せれば、それで良い。」

「そうか。」

「子供ばいかもしれませぬね。」

「そうですね。」

「優しいだけでは貴族なんて出来ませぬ。」

・・・少し嬉しかったんですけどね。
お父さんと呼ぶのは久しぶりでしたしね。

・・・早く野口君に会いたいな。
早く帰ろう。この世界は私にとって毒でしかない。

第10話：砂糖菓子のように甘い時間の終わり。(後書き)

第10話読んでいただき有難うございました。

第11話：思い出と共に3 " お父さん " ;

あれから一言もトラビアさんと話をしていない。
今までは普通に話が出来ていたのだけでもね。

「ミナミ様、朝食が済み次第出発致します。」
マールさんが呼んでいるね。

「はい。」

不思議な気分だね。

朝だから頭が働いていないのかな。

カタン

カタン

馬車の車輪の音が鳴る。

朝食の味を覚えていないね。

残念だね。

せつかくのご飯は美味しく食べたい所だよ。

目の前がゆっくり動いてゆく。そのような気がしたのだろう。

馬車が倒れてゆく。

何故？

頭が働いていない。

大変だ。

それだけしか分からない。

どう動けばいいの分からない。

・・・誰かに抱きしめられた気がする。

「なんでですか？2・3日ではなかったのですか？」

「え、ええ。その検査でお父さんは……」

「南、お父さんに何かあったら、親戚の叔父さんを頼りなさい。」

「何かなど無いのでしょうか。私達は二人の家族なのでから。」

「そう……、だな。」

「お父さんは、後3ヶ月も生きてはられないでしょう。」

…… 呆然とはこの事でしょう。

何も言葉が出てきません。

何を言っているのでしょうか？

「心の準備はしていて下さい。」

「南……すまないな。お前には苦勞ばかりかけた気がする。」

「苦勞なんて無いですよ。家事も上手になりました。」

「そうか。」

「今度暖かいご飯作ってあげますね。家に帰ったら食べましょう。」

「そうだな。楽しみだ。」

「ええ、楽しみにしていて下さい。」

雨の降る日でした。

そういえば……お母さんの時も、雨の降る日でした。

今朝、お父さんは死んでしまいました。

何故なのでしょうね。

病院を抜け出して来てしまいました。

ポツ

ポツ

雨が・・・、髪が濡れて気持ち悪いです。

・・・こんな所まで来てしまいました。

昔、野口君と遊んだ広場ですね。

・・・ふふ・・・小さい時は楽しかったです。

野口君となんでも勝負をして、

お母さんとお父さんにその事を話して、

二人は笑顔でしたね。

私は笑顔になれる・・・のでしょうか？

「・・・何故なのですか？神様？」

「私が何かしましたか・・・？」

「この未来を見る力。

何の役にも立たない未来を見る力。」

「小さい時から私に関わることなら教えてくれていたでしょう。」

「引いたら1等が当たることが分かった。明日、雨が降ることが分かった。」

「なんで・・・なんで！そんな小さな事しか教えてくれないのですか！」

「お母さんも！お父さんも！早く分かっていたら助けてあげられたかもしれません！」

「なんでなのですか！」

「お母さんは、一緒に車に乗っていけば教えてくれたのですか！」

「お父さんは、もつと一緒に居る時間があれば教えてくれたのですか！」

「何故……なんですか……。」

ぴしゃん……。

足音がした。

「南……？」

「……野口君？なんでここに？」

「……え？未来が見える……？な、なんだそれ？意味が分からないぞ……？え？え？え？」

「……南……お前小さい時から準備万端だったのって……え？俺との勝負とかも？テストとかも……？」

「違う！野口君！信じてくれ！そんなに役立つものなんかじゃ……」

「うるさい！なんだよそれ！信じられるかよ！」

「野口君！」

「……野口君……足が速くなったね……。」

「……一人になってしまった。」

「……どうして……こんな事になるのだろうね……。」

神様が本当に居るのだとしたら……大笑いでもしているのでしょ
う。

私のこの様を見て……。

夏になった。

「南ちゃん、本当にいいのかい？うちに来ていいんだよ？」

「ええ、有難う御座います。ですが……中学校を卒業するまでで良いのです。この家に居させて下さい。」

「……本当は駄目なんだろうけどね……毎日うちに電話してくる事。1週間に1度は顔を見に来るよ。もし駄目そうだったら。」

「はい。駄目そうだったら叔父さんの家にやっかひになります。」

……未練でしょうか。

何の？

お父さんとお母さんの。

……そして野口君の……。

今まで以上に勉強をした。

料理も上手になった。

スポーツも前より出来るようになった。

……なんてだろうね。

満足出来ないよ……。

イヤリングにふれる。

チリンと音が鳴る。

ふれる。鳴る。

冬になった。

受験が終わった。

無事に合格したようだ。

誰も周りに居ないね。

それはそうだろう。

合格発表から1日経っている。

人もまばらでしょう。

春になった。

「・・・実感が湧かないね。」

中学を卒業した。

卒業式の日、

皆が泣いている。

私は一人で校舎を歩く。

3年間のお礼を言いに先生の所へ行く。

一人で校舎を出た。

家へ戻る。

「残念だね・・・」

せつかく近くの高校に受かったというのに。

ぼん。

肩を叩かれた。

振り向く。

頬を叩かれた。

「痛いじゃないか。何をするんだい？」

野口君？」

今更どうしたんだい？」

「南。殴れ。」

「何をするんだい？と聞いたのだけでも？」

「南、俺の事を殴れ。」

「何を言っているのかな？ついにM属性にでも……」

「巫山戯るのは無しだ。」

「そっかい。」

では、遠慮無しに。」

バキッ

良い音だね。

「いってえ！南！お前本気で殴りやがったな！眩暈がすげーんだがすげーふらふらすんぞ！」

「女の子の頬を叩いてそれだけで済んだのだから喜んだほうが良いよ。」

「・・・南。悪かった。おじさんが亡くなって泣きたいのはお前のほうだったのに・・・俺も動転してた。」

「もう1発殴ろうかい？人の心情を勝手に決め付けしないで欲しいね。」

「悪い・・・なんて言えば良いか良く分からなくて。」

「・・・良いよ。野口君、君は仲直りに来たのかい？」

「そうだ。南、お前は俺の一番のライバルで・・・幼馴染だからな。」

「そうかい。でも残念だね。」

「何がだ？」

「私は春休みが終わったら、遠くに行く。」

「なんでだよ！ああ・・・そうか・・・親戚の所にか。」

「良く分かつてるじゃないか。さすが幼馴染だね。」

「行くな！」

「野口君に引き止める権利があると思うのかい？それに今更だろう？」

「行くなつて言ってるだろ！」

「・・・抱きしめる権利もあるのか・・・と言いたいね・・・もう高校生だよ・・・？私達は。」

「行かないで・・・くれ。」

「・・・泣く程かい。」

「一生の願いだ。」

「・・・君は一生のお願い事をそんな事で使って良いのかい？もう2度と願い事が叶わないかもしれないよ？」

「構わない。」

「・・・早いね。」

「ああ、構わない。」

「ふう・・・」

電話を取り出す。

かける先は叔父さんの所だ。

「・・・そうかい。娘も楽しみにしていたのだがね。お姉ちゃんが出来るって。」

まあ、南ちゃんが残りたいんじゃないね。

今までと同じで1週間に1度は顔を見に行くよ。

暇があつたら電話しておいで。

後、その野口君も連れて一緒に1度ご飯でも食べに来ると良い。」

「ええ。いつか一緒に連れていきます。」

「・・・あれは南もわりーだろー！未来とか言ってるしな！あんな状態だから嘘なんか言ってるよーにみえねーしよー！」

「うるさい。・・・嘘ではないけどね。」

「まあなんでも良いわ。南は南それだけだろ。その未来が見えるつーのはテストとかには使えなかつたんだろ？」

「そうだね。そんな便利なものなら学校になんていかないね。」

「そうかもしれないな。・・・けど自分の身の回り限定ねえ・・・微妙だな。」

「微妙だね。何も役立たない能力だよ。」

「まあ便利だと思うけどな！明日雨が降るって分かれば濡れる心配がなくなる！」

「天気予報を見ればいいじゃないか・・・。」

「・・・それがあつたな！」

「うるさい。」

「桜が綺麗だね。」

「ああ3月だからな、今年は早かったみたいだな。」

「桜は良いね……。甘そうで美味しそうだ。」

「チヨコにでも見えたか？」

「それは無いね。」

「そう言えば南、どこの高校にいくんだ？」

「ここから一番近くの高校だよ。」

「……。南……。？お前遠くへ行くって言ってなかったか？」

「そうだね。そう言ったね。」

「詐欺だろうが！！俺の涙を返せこの野郎！どうなってやがんだ！

！！このペテン師野郎！」

「……。野郎ではないね。涙は私の制服と野口君の制服と地面に吸われてしまったね。……。舐めるかい？……。それとも舐めたいかい？ふふふ。」

「なめねーよ！」

「おや？野口君？制服のボタンがないよ？」

「え？あー第2ボタンはマネージャーに取られた。」

「そうなのかい。人気者だね。」

「なんで第2ボタンなんて欲しがるんだろうな？」

「理由は知らないね。」

「南欲しかったか？」

「いらぬかな。第2ボタンなんてもらってもしょうがない。」

「そうだよなー！第2ボタンなんてもらってもしょうがないよな！」

「そうだね。だから私は第1ボタンを貰おう。」

「なんでだよ！！」

「野口君の一番のライバルであり。」

野口君の一番の幼馴染。」

そして……。野口君を一番に思っている。

「それだけで十分だろう？」

2番目なんてごめんだね。

私は1番目にしか興味は無いよ。」

ブチッ

「あーあー……本気で取るなよ……制服が千切れるかとおもっただろーが……」

「……そういえば野口君はこの高校に行くのだい？」

「話変えやがったな……。まあいいか……」

「で、どこへ行くのだい？」

「初めてだな。」

「何がだい？」

「よろしくな。同級生。」

「……そうかい。よろしく。同級生。」

私は物心ついて初めて泣いた。

？……？……？……？……？……？……？

「ミナミ様！ミナミ様！大丈夫ですか！？」

「……マールさん……ここは？」

「馬車の中です。もう王都へ向かっています。」

「トラビア……さんは？」

「主様は馬車を動かして頂いております。」

「何で……ですか？」

「私では王都へ早く着く事が出来ません。主様自ら動かしたほうが早いですからね。」

「……はぁ……。」

馬車が止まる。

「ミナミ。起きたか？」

「はい。大丈夫です。」

「何者かに馬車ごと倒された。」

「で、私は気絶をしたと……。」

「そうだ。」

「で、抱きしめて助けてくれたと。」

「そう……だな。娘を守るのは親として当然の事だろう。」

「そう……ですか。私を娘と言ってくれるのですか。」

「当然だろう。ミナミ・シュタイン。」

「……ふふ。有難う御座います。”お義父様。”」

「後2日もかからん。今日は休んでいる。」

「……はい。ありがとうございます……。”お父様。”」

「ふん。」

顔を背けてしまいましたね。

……嫌な夢でした。

けども……もう良いでしょう。

引きずるべきではないでしょう。

……お父さん。お母さん。

私は元気です。

第11話：思い出と共に "お父さん " ; (後書き)

第11話読んでいただきありがとうございます。

第12話：実力で。

「ミナミ、起きたか？」

「毎朝確認されている気がしますね……。」「

「当然だろう。お前は立っけていても寝ている時があるからな。」「

「……そんな器用な事をしていたのですか私は……。」「

「まあ良い。先日の件だが。」「

「馬車が倒された件ですか？」

「ああ、一応聞いておけ。馬車の襲撃犯は物取りの類だった。」「

「……本当ですか？」

「ありえないでしょう？」

「建前上はな。確実に勇者派だろう。そんなものは気にもとめないがな。」「

「そうでしょうね。お父様はそういう人でしょう。」「

「貴族同士というのも一枚岩ではないのでしょうか。」「

「お父様の味方はいるのでしょうかね。」「

「……そういえば。」「

「お父様？」「

「なんだ？」「

「聞き忘れていました。私が勇者と近づくのは良いです。」「

「そうだろうな。」「

「……忘れていましたね。何故でしょう？」「

「……お父様がノーラ姫と結婚すれば良いのでは？お父様はまだ若いでしょう。お姫様も20歳前後なのでしょう？それで万事解決になるのでは？」「

「ふん。俺は婚姻などせん。子供も嫁もいらん。」「

・・・政治とかそういう風な意味だったのですが・・・。

「政略結婚という意味だったのですが？」

「無いな。」

・・・何故でしょうか？

「足枷でしか無いのだからな。俺は王になりたいのだ。王というのは名ばかりの女王の側近になどなりたくは無いのだからな。それに加え、災厄というのを他人に頼りきりという今の状況が気に食わん。俺が王になったら勇者の儀式など全てなくして見せよう。」

・・・ふふ。男らしいですね。

「ミナミ。」

「何でしょうか？」

「王とは孤独なものだ。」

「そうですね。」

「勇者も似たようなものだがな。」

国の一番上になるという事。英雄となる事。

人の期待を一身に背負う。

その身の全てを捧げるという事だ。

王とは誇りと穢れの全てを背負い込む代名詞だ。

婚姻すれば、その連れにまで背負い込ませるという事だ。

子供が出来れば、俺はその子供にこの国を継がせたいと思うのだからな。

だが、そうして滅びた国は多くある。

実力が無いものが上に立つ。それ以上に害悪なものなど無い。」

世襲制が大嫌い。

「お父様が王となり、死んだ後は？」

「実力があるものが王となれば良い。俺が実力あるものを指名してもいいがな。」

「そうですね。」

お父様、貴方は王様となる資格があると思いますよ。

石の壁が目の前にある……。
……大きいですね。
イクエルの街の門も大きいものだと思いますが……
比較対象になりませんね。

円状に横に広がる大きな石壁。
どこまでも遠くまで続いていきます。
これは人がしたのでしょうか……
何かの魔法だと思いたいですね。
1年やそこらじゃ作れないものでしょう。

ふう……この門を抜けたら王都だね。
ふふ。

野口君まで後少し。

「シュタイン様！」

おや？一人の鎧の人が来たね。

「義務ですので、シュタイン様にも確認を取らせていただきます。」
「分かっている。」

……目を見ている？何でしょう？

「シュタイン様、そちらの方は？侍従の方では無いようですが。もしありましたら家証を見せて頂けますか？」

「こいつは俺の娘だ。最近養子になったのでな。瞳に家証は無い。」
目に何かしているのでしょうか？

「そうでしたか。失礼致しました。では、王都にいる間に家証をつけて下さい。もしつけない場合はシュタイン様でも外に出る事が不可能となります。」

「ああ、分かっている。」

「どういう事なのでしょうね？」

「王都へは通行証が必要と・・・？」

「ミナミ様。侍従にはこちらがあるのです。」

「カード型の通行証と。家証が彫られているね。」

「これがあれば城にいけると？」

「いえ、違います。これは王都へ入るためです。城へは瞳に家証が無いと入れません。」

「・・・ん、ということとは？」

「マールさんはお城へ入れないのですか？」

「本来ならば。ですが侍従は何人かまで入れます。この黒の通行証ではなく赤い通行証が主より渡されます。その通行証は命を掛けて主を守る証。もし無くしてもしたならば命はありません。」

「厳しいね・・・。」

「マールさんは来るのでしょうか？」

「勿論です。」

「綺麗ですね。」

「そうですか？」

「ええ。」

門を抜けた途端、一面の金色の草原。

「一目見るだけでもお金を払う価値はありそうだね。」

「これは主様が主導を行い作ったシユーレの畑です。20万と言われる王都全ての人の食料となります。」

「・・・シユーレとはなんなのでしょうね。小麦とかの事でしょうか？」

「パンの材料にでもなるのですか？」

「ええ。このシユーレで作ったパンは昔の黒いパンとは比べ物にならないかったです。」

黒いパンとはライ麦の事でしょいかね。
あれは確かにパサパサするイメージですね。

「……そういえばお城はどこに？まったく見えないのだが？」

「王都はどこに？」

「ここから半日は馬車でかかります。」

「……それは見えない訳だ。まだ野口君まで半日もかかるのか。」

「……ふう……まあいいか。野口君は逃げないからね……。」

「野口君とは勇者様の事ですか？」

「……おっと。」

「そうだね。」

「会ったことがあるような言い方ですね。」

「最初にそう言ったはずだよ。」

「冗談にしか聞こえませんでした。」

「そう思ったのはそちらだよ？」

「ええ。ですが本当にお知り合いなのでしたら、主様も喜びます。」

「そうだろうね。ふふ、早く会いたいよ。」

「その……勇者様の事が好きなのですか？」

「……どうなのだろうね。」

好きな事は好きなのだが。

ずっと一緒にいると分からなくなってくるものだよ。

恋人として好きなのか。

幼馴染として好きなのか。

それとも、ずっと友人として一緒にありたいのか。

「……この楽しい関係を壊したくないのだろうね。」

逃げているのかな。

「……野口君は私の事が好きなのかな？」

どうだろうね。

言動を見ているとわざとやっているようには見えないのだけどね。

「・・・どうなのだろうね。」

「複雑なお顔ですね。けどもミニナミ様らしい顔だと思います。」

「そうですね。そんなに私は考え事をしているように見えますか？」

「ええ、勇者様のお話をする時は分かりやすいですね。」

「・・・ふふ、そうですね。」

あまり顔には出ない性質だと思ったのだけどね。

第12話：実力で。（後書き）

第12話読んでいただきありがとうございます。

第13話：クッキー・・・いや違うチョコレートが私は食べたいんだ。

「・・・不思議な感覚だね。」

半日前、王都の門を通ったはずなのに、また門がある。

今度のは先ほどのよりかは簡素なものだが、それでも立派な石造りの門だね。

終わったようですね。

「手続きは終わりましたか？お父様。」

「ああ。久々の王都の家だな。」

「主様、約1月ほど経っております。ルーク様も会いたがっているでしょう。」

「そうか。」

ルーク？誰でしょうね。

「ルークさんとは？」

「シユタイン家3男で王都邸宅の執事長をしています。」

「それはそれは、私にとっては叔父さんですね。」

「・・・そうですね。」

なんですか、その間は。

「・・・お会いになれば分かりますミナミ様。」

「・・・そうですね。」

どんな偏屈な人が出てくるのでしょうか・・・。

「ミナミ様、何か今晚に特別食べたいものはありますか？」

「いえ、特には。」

この国の料理は私の口には少し合わない。

おいしいのだが、海外の料理を食べているという感じだね・・・。

毎日食べたくなる料理ではないかな・・・。

「ああ、そういえばクッキーが作りたいですね・・・。」

「くつきー？とはなんですか？ミナミ様。」

「・・・。」

クッキーとは何か。説明しづらい気がするね。

「・・・作ってみますので食べて判断してください。説明がしづらいです。」

「そうですね。楽しみにしています。何か必要な物がありますか？」

「牛乳、こむぎ・・・いえ・・・シューレを粉にしたもの、砂糖、

バター、卵辺りがあれば良いですね。分からないのはありますか？」

「ギユウニユウですね。それ以外は邸宅にあればあります。」

「・・・牛がないのか・・・この国は・・・。」

「牛の乳なのですが、この国には牛がないのですか？」

「ミナミ、牛は肉だ。それ以外の何物でもない。」

「・・・なるほど。乳牛として育てないと。それは困りましたね。」

「では、先日の料理に入っていた、あの白いのは？というかバターの原料はなんですか？」

「あれは山羊の乳だ。」

「・・・今きずきました。何故バターがあるのですか？」

「それで良いです。」

「でしたら、家に全て揃っていますね。ミナミ様の料理楽しみにしておきます。」

「一つ聞かせて下さい。バターというのはどこから作り方が？」

「先代の勇者だ。あの勇者はバターとチーズを真っ先に作っていたな。」

「・・・何故でしょうね。」

「・・・チーズ・・・チーズ・・・60台の勇者・・・。」

「・・・ああ、もしかして。」

「お父様、この国の一般的なアルコール・・・お酒は？」

「ワインだ。その他にエールや果実酒もあるがワインが主だな。」
「・・・なるほど。よっぽどお酒のおつまみが欲しかったのでしょうかね。」

先代の勇者様はお酒好きと。

「なんだ、ミナミ。酒が飲みたいのか？ついでだ、買っていくか。」

「いえ、飲んだ時はありません。」

「では、今日が始めての日だな。」

飲む事が確定ですか・・・。

ここは異世界ここは異世界。

未成年とかを気にしてはいけませんね。

少し楽しみですな。

「活気に満ちていますね。この王都というのは。やはり人が多い所は違いますね。」

「それはそうだろう。今代の勇者が現れたばかり、それに加えて、その勇者は強い。」

この街の安全はほぼ確実なのだからな。」
安全というだけでこの活気。私達の世界も見習わないといけない所かもしれないですね。」

「ミナミ、どれを選ぶのだ？赤、白、青、黄があるが。」

「では・・・。」

え？なんでそんなに色があるのでしょうか？

信号ではないのですから、そんなに色があっではおかしいでしょう。

「赤は渋味、白は甘味、青は苦味、黄は酸味が強いな。俺は赤を買

おう。店主、赤を20本ほど家へ送っておけ。」

「シユタイン様、畏まりました。すぐにでも送っておきます。」

どれだけ飲むのですか。」

まあ良いです。

「では、青色と黄色を。」

「ふむ。青と黄を10本ずつも一緒に送っておけ。
どれだけ飲むのですか……。」

「……本当に青いですね。少し緑色が入った青色。これは原材料は
なんなのでしょう。」

黄色はまだ良いですが……。レモンみたいな葡萄があるのでしょ
う。」

「ゴーヤみたいな葡萄でもあるのでしょうか……？」

「お帰りなさいませ！主様！」

うるさいね……。それはそうか20人も人が同時に喋ればうる
さいに決まっている。」

「おかえりー！トラ兄ー！……この人誰？」

「……お父様……？トラ兄？」

「トラ兄……ということはこの人がルークさん……？どう見ても
10台前半にしか見えないのですが……。」

「今戻った。ルーク、こいつは俺の娘だ。ミナミという。」

「……え？やったー！ついに僕にも舎弟が！」

「……どういう事なのでしょうね……。」

「マールさん……？」

「はい。あの方がシュタイン家3男ルーク・シュタイン様この家の
執事長をしております。」

年齢は13歳でございます。」

「……執事長が……13歳ですか……。」

「ご心配なさらなくても大丈夫です。シュタイン家の名は伊達では
ありません。すぐに分かります。」

ザッ

ルークさんが私の目の前で直立不動し、お辞儀をした。

「トラビア・シュタイン様の娘。ミナミ・シュタイン様ですね。

初めてお目にかかります、ルーク・シュタインと申します。

トラビア様のお嬢様となられたのでしたら、私の娘共同義。

是非、この館にご滞在をなさる間は、私共を頼りにしてください。」

・・・なんなんだろうこの変わり身は・・・。

「はい・・・ありがとうございます。」

年下に娘呼ばわりされる日がくるとは思わなかったよ・・・。

「分かりましたか？」

「はい・・・否応無く分からされました。」

「ミナミ、クッキーとやらは飯にはなるのか？」

「いえ、なりません。なつても食後のお酒と一緒に食べるぐらいです
すね。」

「そうか。なら作って来い。」

・・・偉そうですね。

・・・偉いんですね・・・忘れていました。

「ルーク様、ミナミ様が厨房を使いたいそうです。一人就けて差し
上げてくれませんか？」

「では、私が就きましょう。」

ルークさんですか・・・仕事は良いのでしょうか・・・。

「ふう・・・いつくよー！ミナミ姉ちゃん！」

手を引つ張らないでくれ・・・。

「ミナミ姉ちゃん料理が上手なんだね・・・。」

「そんな事はないよ。」

「後はこの・・・でろでろーしたの焼けばいいの？」

「そうだね。」

不思議な子だな。

計算づくなのだろうか。

それとも2重人格に近い？

「どっちも僕だよ。」

・・・食べないね。

さすが小さくてもお父様の弟だけある。

「初めて会った人にはこっちの顔はあんまださないけどねー。怒られるし。」

「そうかい。」

ええっとオーブンは・・・ってオーブンが無いのか。

「焼くためのものはどこに・・・。」

「ここだよー。」

石窯・・・そうだね。オーブンなんて便利なものはないだろうね・・・。

「ピザを焼いたらおいしそうだね。」

「ピザ？」

「今度機会があつたら作ろう。」

「たのしみー！」

「それは良かった。」

「おいしそうな色になったね。」

「食べてみますか？」

「うん。・・・おいしい！思ったよりもおいしいね！」

本音がでているよ。ふふ。この正直さは昔の野口君を思い出すね。

「ミナミ、ご苦労だったな。」

「偉そうですね。お父様。」

「偉いんだ。」

「忘れていました。」

「ふん。まあいい。グラスを出せ。」

「・・・マールさんとルークさんの目が見開いていますよ・・・。」

「それはそうだろう？俺自ら注いでやるなど王以外には今まで1度もないぞ。」

「光栄なことです。」

チン

グラスが鳴る。

・・・苦いね。

まだ私は大人では無いからね。

もっと大人になれば分かるのだろうか。

・・・ふふ。野口君と二人でお酒も悪くない未来かもね。

・・・けどワインのイメージはあまり無いかな。

日本酒とかビールとかを飲んでそうだね。

クッキーは薄く焼いて塩味とチーズを乗せた物。

甘くふんわりサクサクとした物を二つ用意した。

お父様はチーズのほうを食べている。

「料理が上手いのだな。」

「それ程でも。」

「明日の夜も焼いておけ。」

「ふふ。気に入りましたか？」

「ああ、娘の作ったものだ。消し炭でも食ってやろうと思っていたのだがな。存外美味しいものが出てきて嬉しい限りだ。」

「うるさい。」

消し炭はありえないでしょう。

・・・ふふ。

野口君は喜んでくれるかな。
明後日には野口君に会える。

野口君もあつちの世界の食べ物が増えていく頃でしょう。
食べたければ3回回ってワゴンと言わせてみるのもいいかもしれませ
んね。

・・・いや、本当にしそつだからやめておきましょう。

第13話：クッキー・・・いや違うチョコレートが私は食べたいんだ。

（後書き

第13話読んで頂き有難うございます。

第14話：クリスマス。思い出と共に4（前書き）

第14話：クリスマス。思い出と共に4

？・・・・・・・・・・・・・・・・？

雪が降っている。

高校生になった。新しい友人も出来た。

「最近は何口君も忙しいようだね。」

一人で桜の木が連なっている所を歩いてる。

冬は冬で雪景色も綺麗なのだけだね。

「後、少いで2年生か。もう1年終わってしまったのだね。」

ぼん

後ろから肩をたたかれた。

「なんですか？」

誰でしょう？

見た所同じ学校のようにだが？

「久坂さんだよね？」

「ええ、そうですが貴方は？」

「俺は高田康孝^{たかた やすたか}。陸上部の部長をしているんだ。」

「ああ・・・野口君の部活の部長さんでしたか。」

「野口・・・。」

「野口克也君ですよ。」

「ああ・・・そういう意味じゃなかったんだ。ごめんごめん。」

顔が歪んだ気がしますね。

「で、何の用事ですか？」

「ごめんね久坂さん。」

年上にさんづけですか・・・何か面倒な用事でもあるのでしょうか？

「久坂さん、俺と付き合ってくれないか？」

「何を言っているのですか？」

「冗談ならばリアクションの良い子を選んだほうが良いですよ？」

「冗談なんかじゃない！俺は初めて久坂さんを見た時から！」

「売約済みです。申し訳ありません。」

「目惚れというのですか。私はあまり信じていませんがね。」

「お気持ちは嬉しいですが、私は恋愛事に興味がありません。」

「・・・本当なのかい？」

「ええ。」

「野口と付き合っているのか？あいつは付き合っていないと聞いたのだけど？」

「付き合っていないません。」

「だったらー！」

「申し訳ありません。」

もっと可愛い子は沢山いるでしょう。

私など相手にして居ないで、他の子に告白すれば良いのに。

貴方のような方でしたらよりどりみどりでしよう。

「・・・少し考えてくれないか？」

「申し訳ありません。」

「・・・そうか。」

告白というのは初めてだった。

恋愛事というのはどうなのだろうね。

野口君の顔が赤黒く腫れている。

「どうしたんだい？」

「なんでもない。」

「本当にかい？」

「ああ、男の意地だ。なんでもねえ。」

「そうかい。」

それは何かあったと言っているようなものだよ？

クリスマスが近づいてきたね。

今年はどうするかな……。毎年食べ物というのも……。餌付けしている気がするしね。

廊下を歩いて考え事をしていた。

「久坂さん！会いたかったよ！」

……。うるさい。

「学校ならばいくらでも会えるでしょう。クラスにすれば良いのです。」

「……。ん。そうだね。」

高田さん。普通は怒る所ですよ？恋は盲目というのは本当なのでしようかね。

「クリスマス、俺と一緒に過ごしてくれないか？」

「何故ですか？」

「良いじゃないか。野口に聞いたらあいつはあいつの好きなようにすると言っていたし。」

何故、野口君が出てくるのでしょうかね。

「どうして野口君が私の予定を決めるのですか？それは当然です。私の予定は私自身が決めます。」

「良いじゃないか！親睦を深めると思って。」

「申し訳ありません。クリスマスは親と一緒に過ごすつもりなので。」

「

「・・・久坂さんの親はもう居ないじゃないか！」

「何を言っているのですか？私は、野口君の親御さんと野口君と過ごすつもりですよ？」

「ぐ・・・。」

「お誘いありがとうございます。私の予定は私自身で決めています。覆すつもりもありません。」

クリスマス・イヴになった。

商店街のイルミネーションが綺麗だね。

「野口君、あの木のイルミネーションは綺麗だね。」

「そうだな。」

「なんだい？こんな可愛い子と一緒にいるというのに冴えない顔をして。」

「そうだな。」

「・・・詰まらないね。いつもなら的確な・・・。」

「野口！！！」

呼んでいるよ野口君。部長さんが。

「・・・高田先輩。」

「お前・・・久坂さんとは何も無いつて言ってただろ！どういう事だよ！なんで二人で歩いているんだよ！」

「高田さん、私達は幼馴染ですよ。小学生の頃から、ずっとクリスマスはこうして過ごしてきました。」

野口君の前に出る。

「ぐ・・・あ・・・久坂さん。」

「高田先輩すいません。南が決めた事なんで、俺は何も言い訳するつもりはありません。」

野口君が私の前に出た。

「・・・良い度胸じゃねーか野口。・・・久坂さんどいていてくれるか？」

「嫌ですね。何が起きるか想像出来ますよ。そういうのは漫画の中だけにしてもらえますか？」

「チツ・・・。」

野口君に何か言っていますね。

「野口君？何をするつもりかな？」

「なんでもねえ。」

「私にも言えないのかい？」

「意地は張り通す。」

「君は本当に正直だね。」

夕方になった。

野口君はどこかへ行くようだね。

ふふ。私を撒こうなど100年早いよ。

「野口。お前南さんとは付き合っていないっていったよな？」

なんで名前で呼んでいるんだろうね。

「付き合っていないせん。」

「あれは幼馴染としてなんだな？」

「・・・ええ。」

高田先輩が手を振り上げたね。

バキッ

「・・・。」

なんで何も言わないんだい？野口君？

「嘘いつてんじゃないやねえよ！あれのどろどろがつきあってねーっていうんだ！」

「嘘じゃありません。」

バキッ

痛そうだね。

ふう……。

「高田さん、もう止めて下さい。」

「久坂さん……なんでここに？野口？」

「言っていないません。」

「言わなくても分かるのです。」

「……ふふ……あはははは！野口！」

野口君の前に立つ。

バキッ

痛いですね……舌を切っていませんか……

カラン。

あ……

グシヤ。

・・・

「高田先輩・・・・・・・・南になにしゃがんだあ！」

野口君・・・・・・・・私が勝手に前に出てきたんだよ・・・

「野口良い度胸じゃねーか！」

30分は経った・・・私は何も口を挟めない。

「チツ。野口・・・・・・・・もういいわ。興味が失せたわ。」

「・・・・・・・・ハア・・・・・・・・ハア・・・・・・・・そうですか。」

高田さんはどこかへ行ってしまったね・・・。

野口君・・・・・・・・？

「南、勝ったぞ。」

「いっぱい殴られていたよ？」

「勝ったんだ。」

「そうなのかい？」

「勝ったんだっての！」

「そうなのかい。」

野口君の首にチョーカーを着ける。

「今日はクリスマスだからね。勝ったのならプレゼントをあげないとね。」

「・・・・・・・・首輪？」

「犬かい？野口君は・・・・・・・・？ワンと鳴いてごらん？ほらお手。」

「誰が犬だつての！いってえ・・・・・・・・唇切ってるわ・・・・・・・・。」

「はい。」

ハンカチで血をぬぐってあげる。

ごっごっごっ。

「いつてええええええ！超いつてえ！！」

「おや？ウルトラはどうしたんだい？」

「ウルトラとかもう使わねえよ！」

心配させた罰だよ。

「なんで最初は殴り返さなかったんだい？」

「殴ったら負けだろ。あーいうのは。俺は負ける為に勝負はせん！」

「そうなのかい？それは男のロマンというやつかい？」

「・・・どうなんだろうな。そうかもしれないな。」

「男のロマンとやらは、私には良く分からないね。」

「そりゃそうだろ。だから浪漫なんだよ。で、この首輪石がくっついてるんだ？」

「首輪じゃないよ、チョーカーだね。手作りで作ってみた。野口君にぴったりの石だよ。」

「どういう意味だ？」

「その石はトパーズだよ。宝石言葉は真の友情。」

「そりゃまあ、俺達らしいかもな！はっはっは！」

「そうだね。幼馴染だからね。」

「ああ、幼馴染だからな。」

野口君の家に着く。

「野口君、ごめん。君からもらったこれを一つ壊してしまった。」

「・・・まだ使ってたのかよ。」

「勿論だね。」

「また、何か買ってやるよ。」

「そうかい、では今すぐジュエリーショップに・・・」

「ちよっとまで！今すぐとはいってねーだろ！」

「ふふ、冗談だよ。今年の野口君のクリスマスプレゼントはなんだ

ろうね。楽しみだよ。」

「う・・・あー！そういえば今年のケーキはチョコレートケーキだと。」

「野口君。早く行こうじゃないか蠟燭ふーは私のものだよ？」

「別に俺はしねーよ！それもそれは誕生日だろうが！なんでクリスマスに蠟燭吹き消さないといけないんだよ！」

それで良い。

いつもの野口君に戻ったね。

「野口君、ありがとうね。」

「何がだよ。」

「全てにだよ。」

「そうか。」

「そうだよ。」

野口君。トパーズの宝石言葉の本当の意味はね・・・。

？・・・・・・・・・・・・・・・・？

第14話：クリスマス。思い出と共に4（後書き）

第14話読んで頂きありがとうございました。

第15話：勇者との邂逅。

良い朝だ。何か不思議な気分だ。

そういえば、久しぶりに自分の力で起きたね……。アルコールを飲むと寝覚めでも良いのでしょうか？

コンコンコン

ノック音がする

「ミナミ様。入ります。」

起きていないと思っっているのだろうね。

そうだろう。

こちらへ来て1度もマールさんに起こしてもらっていない日など無いのだから。

「ミナミ様。起きて下さ……。」

「おはようございます。マールさん。」

目を見開いているね……。

どうしたのだろう？

「主様ー！ミナミ様が一人で起きてくださ……。」

「うるさい。私は子供ですか。貴女は私のお母さんですか。」

「似たようなものでしょう。」

そうですか……。

「本日はこちらを着て頂けますか？」

真っ黒な服だね……。黒は嫌いではないのだけでもコーディネートとしてはどうなのだろう？

「本日は街へ行きますので、少しでもミナミ様に目立って頂かねばいけません。」

「ああ……。少しでも認知させるといふ事かな？」

「ええ、主様は顔がある程度知れ渡っていますが、ミナミ様はどうしても。」

「そうだろうね。まだこちらへ来て数日程度。王都にきたのは昨日。知り合いなど居ないのだから少しでも目立とうとしなければいけない。」

「それに加えてですが、夜会に出席する時のドレスの略式の服です。本日は装飾品を見に行きますので、その服に合う物を主様が選ぶと思われます。」

なるほど……。

「良くお似合いですよ。」

「そうですか。」

黒が似合う。黒が似合う人はある程度の素材の良さが必要だと思っただけだね。

「ミナミ、起きたか？今日は一人で起きていたと聞いたが、明日、災厄が起きるのではないだろうか？」

「私が起きたぐらいで起きる災厄ならば、虫でも退治出来そうですね。」

「それもそうだな。」

大きいお店だね。

品物が多数あるのだろうか？

「シユタイン様！お待ちしておりました。本日のご用件は？」

「この娘の服に合う装飾品があるか？」

「……ほう……黒髪ですか。珍しいですね。この黒髪自体が立

派な装飾品のような気がします。・・・合わせるとしたら。」

「主人。先日の黒銀石はどうした？」

「あれは、不純物だらけですので商品にはとても。」

「あれを貰おう。」

「宜しいのですか？あれは。」

「あれ以外にこいつに似合う物は無いだろう？」

「・・・そうかもしれないね。初物の加工の為ある程度のお代は頂きますが宜しいですか？」

チャリン。

金色のコインが何枚か机におかれたね・・・。

あれはいくらぐらいになるのだろうか・・・。

「シユタイン様！？こんなには・・・。」

「お前の所の工房で出来る限りの細工をしる。手間賃だ。」

「畏まりました。お時間は少々頂きますがよろしいですか？」

「昼だ。」

チャリン。

また数枚の金色のコインが・・・。

石の加工を数時間で終わらせる・・・？そのような機械があっても大変だと思っのですが・・・。

この世界に機械らしき物は見当たりません。手作業で数時間で終わらせる？」

「畏まりました。必ず仕上げて見せましょう。」

「昼過ぎには取りにくる。」

「お父様、黒銀石とはどういう物なのですか？」

「吸い込まれるような黒。それに合わせたような斜線の銀。それ以外の不純物はまったく無い石だ。」

「先程の不純物とは？」

「その石は銀が入っていないく、金が石の周りに点々と無数に入っているのだ。」

「だから安いと？」

「普通の家族ならば、その石一つで6月は暮らせるだろうな。」

「・・・半年も暮らせる石・・・。」

「私に似合う石なのですか。」

「ああ、お前以外には似合わないな。お前の為にあるような石だ。昼を楽しみに待っておけ。」

楽しみですね。アクセサリーにはあまり興味がなかったのだけでも綺麗な物を見るのは楽しみです。」

ざわ

ざわ

どうしたのでしょうか？周りの店の人達や歩いている人達が止まってしまいましたね。」

「勇者様とノーラ姫が見れるんだろ！もう少し近くにいきこうぜ！」
声が聞こえましたね。」

「顔見せですか・・・。王族というのも大変ですね。」

「責務だからな。人というのは崇拜と尊敬の対象を欲しがるものだ。」

「・・・そうかもしれないですね。」

人というのは何かの為に動くのが一番楽で、長続きするのですから。」

「ミナミ、どうした？」

「行きましょう。お父様。」

「明日会えるのだぞ?」

「行きましょう。パパ。」

「・・・」

ため息をつかれてしまいました。

パパというと愛人みたいですね・・・。

広場のような場所に出ました。

喧騒が大きくなっていますね・・・。

勇者様ー!!!

ノーラ姫様ー!

・・・あれは・・・野口君だね。

少し痩せたかな? いやどうだろう? 遠目では少し分かりづらい。

城の低い場所から手を振っているように見えるね。

私も手を振ろう。

こちらを見たね。

きずいたかな?

いや、無理でしょうね。

100、200どころじゃない数の人が埋め尽くしているのだ。

野口君、ここまで来たよ。

そんなに大変では無かったと思う。けれど苦勞もしたのだよ?

早く帰ろう野口君。

もし君が正義感を振りかざして災厄を。なんて言い出したら殴って

でも連れ帰らせてもらおうよ。
ここは私達がいる世界ではないのだから。
私達に何か出来る訳ではないのだよ。

視線を横へずらす。

「あれがノーラ姫ですか。綺麗な方なのでしょうね。ここからでは髪の色ぐらいしか分かりませんが。」
金色の髪。腰まである髪。

野口君・・・金髪が好きなのですか？

「ああ。」

ノーラ姫が野口君の手を取ってお城へ入っていきましたね。

・・・ふふ。

優しくしてもらっているようだね。

・・・背中には気をつけるんだね。

「どうだ？二人の仲は良好のようだろうか？」

「ええ。あれだけではまだなんとも言えませんが。」

「自信は揺るがないのか？」

「ええ。」

「そうか。」

・・・お腹が空きましたね・・・。

「お父様、お腹が空きましたよ？」

「・・・」

スルーですか。無視ですか。

しょうがないじゃないですか。野口君は居なくなりましたしね。
広場はおいしそうな物の匂いがします。

「子供かお前は……。これで何か買って来い。」

銀色のコインですね。何を買いましょうか。

……。これで何が買えるのでしょうか……。

「お父様、パンに何か挟まっている食べ物売っていますか？」

「ああ……。その店だな。シュゲルが食べたかったのか？」

「ええ。シュゲルが食べたかったです。」

シュゲルとはサンドイッチの事でしょう。

なんでも良いです。

……

……

「何でしょう……。これは？」

「言っただろう？シュゲルだ。」

パンに挟まっています。

あえて言うならハンバーガーでしょうか？

「この間に挟まっているのは？」

「焼いて平にしたパンだな？塩味が効いているな。」

「パンにパンが挟まっている？」

「そうだ。」

意味がわかりません。

私が想像したものを180度ひっくり返してもこんな物は想像していませんでした。

……。まあそんなに不味くはないのでよしとしましょう。

炭水化物&炭水化物は日本の特徴だと思っていたのですけどね。

「ミナミ、店に戻るぞ。」

「もうそんな時間でしたか。」

もうお昼を過ぎていましたか。

「シユタイン様、お待ちしておりました。こちらが完成品となります。」

「ふむ……。ミナミ来い。」

私の胸元にあてていきますね……。
似合うのでしょうか？

「店主、貰っていいこう。」

「ありがとうございます。」

ブローチみたいですね。

「お父様、私にも見せて頂けますか？」

……。結構大きいですね。

手のひらより少し小さいぐらいの石。

それに土台があり、石は綺麗な黒、綺麗な金色が星のようですね。

土台は……。炎のようですね。

何故でしょう？

「お前は火のようなやつだ。」

「何故ですか？」

「どこに行くか分からない不安定さ、怒る時は静かに、そして気づかぬ内に燃え広がる。」

「気づいた時には？」

「お前の怒りはどこへ消えたかな。」

「ふふ。面白い例えですね。気に入りました。」

家へ到着した。

数時間だったのだけでも、結構長く感じましたね。

「マールさん。ただいま帰りました。」

「主様、ミナミ様、お帰りなさいませ。」

「マールこの石をドレスに合わせておけ。明日朝までにな。」

「畏まりました。」

さて野口君用のクッキーでも作るかな。

・・・何故でしょうか？

「すごい騒がしい気がしますね・・・？」

「ミナミ様が作られたクッキーを再現しようとしているようですな。」

「・・・私が居る間にすれば良いことじゃないか・・・。」

「・・・ルーク様が食べたくなったとおっしゃって・・・。」

「そうですか・・・。では、私も作ってきます。」

「はい。よろしくお願ひします。」

「あ！ミナミ姉ちゃん！おかえりー！早く早く！」

「・・・ふう・・・ため息が付きたくなるね・・・。」

「この厨房は暇なのだろうかね・・・。」

「何故こんなに真つ黒な消し炭が沢山・・・。」

「どうしても焦げちゃって。」

「昨日詳しく作り方を言わなかった私も悪かったね・・・。」

料理人の人達にも教えますので、こちらへ。」

・・・数百枚のクッキーが出来上がった。

・・・こんなに食べるのでしょうか・・・？

まあこの館の従業員は3・40人はいそいだからね。

大丈夫でしょう。多分。

私が最初に作ったクッキーは綺麗に包装して。

明日、野口君へ渡そう。

ふふ、喜ぶ顔が目に見えるね。

第15話：勇者との邂逅。（後書き）

第15話を読んで頂き有難うございました。

第16話：お城へ。

「ミナミ様、ミナミ様。」

朝・・・？

「おきましたか？」

「はい。」

「本日は朝はドレス合わせ。昼からは主様とお茶を楽しんで居て下さい。夜からが・・・」

「はい、起きています。」

「ミナミ様、寝ていますね？」

「寝ていません。」

「では、朝からの予定を言って頂けますか？」

「今日はお休みです。」

「起きる。」

・・・眠いですね・・・。

「ミナミ、起きたようだな。昨日のは一体なんだったのだ？」

「青天の霹靂というやつでしょう？」

「なんだそれは・・・まあいい・・・本当に起きているか？」

「大丈夫ですよ・・・。何度も確認しないで下さい。」

「確認するぐらいでないと安心出来ないからな。」

「・・・どれだけ寝ほすけですか私は。」

「自覚をしる。」

「・・・すいません・・・。」

綺麗なドレスです。

けれども・・・普通の結婚式などで使ったら浮いてしまいそうです

ね。

「どうだ？」

「ええ・・・とても綺麗だと思いますよ。この黒銀石もとても綺麗ですね。」

「黒金石とでも名づけるか。」

「それはそれで良いのでは無いでしょうか。」

「ミナミ、お前には金色が映える。その耳の装飾品も良い代物なのだろう？装飾が複雑に出来ているようだ。」

「・・・多分ですが、朝食のパンが30・40個ぐらいで買える物ですね。」

「・・・それを作った者はあまり金に執着がないのだな。」

「・・・この国の装飾品は全て手作りのようでしたからね。」

「まあ・・・いい。ミナミ。グラスをとれ。」

「はい。」

「お前の前祝いだ。」

「ありがとうございます。」

チン

グラスが鳴る音だけが響く。

「このドレスは前のドレスと違うのですね。」

「ああ、前のはノーラ姫への献上品の中の1つだな。」

「それを私が着てしまってよろしかったので？」

「意味が出来た物を献上するものほど阿呆はいないだろう？」

「・・・そうかもしれませんね。」

通りで娘もいない。使用人以外女の人がないあの館にドレスがあるはずです。

・・・下着は何故あったのでしょうか・・・。

ぎゅっ

ウエストの辺りにシルクらしき肌触りの良い布を巻きつけ前面で縛られる。

「少し痛いですね……。」

「ですが腰や胸元が綺麗に出るのですよ？」

「痛いものは痛いですね……。」

「慣れて下さい。」

ガタッ

ドアが開く。

「ほう……良い格好じゃないか？」

「お父様……？何をしていますか？」

私はドレスを着る前なので下着と布しか身につけていないのですが？

「ミナミお前の裸なぞ興味が無い。特にお前のような……な。」

何が言いたいのですか？胸ですか？

「ふ……お父様、女は胸ではないのですよ？」

「無いよりも有るほうが良い。それは金や人、なんでもそつだろう

？」

「……100回死んでください。」

「ふむ……良く似合っているではないか。前のドレスも似合っていると思ったが。」

「有難うございます。」

「……マール。花を。」

「畏まりました。主様。」

「これだな。この黒のやつだ。肩から首にかけてと頭に一つずつ。」

黒と黄色の花びらを下に散らせ。」

「畏まりました。」

驚きました。

「お父様、貴族ぼいですよ？」

「貴族だからな。」

「そうでしたね・・・普段の態度を見ていると貴族の雰囲気は壊れてしまいそうです。」

「お前は女ぼくはないがな。」

「・・・真似をしないで下さい。後30歳を超えている人が”ぼく”とか使わないで下さい。」

女らしくないというのは・・・あまり否定はしませんが。」

「ふはは。俺も興奮しているのか。お前が何をするのかは分からん。分からないからこそ、楽しみなのかもしれんな。」

「変なお父様ですね。」

「貴族とは得てして人とは違うものだ。」

「・・・そうですか・・・。」

私の周りには変人ばかりが集まってくるね・・・。
類は・・・とは思いたくないけれども・・・

ガタ

ガタ。

馬車がきました。

緊張しているのでしょうか。

私が？

ふふ、慣れない場所なのですから当然でしょう。

野口君、ここまで来たよ。

似合ってねーよ！とか言われて笑われるかもしれないね。

けれども、もし、・・・似合っていると云ってくれれば嬉しいのだけでもね。

後、数時間。

「行きましようか・・・お父様。・・・ん？」

「早くしろミナミ。」

「置いていかないで下さいよ・・・。一応私が主役なのでは・・・？」

運動会で一番頑張っていたのは父兄でした。とか後で言われちゃいますよ？

「娘の晴れ舞台だ。打算はあるが、俺も楽しみに違いは無い。」

「そうですか。」

「行くぞ、ミナミ。」

「はい。お父様。」

馬車が走る。

走る。

最初に見た夢がここからどう繋がるのかは分からない。

だが、この世界には剣もある。

あり得ない事ではなくなった。

・・・私が野口君を殺す。

そのような事にもし・・・なったら。

いや、駄目だね。

前向きに。

逆夢にして、一緒に帰る。
それだけを考えれば良い。

悪い方向になど考えるな。

第16話：お城へ。(後書き)

第16話読んで頂きありがとうございます。

第17話：勝負。

「綺麗なお城ですね。」

日本のお城とは違うね。

中学校の修学旅行で行った時に見たものとは違う。

西洋風なお城なのだね。

日本のお城が厳かな雰囲気なのに比べてこちらは聖的なものといった感じかな。

「シユタイン様お待ちしております。皆様揃っております。」

「ああ、分かった。」

「では、馬車はこちらで。」

「ミナミ、行くぞ。」

手を引かれる。

「子供ですか。」

「似たようなものだろうか?」

何故でしょう?何かじろじろと見られている気がします。

「どうして皆様に見られているのですか?お父様が目立つのは分かりますが。」

「俺の娘として城に入るのだから当然だろう?」

「そういうものですか。」

「ああ、クツキーの件もあるかもしれんな。城中の人々に配られたみたいだぞ?」

「どういう事ですか・・・。」

「昨日のあの枚数を家の者だけで食べられる訳がなかるう?マールとルークが昨日嬉しそうに袋に包んでいたぞ・・・?」

「・・・そうですか・・・。」
「こちらの世界に無い新しい食べ物ですからね。
さぞ珍しかったでしょう。」

「ミナミ、お前がただ単に美しいからかもしれないぞ？」
「あり得ませんね。遠目でしたがお姫様はすごく綺麗でしたよ。金色の髪がさらさらと。」

「お前は黒髪だろう？さしずめ黒姫といった所か？」
「そうでしたね・・・この国の黒髪は私以外は野口君しか居ないのでしたね。」

小さな部屋へ通された。

「マールさん、ルークさん。」
二人が待っていたね。

「主様、ミナミ様、お待ちしておりました。クッキーは皆様喜んで頂けました。」

「そうか。」
「初めての食べ物と良く皆様食べる気になりましたね・・・？」
「材料は極めて普通なものですから。説明したら皆様普通に食べていましたよ。」
「それはそうか。」

「お父様？皆様の所へは行かないのですか？」
「慌てるな。」

「慌ててないけませんけどね。」
「あ、マールさん。野口君に渡すクッキーを持ってきて頂けましたか？」

「はい、こちらに。」

クッキーの袋が手渡される。

「ミナミ、俺が預かるう。お前が今日の主賓だ。そのような物を持つていると邪魔でしょうがないぞ。そのドレスには物を入れる所など無いのだからな。」

「・・・ああ、そうかもしれないですね。ありがとうございます。お父様。」

「そういえば、何故すぐに行かないのですか？」

「すぐに入ってしまうのは格が低く見られるからだな。今俺達が到着した事が会場に伝わっている。あちらにも準備が必要だからな。」

「ああ・・・そういうものでしたか。マールさん、何か飲み物が欲しいです。」

「ミナミ・・・お前には緊張という言葉は無いのか？」

「緊張してもしようがないでしょう？」

「まあ・・・そうだがな。」

ただ、幼馴染に会うだけ。

ただ、それだけ。

その他は有象無象。

ジャガイモとも思えばいいだけです。

「ミナミ、お前はどこでそのような事を覚えたのだ？」

「急にどうしたのですか？後、そのようなとは？」

「これから行く先には100名より多くの人間がお前を待っているようなものなのだぞ？」

「そうなのですか。」

それは多いですね・・・。

「それだ。そこで驚くでもなく、ただ単に”そうですか”の一言で済まされる胆力だな。」

「昔からですね・・・あまり昔から緊張は無かったです。ですが、あえて言うのなら困窘、いやなんと言えはいいですか。盤を使った頭を使い戦う物といえば分かりますか？」

「"イゴ"という物は知らないが、地図を使った軍事演習のような物でいいか？」

「ええ。それで構いません。その囲碁というものをしている間は周りの目など気にならないのです。相手以外は関係ないものですから盤上、相手の目、手、呼吸音、それと相手の心の声でしょうか。それ以外は私には映りません。」

そのようなものをしていたからでしょう。私には目的以外のモノはただの置物にしか見えません。」

「・・・そうか。それがお前の元か。ミナミ、お前はその"イゴ"とやらは強かったのか？」

「どうでしょうね。ですが、同年代に遅れを取るといったことは無かったです。プロ・・・いえ専門家、職人と言いましょか。専門家とも打った時がありましたが一度も勝てませんでした。」

「それはそうだろう。どんなに優れた人であったとしても何か一つに昇り詰めたモノは恐ろしいぞ。」

「ええ、怖かったですね。何せ何も見えないのですから。動揺、焦燥、不安、何も見えて来ないのですから。けれど、上がまだある。そう思えてとても嬉しかったです。」

「そうだ。上がある。それだけで挑戦者というものは努力をする。だが、昇り詰めたモノが見るのは得てして下だけだ。上を見るという事が出来なくなる。王や勇者というものがそうだろう。民の為、臣下の為。下ばかりを見ている。俺は王となっても、挑戦をし続ける。」

「民の事は考えないと？」

「違うな。王が考える事ではないだけだ。王は指し示すモノ。民はその指し示す方向へついてくるものだ。王が下を気にしているは、国はそこで終わってしまうものだ。」

「そうですか・・・お父様。」

「なんだ？」

「貴方がお父様で良かったと思います。」

「そうか。」

もし万が一戻れなかったとしても、戻れなかった……としても、この人が王となる国なら生きてはいけそうです。

野口君と二人で、小さな家を建てて、小さな生活をする。

……それも良いかもしれないね。

不便かもしれない。

けれども、ここでしか得られないものもあるかもしれないね。

そう……思ってしまった。

「主様。そろそろ。」

「……行くか。ミナミ、行くぞ。」

「はい。お父様。」

ここまで来たよ。

さあ……勝負へと行くこうじゃないか。

ふふっ……勝負か。野口君の口癖がうつってしまったかな？

第17話：勝負。（後書き）

第17話読んでいただき有難うございます。

第18話：再会。

お父様の横を歩く

とてもふわふわした絨毯の上を歩く。

・・・この上を土足で歩くのですか・・・。

少しもつたいたないような・・・気がしないでもない。

「シユタイン様、お久しぶりでございます。」

「・・・サイン・クラウドか。3月ぶりか？」

「それ程とは思いませんでした。シユタイン様、くつきー？でしたか？誠にありがとうございます。あれはシユタイン様か？」

「いや違う、俺の娘がな。」

誰でしょうね。部屋に入る前に人が来るとは思っていませんでした。30台青い髪。もう色では驚きませんよ。

「ミナミ・シユタインと申します。クラウド様・・・？でしたか。

お初お目にかかります。お父様とは仲がよろしいようです。」

「そうだな。小さき頃から知り合いではあるな。」

「ええ、そうですね。もう20年以上昔ですか。」

「俺達も年をとるわけだ。お前は婚姻はしないのか？」

「ええ。目ぼしい相手がいないので。」

こちらを見た？なんだろうね？

「ミナミ様・・・でよろしいですか？」

「ええ、クラウド様。シユタインでは、お父様と分かりませんから。」

「では、私もサインとお呼び下さい。」

「分かりました。サイン様。」

「ミナ三様、この夜会が終わった後に二人でお話したいことが。」
「クッキーの事ですか？」

「良くお分かりで。つくり方をお聞きしたいと思ひまして。」
その為にここまで来たのでしょうか？物好きですね。

「・・・ミナ三様、クッキーのお話が無かったとしても二人でお話
は出来ますか？」

「何のお話ですか？」

「愛の囁きですよ。」

「お断りします。冗談はあまり。」

「・・・はっはっは！断られてしまいましたね。」

「本気でしたら、お話だけは聞いてあげますよ？」

「では、後で。楽しみにしておきます。小さき黒姫。貴女はノーラ
姫に負けるとも劣らない美しさ、気高さをもっていらっしやるので
すね。ノーラ姫が血統書つきならば、貴女は孤高の黒狼と言った所
でしょうか？」

「女の人を犬扱いとは。これはノーラ姫に言わないとね。」

「ふふ。それが普段の話し方ですか。またお会いしましょう。シユ
タイン様」

「ああ、後でな。」

「・・・小さき黒姫・・・か。」

「どうしました？お父様？」

「良く似合っているじゃないか。お前そのものだぞ？」

「服まで黒くしたのはお父様でしょう。」

「小さきというのもだがな。」

「背の事ですよね？それでしたら許しますよ。慣れていきます。」

「さあな？ふふふ。」

「100回殴りますよ。」

大きな扉の前についた。

10人ぐらい一度に入れそうだね。

「シュタイン様お待ちしております、息女のミナミ様ですね？皆様お待ちしております。」

「そうだ。」

「トラビア・シュタイン様！息女ミナミ・シュタイン様入られます！」

静かだね。

人並みが左右に分かれている。

髪は金と銀が多いかな。

皆通るたびに一礼している。

綺麗な椅子が3つ。

左にはもう誰か座っていますね。

「ふん。」

お父様は右に座りましたね。私の椅子は無いのでしょうか？

「横に立っている。笑顔を振りまいてな。」

・・・私は立つのですか・・・皆様も立っていますしね。私が座るのもおかしいのでしょうかね。

「シュタイン、唐突で驚いたぞ。お主がこのような場に来る事はほとんど無いからな。」

「グーラ、悪かったな。娘のお披露目に使わせてもらった。」

「構わん。王も姫の顔見せのようなものだ。姫より目立つなよ？」

「知らん。俺の娘が目立つようならばノーラ姫の魅力が足りないだけだろう？」

「お主の娘はかなり目立つ。これと比べられてはノーラ姫も可哀想

ではないか。まさかの黒髪か、どこで見つけてきた。」

「家に落ちていたのだ。」

「そのような冗談を言っているのではないのだがな。」
「本当です。」

「……この人が主催のグーラさんですか。」

50前後の恰幅のいいおじさんと言った所ですかね。
髭が似合っていますね。

この2人に加えて王様がこの国のトップといったところですかね。

「……お腹空きましたね。」

ずっとただ立っているだけというの……あの美味しそうな食べ物
の所へ走っていききたいですね。

バン！

扉が開く

「皇王キャストル・イスターナ様入られます！」

皆頭を伏せてしまったね。

私もしたほうがいいのだろうか？

お父様は……？していないね。

正面を見ておこう。

「……本当に70歳ですか……筋骨隆々とはこの事でしょう。」

強い人が王となるというのは本当のようですね……。

白いひげも生えていませんし……。

王様といったら”ふおふおふおっよくきたのじゃ勇者！”とか言っ
て白髭を生やしているイメージなのですがね。

「ふおおつ、グーラとシュタイン、久しいな。」
「言いましたね。」

王様つぼくなりました。

「そちらの娘は？」

「俺の娘ミナミ・シュタインと申します。イスターナ様。ミナミ挨拶を。」

「畏まりました。お父様。お初お目にかかります。皇王イスターナ様。トラビア・シュタインが娘ミナミ・シュタインと申します。」
スカートの裾を摘み少し上へ上げ、お辞儀をする。

・・・この挨拶はいつも思うのだが、少し扇情的だと思っよ・・・。

「ほお・・・黒髪、黒のドレス、装飾品まで黒か。黒髪は勇者と同じじゃな。その石も花も悪くない。シュタイン、良い趣味をしておるな。」

「ありがとうございます。ミナミ、良かったな褒めて頂いたぞ。」

「ありがとうございます、イスターナ様。褒めて頂いた経験などあまりありませんので嬉しい限りです。服ばかりなのが残念ですが。」
正面を見据える。王様の目から目を逸らさない。逸らしたら負けだね。

「・・・ほお・・・ふっわっはっはっは！」

笑い出してしまいました。

「シュタイン、お主の娘は面白いな。顔を褒めてくれと直接言ってきた奴は初めて見たぞ。」

勿論良い女ではないか。我が後50年いや40年若ければ娶ってやつたのじゃがな。」

「有難きお言葉嬉しい限りです。」

「いえいえ、イスターナ様そこまで褒めて頂かなくて結構。調子に乗って館に帰った後が大変になりそうだね。」

・・・うるさい。

「シュタイン、お主の娘は有力な貴族と婚姻させるのか？伸びてき

ている貴族も何家もあるっ?」

「まだ娘は若いので任せておきます。私自身も若い身であります。好きに選ばせてあげますよ。」

「それも良いのだろうじゃがな、若いという事に甘んじるといっことはするべきではないと思うがのう。」

「ええ、良く分かっております。」

「なら良いのじゃがな。」

行き遅れたら野口君に貰ってもらいましょうか。

ガタン

ドアが開く。

「勇者!」

きたね・・・やっとだね・・・。

「カツヤ。」

会いたかったよ。

「ノグチ様入られます!」

カツ。

ブーツの音が響く。

チャリ。

剣の音がする。

赤いマントが左右に動く。

私達の前まで来た。

野口君が跪く。

「イスターナ様、グーラ様、シュタイン様。只今到着いたしました。

「勇者よ。姫はどうした？」

「只今着替えの最中との事です。先に初めていて下さいとおっしゃっていました。」

勇者か。

ふふっ。結構様になってるじゃないか。似合っているよ野口君。

すぐに抱きついても良いのだけどね。

・・・おや？首にあるチョーカーが・・・無い？

・・・はずしているのかな？それとも家にでも置いてきた・・・？いや、学校で会った時には着けていた気がする。

野口君が顔を上げる。

びっくりしているね。

ふふっそうだろうそうだろう。

どうだい？似合っているかな？

「・・・シユタイン様。こちらの方は？」

「俺の娘のミナミ・シユタインだ。ミナミ。」

ああ、初めて会った振りをしたいのかな？

王様の手前騒ぎ出せないんだね。

「勇者様、お初お目にかかります。ミナミ・シユタインと申します。」

笑顔が自然に出る。

「・・・ほお・・・。」

王様とグーラさんから声が聞こえましたね。

ふふっ。野口君の顔も赤くなっているね。

これは・・・後でいじる楽しみが出来たね。

「……ミナミ様。少しお話があるのですが、よろしいですか？」
手を差し出してくる。

「喜んで。勇者様。」
手を受け取る。

今いる、このひと時だけは、私の時間だ。

ノーラ姫など関係ない。お父様など関係ない。イスターナ国など関係ない。

私と野口君の時間だ。

誰にも邪魔はさせないよ。

第18話：再会。（後書き）

第18話読んでいただき有難うございます。

第19話：雨模様。(前書き)

第19話：雨模様。

野口君に連れられて、窓の外へ出る。

風が出てきたね……。

似合っているかい？野口君。

ここまで来たのだよ。

遠く遠くの世界で、また出会う。

ふふ……どこかの恋愛小説のようだね。

「ミナミ様はとても綺麗な髪をしていらっしゃるのですね。」

……ミナミ様？

どうしたのだろう？

ここなら誰にも会話が聞こえないでしょう？

いや、どうしてもばれてはいけない理由が？

「ありがとうございます。勇者様。」

「一目見た時、私の心は奪われてしまったようです。」

……何かの暗喩？

野口君は私に何か分かって欲しいのか？

「そこまでおっしゃってくれるのですか？嬉しい限りです。」

「誇張などでは無いのです。ミナミ様貴女はとても美しい。この国の誰よりも。」

「ありがとうございます。……野口君。」

これで……どうだろう？

目を見開いているね。

「いえ、名字ではなく。名前で……読んで頂けませんか……？」

……どういう事だろう……？

小さい時から私はこの呼び方で呼んでいた。

今更・・・名前で呼べ・・・というのだろうか？
これにも意味が・・・？
「ええ・・・か・・・」

その時大きな声が部屋から聞こえてきた。

「王女ノーラ・イスターナ様！入られます！」

王女様が来たようだね。

会場から人の声が消えた。

さすが王女様だね。

皆、閉口してお辞儀でもしているのでしょうか。

大量の水が・・・流れて来た気がした。

・・・今は・・・？

幻覚？

ここはおかしい。

何かがおかしい。

いや何かではない、全てが・・・おかしい？

「野口君・・・？」

野口君が壁にもたれている・・・？

どういう事だろう？

何故・・・そんなに苦しそうな顔をしているんだい？

「・・・う・・・頭が・・・」

「大丈夫かい？野口君？」

「・・・」

返事が無い？

・・・気絶・・・？

これは・・・一体何があったというんだい・・・？

カツ

カツ

靴の音が聞こえる。

カツ

カツ

靴の音が近づいてくる。

カツ

・・・止まったね・・・。

私の後ろにいる。

何だろうね・・・。

振り向いてはいけないという予感がひしひしとするよ。

「お久しぶりですね。南さん。1ヶ月ぶりでしたか？」

・・・良く聞いた事がある声だね・・・。
振り向く。

「初めまして。と言ったほうがよろしかったかしら？ミナミ・シュタイン様。」

「さつき久しぶりといっていたよ。ノーラ・イスターナお姫様。いや・・・絢子さん。一体全体どうしたのだい？絢さんは少し茶色がかつたシヨートだったはずだけでも。その金髪は一体どうしたのかな？エクステかな？カツラかな？」

「どういう事でしょうか・・・。」

「何故ここに絢さんが？」

「いや・・・何故1ヶ月？私がこちらに来て・・・まだ10日も経っていないはずでは？」

「どういう事でしょう？」

「いえいえ南さん。これが私の本当の髪型ですね。」

「そうなのかい・・・。絢さんがそういうのなら本当なのだろうね。」

「ええ。勿論。南さん・・・ここで話すのも・・・そうですね。外へ行きませんか？」

「いいのかい？絢さんはお姫様なのだろう？ここから外へ行くなど出来るのかい？」

「ええ、皆様ぐつすりとお休みになっていらつしゃいます。南さんのお父様。トラビア・シュタイン様もぐつすりと。」

「そうなのかい・・・一つだけ良いかい？」

「ええ、どうぞ。」

「野口君は・・・大丈夫なのかい？」

「ええ、勿論1時間もしない内に目を覚ますでしょう。」

「・・・なら風邪は引かないかな・・・。」

「いや、野口君の事は後回しにしろ。気にするのは目の前の事だ。」

目的の変更。

この事態に対処しろ私。

頭を動かすんだ。

カツ

カツ

優雅に歩くね・・・絢子さん。

本当に君はお姫様だったのだね。

「もう一つだけ聞いても・・・良いかい？」

「絶対に答える訳ではありませんが。」

「野口君の記憶を消したのも絢子さんかい？」

「さあ、どうなのでしょうね？ふふっ。」

答えているのと同義だね・・・。

舌打ちしたくなる状況とはこの事だね・・・。

広い庭に出た。

ぽっ

ぽっ

雨が降ってきているね・・・。

野口君が消えた日も雨が降っている日。

お父さんとお母さんがいなくなった日も雨・・・。

私は雨女なのかな・・・？

「南さん、率直に言います。」

「何だい？」

「元の世界へ帰って下さい。」

「野口君も一緒にならいつでも。帰る方法があるというのならだけでもね。」

「それは出来ませんね。克也さんは・・・勇者様なのですから。」

「災厄を打ち破るといふ勇者が野口君なのかい？」

「ええ。克也さんにはここに永久に居続けていてもらわなければいけないのです。」

「・・・そうかい。」

「そうです。」

「帰ってという事は帰る方法はあるのかい？」

「勿論。すぐにでも送ってさしあげますよ。」

「では・・・直接的に聞かせてもらおうよ。絢子さん。」

手から火を出す。

絢子さんに向けて放つ。

ヒュン

当たるか？

大丈夫なはず。私の目線の方向へ動くものだ。

絢子さんに当たりそうになったらさすれば良い。

・・・動かない？

「水よ。」

指を振る仕草・・・？

絢子さんの目の前に水の壁が出来上がる。

「ふふ・・・驚きました。南さんは火の術式使いでしたか。手を出すのが速いんですね。」

火が水の壁に当たった。

水が爆発する。

ジュウ・・・ボン！

水飛沫がひどい。

目の前が見えない。

「南さん。術式というのは適当に使えば良いものではないのですよ？」

「御高説感謝だね。」

水飛沫が・・・蒸気へと変わっていく。

「・・・液体がなぜすぐに気体へ変わる。」

「そこまで教えてあげる気はないわ。」

・・・これがイメージーションの力というわけか。

水蒸気が辺り一面を覆う。

「・・・南さん？水蒸気爆発という言葉は知ってる？」

「ああ・・・勿論だとも。」

火はもう使えないと・・・。

「どうしたの？南さん？ふふっ。どうぞ火を出してかまいませんよ？」

声が響く。

反響している？

いや・・・この水蒸気から出れば良い。

出れば火も出せる。

女の子を殴るといふ事はしたくなかったけれども・・・。

走り出そうとした。

シュッ

音がした。

・・・飛んでる・・・？

え？

どうして？

ドサッ

地面に落ちた？

視線が低い？

痛い。

痛い・・・。

動けない・・・？

手足が動かない？

「かはっ・・・。」

声が漏れた。

絢子さんが近づいてくる……。

動け。

動かないと。

「南さん、貴女が災厄の可能性があります。今すぐにも元の世界へ帰って下さい。」

「いや……だね。」

「そうですか……。」

耳からイヤリングを取られる。

「これは、貴女にはもう必要ありません。」

「返し……たまえ。それは……私の……。」

水が私を覆う。

タツ

足音がする。

「ノーラ！大丈夫か！？どうしたんだ！ドレスが水浸しじゃないか！」

野口君？

どうしてここに……？

”野口君！”

声が反響している？

「いえいえ、泥棒猫がいたもので追い払っていました。」

「どういうことだよノーラ。」

「お気になさらず。」

チリン

ノーラ姫の耳に金色のイヤリングが光る。

「ノーラ……？そのイヤリングは？」

「最近手に入れました。似合っていますか？」

「ああ！良く似合っている。」

「有難うございます。」

”野口君！それは……君が私に！”

「うるさい泥棒猫ですね……。さっさと消えて下さい。」

「ノーラ何を言っているんだ？」

「いえいえ、なんでもありませんよ。克也さん。」

「そう……。か。まあいいか風邪を引くぞノーラ。」

「ええ、戻りましょう。」

水が光輝く。

ふふ………

記憶を消すことが出来る。

世界の移動も出来る。

私の姿も声も消す事が出来る。

全て……水に流す魔法という事かい……？

それに加えて王女という名声と美貌をもっている……。

なんていう卑怯さ……だろうね……。

ゲームでやったラストボスですら……そんなに有能ではなかったよ……

ふふ・・・

・・・私はまた一人になってしまったのか・・・。

どういふ事なんだい・・・。

神様。

彼方は・・・私に幸せになるなどおっしゃっているのですか・・・。

この世界で・・・生きて行く事になっても良い・・・と思えたばかりだったのに・・・。
これは・・・あんまりでしょう・・・。

・・・野口君・・・

君は・・・うそつきだよ・・・。

薄れる雨模様の景色。

ぽつ

ぽつ

雨だけが泣いていた。

第19話：雨模様。(後書き)

第19話読んで頂きありがとうございます。

第20話："邂逅"：思い出と共に5

．．．ろ．．．め．．．

く．．．．．め．．．

?．．．．．?．．．．．?

絢子さんと会ったのは．．．いつの頃だったかな。
初めて話に出たのは．．．。

小学校の6年生の時。

「南！南！この家すっげーでっけーよなー！」

「そうだね野口君。」

「ウルトラでっけー犬がいるんだぜ！」

「本当に野口君はウルトラが好きだね。」

「ウルトラって格好いいだろ！超の上って感じがして！」

「．．．そうなのかい？」

「そうなんだよ！」

「そうなんだね。」

「南にはわっかんねーかな！ウルトラっていったらー”おとこのー
ろまんー”ってやつなんだってさ！」

「．．．なんだいその男の浪漫とやらは．．．？私は女だからね。」

野口君はたまに不思議な発言が出る。

どういう意味なのだろうね。

男の子ならみんな分かるのかな？

「ウルトラというところ3分で帰ってしまう超人を思い出すよ。」

「3分で敵を倒すんだぜ！さいきょーじゃねーか！」
「・・・私なら3分あつたらお湯をいれているかもしれないね。」
「・・・ラーメンにか？」
「ああ、美味しいよ？」
「はあ・・・もういいよ・・・。」
ふふ、呆れた顔も可愛いね。

「なあなあ南。」
「どうしたんだい？野口君。」
「なんだと思う？」
「・・・分からないね・・・大方可愛い子を見つけた・・・とかかい？ここにいるよ？」
「自分で可愛いとかいうな！南とは違うんだな！これが！俺のクラスに今日すっげー可愛い子が転校してきたんだよ！」
「そんなにかい？」
「ああ！すげー可愛いな！俺の隣の席なんだけど髪が長くて、さらさらで。」
「私も髪は伸びてきているけどね。」
「南より長いな！」
「そうなのかい。」
「目が大きくて・・・。」
「力持ち・・・。」
「細くて・・・みんなが守りたくなる・・・。」
「力持ち・・・。」
「力持ちとか付け足すなよ！可愛くなくなるだろうが！」
「私よりも可愛いのかい？」
笑顔を野口君へ向ける。
「・・・う、あ、俺宿題がでてたんだっ！」
「野口君？私より・・・。」

「やつペーやつペー！すげーいつペーでてるんだっただわ！南じゃあまた明日な！」

「では、私が教えてあげよう。良いだろう？一緒にやったほうが効率が良いじゃないか。一緒に行こうか？野口君。」

「……………」

「何か喋ろうね？野口君？」

中学生になった。

野口君が肩を貸されて足を引きずって歩いている。

「どうしたのだい？野口君？」

「ああ……部活中に足ひねうちまっつてな。」

「捻挫かい……捻挫は癖になるそうだからきちんと治すのだよ？」

「あーあー分かってる分かってる。お前は俺の母ちゃんか。」

「似たようなもの……ではないかい？」

「似てはいねーよ！」

「野口君……その人は誰？」

髪が長い。目が大きくとても可愛い女の子。

「ああ、俺の幼馴染の久坂 南。南って呼んでやってくれ！」

「なんで野口君が私の呼び方を決めるのだい？」

「いいじゃねーか！ケチつけんなよー！」

「久坂……さんで良い？」

「南でいいよ。で、野口君？こちらは誰なのだい？」

「良いんじゃないか！」

「あつごめんなさい。私は小林、小林 絢子です。」

「小林さんか。とても可愛い名前だね。」

「そ……そんな事ないですよ！ありきたりだと思いますし。あつ

私も絢子でいいよ。南ちゃん。」

「……南ちゃんと言われたのは初めてだね……。中々新鮮だよ。」

では、私は絢子さんと呼ぼう。」

「南は男つばかったからなあ！小さい時なんて！」

「うるさいよ。野口君。君は人の昔話を話したがりたいのかい？では・・・私も野口君の昔話を野口君は小学校2年生まで・・・。」

「こらあー！それは言うな！」

「妹と・・・むぐむぐ。」

口を押さえないでくれないかな？

「2人共仲良いんだね。すごく自然っていうのかな。」

「そうかもしれないね。小さな時から一緒だったからね。」

「腐れ縁というか幼馴染だな。家が隣なんだよ。」

「そうなんだ？あれ？けど同じ学校じゃないんだね。」

「学区が違うのだよ。道路を挟んで隣でね。」

「ああそうなんだ。じゃあ、私ともご近所さんなんだね。」

「そうなのかい？」

「あー南・・・前話したる？あのでつかい犬がいる家。」

「ああ・・・そんな話もしたね。そんな近所だったのかい・・・。」

絢子さん私も手伝おう。野口君も大きくなってきたからね。大変だっただろう？」

「うん、すつごく大変だった。野口君結構重くて。」

「だから良いっていつたるマネージャー！」

「だって家近くだし。」

「マネージャー？おつと野口君、右腕をを上げてくれないか？」

「ああ・・・わりいな。陸上部のマネージャーなんだよ。」

「そうなのかい？陸上部のマネージャーというのはどういった仕事

があるのかは分からないけど大変なのだろう？」

「ううん、そんな事ないよ。タイム計ったりドリンク配ったり。み

んなのタオル洗ったり。」

普段家で家事してるからそんなに大変じゃないかな？」

「私も家事をしているよ。一緒だね。」

「じゃあ今度一緒にお菓子でも作らない？」

「じゃあ今度一緒にお菓子でも作らない？」

「いいね、出来れば、チョコレートがいいかな。」

「じゃあ俺たつべるかかりいー！」

「働かざる物食うべからずだよ？野口君。」

1 歩ずつ歩く。

2 人で肩を持たなくても良いのだろうか。

3 人でその時は肩を並べて歩いていた。

「野口君。両手に華だね。」

「ぶっ！南！」

「み、南ちゃん！？」

「野口君？どうして周りをキョロキョロと見ているんだい？」

「いやいやいや・・・同じ学校の奴らがいねーかと・・・こんな所
そつえば見られたら・・・。」

「自慢するのだろうか？「俺は二股しているんだぜー！」とみんなに
自慢を・・・。」

「南！お前俺に彼女が出来なくなっても良いのかよ！」

「絶対に手に入らないものを欲しがってもしようがないよ？」

「絶対とかいうんじゃないねえ！」

「ほんとーに2人とも仲いいんだねー・・・。」

「野口君？今手が胸にあたったのだが？触りたいのかい？」

「触ってねーよ！っーかあたるほどねーだろうか！」

「・・・それとも死にたいのかい？」

「なんだよその選択肢！理不尽すぎるだろ！」

「あはは。2人共面白いんだねー。」

高校生になった。

「南ちゃん！一緒の高校だったんだね！一緒のクラスかな？」

「どうだろうね？今からクラス発表を見に行く所だよ。」

「そうなんだ・・・一緒だと良いね。」

「そうだね。絢子さん・・・すごく綺麗になったんだね。」

「ええ・・・またまたあー！何をいいますか・・・南ちゃんもすごく女の子らしくなったね。その髪・・・受験の時大変だったでしょ？髪が長いと不利って先生に聞いたし。」

「髪が長いと不利なのではないよ。その場凌ぎがいけないんだね。普段から髪を綺麗に手入れしてあって、髪を染めていなくて、きちんと纏めてあれば不利なんて事は無いはずだよ。」

「

「えええー！！私受験の為にばつさり切っちゃったのに！えええ・・・それを教えてよ・・・南ちゃん・・・。」

「大学受験の時には安心だね。」

「先は長いよ・・・南ちゃん・・・。」

「3年なんてあつという間だよ・・・まあ入学したてで卒業の事はあまり考えたくないね。」

「そうだよ・・・ん？南ちゃん！イヤリングなんて学校にしてくちや駄目だよ！」

「髪できちんと隠れるから大丈夫だと思うよ。もし見つかったとしても言い訳は考えてあるから大丈夫だね。」

「いやいや！駄目でしょ！見つかったら没収されちゃうよ!？」

「野口君から貰った大切なものだからね。ずっと・・・つけていたんだ。」

「・・・え？」

「南ちゃん。」

「なんだい？絢子さん。」

「私・・・野口君に告白するね。」

「そうかい。なぜ私に言うのだい？」

「・・・なんでだろうね・・・自己満足・・・かな。」

「そうかい。」

「……」

「今日は静かなのだね野口君。」

「南……俺、マネージャー……いや絢子に告白された。」

「良かったじゃないか。絢子さんは可愛いからね。」

「断ったんだ。」

「そうなのかい。」

「……何も聞かないんだな。」

「幼馴染だからね。」

「そう……だったな。」

「そうだよ。」

「南さん……？最近遅刻が多い気がするよ？」

「絢子さん……すまない。出来る限り少なくするよ。」

「そう。少なくしてね。」

「努力するよ。」

どこかでずれたのだろうかね。

何故……こうなってしまったのだろうかね。

3人の幼馴染が世界を超えてまで……会うなんてね。

不便だね。

人間は不便だ。

動物と違って欲求の赴くままに行動できないのだから。

？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・？

十・・・・・・・・・・・・・・・・十

小さき黒姫、一日だけ待ってやろう、ワシはお主が気に入った。その心根、どこまで折れずに進めるのか見物じゃのう……。”

十・・・・・・・・・・・・・・・・十

第20話："邂逅"：思い出と共に5（後書き）

第20話読んで頂きありがとうございました！

これをもって第0章を終わりたいと思います。
次は第1章の開始となります。

第1話

・・・なんでしょう・・・

すごく長い夢を見ていたような気がする。

どうして、そう思うのだろうか。

何故ここにいるのかが分からない。

ここは・・・私の居る所ではない。・・・そんな気分だった。

「う・・・眩しい・・・ここは？」
保健室？

なんで保健室にいるのでしょうか？

授業中に貧血にでもなってしまったのでしょうか？

「久坂！」「南ちゃん！」

・・・うるさい。

なんだろう？

「久坂さん！・・・起きたのね・・・体は大丈夫？」

「どうしたんですか・・・？滝沢先生。それに・・・叔父さん？どうして学校に？」

・・・それと保健室の・・・名前が思い出せないね・・・保健室の救護の先生がいる。

「どうしてだと？おい久坂！野口と小林はどうした！」

「待って下さい！滝沢先生！久坂さんは起きたばかりなのですよ！
？少し休ませる時間を・・・」

「待つてなどいられるか！生徒が3人も居なくなつたんだぞ！戻つてきた生徒がいるんだ！野口と小林がどこに行つたのか分かるかもしれないんだぞ！」

「ええ・・・分かつています。ですが・・・」

「南ちゃん・・・体は大丈夫かい？」

「はい・・・少しお腹が痛いのですが・・・その他は・・・」

・・・なんですか。

この服は・・・一体なんなのですか？

「叔父さん・・・この服・・・ドレスでしょうか・・・これは一体なんですか？」

「・・・南ちゃん？・・・落ち着いて話をしようか。」

「はい、・・・分かりました。」

・・・どういう事でしょうか？

私は授業中に倒れたのでは無かつたのでしょうか？

「南ちゃんは4日前の授業中、野口克也君の体が消えるのを見て駆け寄つた。」

そして、野口君に触れた途端二人共に一緒に消えてしまった。そこまでは覚えている・・・かい？」

「・・・申し訳ありません。全く覚えていません。」

「・・・そうなのかい。その後、クラスが騒然となつている間にクラスメイトの小林絢子さんという子も消えていたと聞いた。そして・・・今日の2時間目の授業中に南ちゃんは野口君の机の傍に突然現れた。私も言つていて意味がわからなくなつてくるね・・・。ああ・・・南ちゃん今は12時だよ。一通り話が終わつたらご飯でも食べよう。」

・・・何を言っているのでしょうか・・・理解が追いつきません。

「叔父さん一っだけ良いですか・・・？」

「ああ、大丈夫だよ。南ちゃん、一っだけといわずなんでも言ってくれ。」

「・・・野口克也さん・・・と小林絢子さんでしたか？」

「ああ、それがどうしたんだい？」

「その二人は一体誰なのですか？」

「え？野口君じゃないか。私の家にも二人で一緒に来てくれたじゃないか。」

「・・・誰なのでしょう・・・全く覚えが無いのです。」

「久坂！何を言っている！お前自身が言っていた事なのだろう！お前と野口は幼馴染だ！」

「幼馴染・・・？私に幼馴染？小さな時からずっと一緒だったのですか・・・？」

「・・・滝沢先生。吉川さん。少しよろしいですか？」

3人ともどこかへ行ってしまった。

何なのだろう・・・？

私に幼馴染？

右耳を触る。

不思議な感覚・・・。

なんだろう？

いつもあるものが無い。

そんな感覚。

右耳？

耳に何か付けていた事はあつたかな・・・？

「南ちゃん。」

「はい、なんででしょうか？」

「野口克也君。小林絢子さん。この二人の名前には本当に覚えがないんだね？」

「・・・はい。二人の名前も顔も身に覚えが無いです。」

「そうかい・・・。滝沢先生、嘘は言っていないと思います。南ちゃんが野口君の事を隠す理由が・・・。」

「・・・くそっ！久坂・・・思い出したらすぐに言いに来るんだぞ。」

「はい・・・分かりました。」

「先生方、今日は南ちゃんを帰らせてもよろしいですか？家でゆっくりと休ませてあげたいのです。病院へは明日朝一で連れていきますので。」

「・・・すぐのほうがいいかもしれませんが・・・見た限りは応対もしつかりとしています。身体を見る限りも腹部の打撲程度でした。1日寝ていれば痛みも治まるでしょう。けれども、朝すぐに病院へ連れて行ってあげてください。」

「はい、分かりました。南ちゃん・・・立てるかい？」

「はい、大丈夫です。先生方・・・話を聞く限りは3年生のこの時期に大変迷惑な事をしてしまったようです・・・。申し訳ありません。」

「・・・ふう。まったくだ。どういった事態なのかも分からん。教師を始めてこんな事が起こった事など・・・。前代未聞だ。」
「すみません・・・。」

ドレス姿で歩く。

今はお昼休みですね。

みんなこちらを見ている。
それはそうでしょうね。
こんな格好をして歩いていては。

「久坂さん！・・・大丈夫？」

クラスメイトの女の子達だ。

「身体は・・・大丈夫だね。頭も・・・変な所は無いと思う。」

「そっか・・・良かった。いっぱい聞きたい事あるんだけど、明日学校はくる？」

「朝、病院へ行った後、授業をうけにくるかな。」

「そっか・・・分かった。明日聞く事にするね。」

・・・何を答えれば良いのでしょうか。

これは・・・私は記憶喪失というのでしょうか・・・。
みんなが知っている事を知らない。

不安になりますね・・・

「・・・ふう。」

動揺はしてはいけない。

心を落ち着けて。

今の私に何が足りないのか。

足りないモノは・・・何なのか。

大切なモノなのか。

・・・それとも大切では・・・ないモノなのか。

・・・甘い物が食べたいです。

何でしょう。

無性にチョコレートが食べたい気分です。

ずっと食べていなかったような。

感覚では昨日食べた感じなのですが・・・。

ずっと食べる事が出来なかった・・・そんな感じですよ。

「南ちゃん？何か食べたいものはあるかい？」

「チョコレートが食べたいですね。」

「そうかい。コンビニので良いかい？」

「ええ。何でも構いません。」

まずは・・・チョコレートを食べる事を第一としましょうか。

この”もやもや”とした感覚を払拭出来れば良いのですが。

第1話（後書き）

第1話読んでいただきありがとうございます。

第2話（前書き）

第2話

叔父さんの車へ向かう。

「南ちゃん！」

呼ばれた？

「克也は！克也はどうしたの！？」

「野口さん……ちょうどその事を話に行こうと思っていた所でした。」

「雪さん……」

野口 雪さん。

野口 桜さんの親御さんです。

私の家のお隣さん。

「すみません……雪さん。克也君という方を私は……。」

「……説明は私からしよう。」

二人は離れていく。

本当に……私は……何か大切な事を忘れている？

本当に大事な事なのだろうか？

大事では……無いから忘れているのでは？

「……南ちゃん……克也の事……本当に覚えていないの？」

「……はい。雪さんの事は覚えています。桜ちゃんは元気ですか？」

「……なんで桜の事は……私の事は覚えていて！克也の事は覚えていないの！あんなに仲が良かったじゃない！毎日のように一緒にいて……うう……。」

「・・・すみません。」
「何ででしょうね・・・。」

会う人みんなが何故忘れているのかを聞いています。
そんなに・・・私は・・・その人の事を知っていたのでしょうか。

「・・・南ちゃん。このチヨーカーは・・・覚えてる？」

「・・・なんででしょうこれは？」

「克也が南ちゃんから貰った物だって喜んでいたのよ。・・・学校の椅子に落ちていたのを私が預かったの。」

「私があげた・・・？」

「そう。南ちゃんがあげたの。」

「そうなのですか。」

「・・・南ちゃんに渡しておくわ。」

「何故ですか？それは克也さんへの手がかりでは・・・？」

「・・・克也さん。南ちゃんが・・・そんな言い方をしたのは始めて聞いたわ。」

「そうなのですか。」

「ううん。いいの。南ちゃんが持っていて。もしかしたら・・・思
い出すかもしれないじゃない。」

「・・・はい。」

チヨーカーを受け取る。

石が綺麗だね。

・・・眩暈がした。

・・・

「勇者を殺す事になるかもしれないぞ？」

「……ええ。覚悟の上です。」

……

今は……なんだろうね……。

勇者？そんなものが居るわけが無いでしょう。

「「南ちゃん！」」

「はい……。大丈夫です。すみません眩暈が……。」

「そう……。びっくりしたわ。それを渡した途端に顔が真っ青になるんだもの……。思い出したのかと思っただわ。」

「……。すみません。雪さん。今度ゆっくりお話しに行きますね。」

「……。そうね。話を聞いた限りだと……。南ちゃんは克也を助けようとしてくれたみたいだね。……。お礼は言っても責めたりは出来ないわ。またご飯食べに来て、桜も楽しみにしているわ。」

「はい。私も楽しみです。桜ちゃんは可愛いですから。」
寂しい空気が……。流れた気がした。

多分、私はもう雪さんの家へは行けないのでしよう。

……。この克也さんの事を思い出せない限り。

……。誰かに見られた気がした。

後ろを振り返る。

誰も居ない。

……。気のせいでしたか。

叔父さんの車に乗る。

「これから私の家へ向かうからね。身体は大丈夫かい？」

「ええ・・・分かりました。あ、叔父さん、着替えたいので一度家へ行って貰えますか？」

「そういえば制服はどこへ行ってしまったのだろうね。」

「確かスカートは替えがあったはずだね。」

「ブレザーは・・・しょうがないね・・・。家に無かったら買い直しかな。」

途中でコンビニに寄りチョコレートを買ってから家へ向かう。

「なんでしょね。すごく・・・久しぶりな気がします。」

「・・・そういうものなのかもね。南ちゃん、付いていったほうがいいかい？」

「いえ、大丈夫です。着替えてすぐ戻りますから。」

・・・このドレスというのは脱ぎにくいのだね。

デニムとジャケットに袖を通す。

鏡台に手を伸ばす。

・・・何を取ろうとしたのかな？

・・・無意識で手が動いた？

・・・本当におかしいね。

胸騒ぎばかり起きる。

早く思い出せ。と言わんばかりだね……。

……そんなに克也さんという人の事は思い出さなければいけない事なのかな？

机に向かって歩く。

引き出しを開ける。

箱がある。

これを……開けていいのだろうか？

これを開けてはいけない気がする。

これを開けたら……駄目な気がする。

……箱を手にとり……鞆へ入れる。

……いつからこんなに臆病になったのだろうかね。

「叔父さん。すいませんお待たせしました。」

「待つてなんていないよ。行こうか。」

「はい。……いつてきます。」

家へ挨拶をする。

誰も居ない家に向かって。

「南ちゃんが来るとなると娘も喜ぶな。」

「そうなのですか?」

「いつも南ちゃんが来る時はおねえちゃんがかかるの!??って喜んでたよ。」

「今日はいっぱいお話が出来そうですね。」

「娘の相手も大変だと思うけど、無理はしないんだよ?」

「ええ、大丈夫です。無理なんてしてません。葵ちゃんは可愛いですしね。」

「……そういえば高校あがる時、私の家に来ることになっていたのは覚えてるかい?」

「はい。あの時は……。」

頭痛がする……。

”一生の願いだ!”

「一生の……お願いを……。」

”行くな!”

「……お願いを聞いて……。」

”行かないで……くれ。”

「……泣くほどの事……なのかい。」

「……南ちゃん!?!どうしたんだい?涙が……。」

「……どうしたのでしょうか……。」

涙が出てた……?

どうしてなのでしょう。

とても……大切な事。

とても……忘れてはいけない事。

「……大丈夫です叔父さん。行きましょう。」

「……そうかい。」

十・・・・・・・・・・・・・・・・十

「・・・・黒姫、お主の思いはその程度のものか？記憶を消された程度、自力で乗り越えてみるのじゃな。その時は・・・・手を貸してやらんでもない。1日の内に思いだせんような思いならば、全て忘れこの世を楽しめ。その時は一思いに・・・・忘れさせてやろう。」

十・・・・・・・・・・・・・・・・十

第2話（後書き）

第2話読んで頂きありがとうございます。

第3話

景色が流れていく。

「南ちゃん、娘の相手も良いけど、夕飯が終わった後にでもどうだい？」

「・・・叔父さん・・・今日はどうしましょうか・・・。」

「ああ、身体が疲れてそうなら良いんだがね。見た限りそんな感じもしなかったからね。」

「大丈夫ですね。頭も動かしたいですし良いですよ。」

気遣ってくれているのでしょね。

いきなり泣き出した私を普段のペースに戻そうとしてくれているのでしょう。

チョコレートを食べる。

甘いね。

とっても甘い。

ビターなのは私はあまり好きじゃない。

美味しいといえば美味しいのだけだね。

「・・・野口・・・君ですか。」

「え？南ちゃん！？思い出したのかい！？」

「いえ、違います。」

「そ、そうかい・・・野口君は良い子だったよ。」

「・・・皆、心配していますしね。とても良い人だったのでしょ。」

「私は何回か会った時がないからなんとも言えないが誠実そうだった。」

たね。裏切るなんてしなさそうな子だったよ。」

チョーカーの石を転がす。

・・・これを私が作った。

・・・私が男の子に物をあげたと。

あり得ない事だね。

石が光った気がした。

そんな気がした。

光の反射でしょう。

ばかばかしい。

ばかばかしいです。

・・・非科学的ですよ。

「・・・叔父さん少しお父さんとお母さんの所へ行って頂けませんか？」

「良いよ。どうせ通り道だ。」

「ありがとうございます。」

墓地へ入っていく。

「あ、お花・・・忘れてしまいましたね。」

「今度買つて来てあげよう。今日は突然の事だったしね。鞆は置いていかないのかい？結構大きい荷物だろう？」

「ええ。勇気をもらいに行くのです。一人では・・・私は何も出来ない子なので。」

「はっはっは。そんな事はないだろう、私も手伝ってはいたけど家事は出来ていたじゃないか。」

「ええ、そうですね。家事は出来ていました。」

それ以外の事は出来ていたのでしょうか。

ずっと、誰かが傍に居てくれた気がします。

思い出せ。

思い出せ。

思い出せ。

小学生の時。

お母さんが死んでしまった時。

一人で庭に行った。

”誰か”と話した。

”誰か”が背中を押してくれた。

中学生の時。

”誰か”に初めてのチョコレートを渡した。

”誰か”から初めてプレゼントを買った。

お父さんが死んでしまった。

”誰か”は最後には一緒に居てくれた。

高校生になったら。

”誰か”といつも一緒に家へ帰った。

”誰か”が守ってくれた。

”誰か”に私がプレゼントをあげた。

・・・顔も思い出せない。

これも私の記憶なのか分かりません。

私は良く夢を見ます。

・・・これが夢の中の出来事なのか、本当の出来事なのか分かりません。

お墓に水をかける。

「お父さん、お母さん。お久しぶりです。毎日中々来れなくてごめんなさい。」

今日はどうしても、胸のモヤモヤが取れなくて来てしまいました。私は、どうしたら良いのでしょうか。」

鞆から箱を取り出す。

「これを開けたほうが良いと思いますか？」

「南ちゃん・・・？これは？」

「私の大切な物だと思うのです。不思議と机に引き寄せられた気がして、開けたらこれが一番上に入っていました。」

「その他に家の中で覚えていないものはあった？」

「無いです。」

「・・・そうか。」

これ以外記憶に無いものなど無かったのです。

私は今は一人暮らしをしています。

どこになにがあるか分からないで一人暮らしなど出来ないのですから。」

この箱だけは見覚えが無いのです。

けれどもその他の机の中の物は全て見覚えがあるという。

「お父さん、お母さん。私は、野口克也君という人を思い出したほうが良いのでしょうか？」

・・・返事はあるわけがありません。

ビュッ

風が吹いた。

前を見続ける。

「ありがとうございます。お父さん、お母さん。」

お辞儀をする。

箱を開ける。

「みなみちゃ……」

何も言わせません。

私自身が決めたのです。

壊れたイヤリングが一つ。

……また視線がします。

触れ。という事でしょうね。

誰だかわかりませんが、ヒントを与えすぎですよ。

ゆっくりと……

イヤリングへ触れる。

ドバツ

私の手の平から水が出てくる。

「南ちゃん！？なんだいそれは!？」

「大丈夫です。落ち着いてください。……見えるのですか?」

「そんな状態で何を言っているんだい!？」

手から水が零れ落ちてゆき……そして止まる。

手を振る。

ピッ

水が飛ぶ。

「お父さん。お母さん。有難うございます。背中を押しして頂きました。」

「……絢子さん……いや、”小林さん”。舐めた真似をしてくれたね。」

こちらに帰って来てから記憶を取り戻させるようにしたのかな？。忘れさせるならば完全に忘れさせるはずだ。

このような中途半端な魔法。

思い出させて……逆に苦痛をとった所かい？

「ふ……ふ……ふふふ……。」

舐めないでもらいたいね小林さん。

さて、私を見ている人は……当たりかな？はずれかな？
多分ですけど……当たりでしょう。

「み、南ちゃん！？どういう事なんだい？」

「その前に、叔父さん。少し離れて居て下さい。」

「え、え？どういう事だい？」

「離れてください。」

「分かったよ………。これぐらいで良いかい？」

「火よ。」

ボツ

音が響いた。

「み、南ちゃん何がどうなっ……」

「隠れているのは止めて出てきてはどちらですか？先ほどから視線ばかりこちらへ向けて。私にヒントを与えているつもりですか？」

ガサツ

「ほう……いつからじゃ？」

「学校を出る時からです。ルーク・シユタインさん」

「よくワシじゃと分かったな。」

「よく言いますよ。あんな子供、貴族でもおかしいでしょう？貴方が300年生きた化け物爺というわけですね。」

「誇張があるがのう。それであつとるわ。」

「……貴方は世界の移動が出来るのですか？」

「出来るかと答えたら？」

「私をもう一度、野口君の所へ送って下さい。」

「お主が殺す事になつてもか？小さき黒姫。」

「ええ、どうせ災厄に殺される可能性があるのでしょう？それでしたら、私が殺して一緒に死んで見せましょう。」

「お主が災厄の可能性もあるのじゃがな。」

「無いですね。私のこの力である国を壊滅させる。無理でしょう。仲間がいるならまだしも。」

「お主の目的は？」

「野口君の回収です。殴って蹴って、最後に抱きしめて。それで終

「わりです。」

「行きのみの片道券じゃ。」

「ええ、それで結構。」

「即答……。わっはっはっは！さすがは黒姫というだけあるのう。」

「……。南ちゃん……。その人は一体？」

「叔父さん、申し訳ありません。葵ちゃんにはまた会えなくなりそうです。」

「どういう……。」

「先生方には、野口君と、絢子……。いや小林さんを連れ帰ってくると、そう伝えてください。」

「……。また居なくなるのかい？」

「はい。」

「絶対にかい？」

「はい。」

「そんなに野口君は大事なのかい？」

「はい。」

「ただの幼馴染なのだろう？」

「は……。いいえ。ただのではありません。」

「はあ……。南ちゃんは昔から言い出したら聞かないからね……。駄目だといったら？」

「行くだけです。」

「さっき片道だで行っていたけど？」

「絶対に帰ってきます。」

「そうか……。南ちゃんは冗談は言うけど嘘は言わないからね。……すぐに行けるものなのですか？ルークさん。」

「すぐに行けるのう。必要なものは、この本ぐらいじゃ。」

「南ちゃん……ちょっと待っててくれるかい？」

「はい。」

車まで走って行ってしまった。

「はぁ……はぁ……私も歳をとったな。南ちゃん……これ。」

「マグネット式の碁盤……？」

「異世界で暇な時もあるだろう？」

「……ありがとうございます。」

「では、行くかのう、黒姫。ワシに近づけ。」

「これぐらいですか？」

「遠いのう。これぐらいじゃ。」

ギョッ

「お爺さん、ボケてると困るのですが？」

「黒姫。おぬしは良い匂いがするのう。」

「離れてくださいエロ爺。」

「つまらんのう。」

リング状の物体がぐるぐると私達の周辺を回る。

「これが貴方の魔法ですか。時遣い。」

「魔法ではなく、術式じゃ。」

「そうですね。……叔父さん。すいません。」

お父さん、お母さん。親不孝な娘でごめんなさい。

お墓参りにはもう来れないかもしれません。

ですが……引いてはいけない時があると思つのですよ。

さあ、小林さん。

小林さんと、イスターナ皇国全員の思いと。

私一人の思い。

どっちの思いが強いかな勝負と行こうじゃないか。

野口君、幼馴染は終わりだ。

私はもう逃げないよ。

幼馴染だなんて言って逃げないよ。

君は逃げないでくれるかな？

”・・・好きだよ。野口君。”

第3話（後書き）

第3話読んで頂きありがとうございます。

第4話

暗い。

真っ暗です。

「手を離すのではないぞ。黒姫。」

「離したら？」

「簡単じゃな。死ぬだけじゃ。」

「・・・こんな所で死んでしまつたら最悪ですね。
ぎゅっと握りなおす。」

「黒姫。少し汗ばんでおるぞ？焦っておるのか？」

「そういうのは言わないでもいいのですよ？お爺さん。」
指を絡めてくる。

エロ爺・・・。

ふう・・・なんて言ってしまうのでしょうか。

私のスタイルは冷静沈着なのですよ。

「・・・南はあんまり冷静じゃないよな・・・とか野口君の声が聞こえてきた気がします。」

いいです。

いいんですよ。

最近の流行りは冷静な無口っ子だと聞きました。

クラスの男の子達が言っていたのですから間違いありません。

これは私の時代が・・・。

「・・・南ってあんまり無口でもないよな・・・。とか・・・言われ
そうですね。」

私の頭の中の野口君はうるさいですね。

「何を笑っておるのじゃ？」

「いえなんでもありませんよ。」

「少し時間がかかる。聞きたい事があるなら今の内に答えてやろう。」

「聞きたい事は3つです。」

「ほお・・・少ないのじゃな。」

「はい。それだけで十分です。」

「なんじゃ？」

「1つ目は野口君はまだ無事ですか？」

「無事じゃな。後1年もしない内にノーラ姫と結婚してしまうじやろうがな。」

「そうですか。では2つ目、記憶の戻る方法は？」

「お主が体験した事じゃろう？勇者の記憶を戻したいのならば、感情を高ぶらせ、そのチャーカーとやらを着けさせればいいじやろう。」

「これをつければ戻ると。」

「そうじゃな。お主の記憶が一番濃く残っておるのじやろう。じゃから・・・それをこちらの世界へは持ってこさせなかつた。ノーラ姫も狡猾じやのう。」

「・・・野口君の媒体は・・・これではないのですか？」

「私はイヤリング。野口君はチャーカーだと思つたのですが。」

「そうじゃな。あやつ媒体は靴じゃ。」

「・・・ああ・・・そうですか。陸上部で使つていたスパイク。それがありましたね。」

野口君は大切に使つていたようでしたから。

だから・・・私の記憶を消す事が出来た・・・というわけですか。記憶を消す前提条件は、その人に関する物を持っていない。という事ですかね。

という事は、お父様、マールさん辺りは・・・確実に忘れていると

思ったほうが良いのでしようね。制服辺りがお父様の近くにあれば・・・嫌です。想像して気持ち悪かったです。

エルさんは大丈夫ですね。

私の制服が近くにある。

この魔法・・・いえ術でしたか？術の範囲がどれぐらいの物か分かりませんが、馬車で5日、1日40〜50kmと考えて200km。それ程あると思えません。

それに加えて、制服やら下着やらがあの家には・・・嫌です。想像してしまいました。

変態な行動はしないでくださいよ・・・。

「3つ目はどうしたのじゃ？」

「ええ、この術は誰にでも使えるのか。それと代償を教えてください。」

「使えん。ワシは特別じゃな。ノーラ姫は幼少の時に儀式で覚えたのじゃろう。」

「儀式ですか。」

「という事は私が覚えるのは不可能と。」

「代償は寿命じゃな。自分自身の移動にはつかわれん。じゃが他人を移動させる。となると話は別じゃ1回にあたり10年といったところかのう。」

「・・・重い。」

「それ程この国を守る為に必要な事だったと。」

「そうじゃ。勇者というものはそれ程大事な欠片となるのじゃな。」

「代償が命という事は・・・時遣い。貴方は何度も移動出来るのですね。」

「そうじゃ。」

「片道を往復へはしてくれないのは何故ですか？」

「4つになつておるぞ黒姫。」

「良いじゃないですか。けちけちしないでください。」
「ワシはお主が気に入った。ただ、それだけの理由で送ってやるのじゃ。」

帰りなぞ知らん。お主自身が帰りたいのならば自分でなんとかせい。ああ・・・お主が身体をワシに永久に差し出すというのならば、勇者だけは帰してやつてもよいぞ？本当に永久じゃ、若いまま朽ち果てる事もなく、死ぬという事もなくじゃ。」

・・・最終手段でしょうね。

嫌です・・・ですが、背に腹は代えられないでしょう。

ぞくっ

鳥肌がたった。

「何をしていますのですか？」

「けちけちするなといったのはお主じゃろう？減るものじゃあるまいしけちけちするな。」

「減りますよ。触らないで頂けますか？」

「手は離せない。尻は触るな。なんともまあわがままなやつじゃのう。」

「このセクハラ爺・・・。」

この移動が終わったら即殴り飛ばしてさしあげましょうか。

「ふおふおふおっ、爺になると物覚えが悪くなつてのう・・・。」
「見た目10歳の300歳超えのお爺さんですか・・・。面倒なの
に捕まってしまったようですね・・・。」

野口君と会う為だ。

我慢をする。

我慢をする。

「ほれっ。」

「触るな爺。」

殴ってしまった。

「手を繋いでおったのを忘れておったわ……。逃げ切れなかったのう……。。」

「もうボケたのですか？いえ、ずっとボケ続けているのでしょね。」

「黒姫。お主は本当に面白いのう。」

「私は面白くないです。」

……。野口君。もう一度、会いに行くよ。

今度は……。私の全てをベットしよう。

野口君は……。私に賭けてくれるかな？

大穴だよ？ふふっ。

第4話（後書き）

第4話読んで頂きありがとうございます。

第5話

真つ暗な空間に明かりが出てくる。

「あれが出口ですか？」

「そうじゃな。黒姫。」

・・・戻ってきたのだね。

小林さんには悪い事をしたと思う。
命を削ってまでの決意を穢したのでしよう。

・・・それはそちらの都合だけでもね。

その都合は私には到底許せないよ。

トシ

土の地面に降り立つ。

「トシは・・・どこですか？」

「ワシの本当の家じゃな。外で話すのも拙い。中へ行くぞ。」

ウッドハウスですか・・・確か他の街は石の家ばかりだったのに。
ここは日本風なのですね。

「歴史食い！居るのじゃろう。客人じゃ茶ぐらいだせ。」
「……れきしぐい？名前でしょうか？」

「……はい。」

「それはお主の飲みかけじゃろう……。本ばかり読んどらんで、たまには身体を動かせ。」

「……はい。」

「なんでしよう。本のタワーが……
本が……沢山ありますね。」

小さな女の子が出てきました。

「時遣い。この子は？れきしぐいという名前なのですか？」

「この子が本当のルーク・シュタインじゃな。」

「……どういう事なのでしょう。」

「ルーク・シュタインは元は妾の子じゃ。5つの時、親が倒れてしまったのを切欠にシュタイン家の長女として入る予定じゃった。」

「どうしてここに？……時遣い……もしかして貴方……幼女しゅ……。」

「そんな訳があるか。こやつには特殊な術式があつてのう。ワシとの相性が良いのじゃ。」

「そういえば、術式とはなんですか？」

「……トラビアからは何も聞いておらんのか？あやつ……あの歳になつても説明を省くのじゃな……。」

「ええ。お父様からは何も……いえ土の力がある事だけは魔法ではなく術式。」

「この術は誰にでも使えるというのは分かるか？」

「ええ。何か媒体を使ってというのがしょう？」

「そうじゃな。媒体じゃ。ワシはこの本じゃな。」

「大切に使ってきた物がその術式の媒体となる。それしか聞いていませんね。」

「あやつ・・・小さい時から話を省く癖があつたが・・・術式とは4元素でなりたつておる。」

4元素・・・

今の所見知つたのは・・・

「まず、”火”。黒姫お主の力じゃな。源はそのイヤリングといったところか？」

私のですね。

「その次に”水”。ノーラ姫のような力じゃな。あやつ源は指輪じゃ。それ以外に増幅しておるものがありそうじゃがな。」

小林さんのですか。

「そして”土”。」

「お父様のですね。確か剣でしたか。」

「そうじゃな。そして最後、”風”じゃ。これは今代の勇者の特徴じゃな。」

・・・野口君は風だったのですね。

「この属性とやらは・・・。」

「まあ待て。この4元素には他に力がある。火は力。風は速。土は守。そして水は五感を。」

この4元素をもつとる者に与えられる能力じゃ。

これを”エレメンタル・パラメーター”というのじゃ。」

・・・いきなりRPGぽくなりましたね。

「その属性とやらは、どうやって決まるのですか。」

「産まれた瞬間じゃ。体内で渦巻く力が体現して現れる。自然現象なのじゃよ。お主達の世界では無いようじゃがな。これは自然現象であり、異常現象などではない。」

「・・・私や小林さんは媒体を通して居ない気がします。お父様は言っていましたよ。媒体を通さない限りこの術式は使えないと。」

「想像力の問題じゃ。この術式に必要な物は心底大事にした物体一つ。それと自力の想像力。対価は身体的な疲れのみ。」
「・・・ああ、なるほど。」

こちらの世界にはテレビやPC。ゲームや漫画といったものが無いのですから。

手の平から火や水が飛び出してくるのなど想像出来ないという訳ですか。

「確実に媒体は通している。全ての人間が手や足、身体全体から出せるのじゃ。それに伴う想像力がないというだけじゃな。」

「ああ・・・分かりました。体内から出した”形の無い何か”を剣や装飾品を通して増幅。そして形にする。」

剣や装飾品からでは無いという事ですね。」

「そうじゃ。お主は理解が早くて良いのう。昔の軍人連中に講師をした時は・・・。」

大変でしょうね・・・。この概念を理解させるのは大変でしょう。ある程度ゲームや漫画で触れているからこそ・・・理解出来るのでしょうか。」

「・・・はい。お姉ちゃん。お爺ちゃん。」

「ぶ。お爺ちゃんですか。見た目は若くて頭脳はお爺さん。その名も。」

「うるさい奴じゃのう。」

「・・・名前はなんていうんですか？」
完璧に忘れていました。

「名前などすてた。名を呼びたければ、そうじゃのう。タイムとでも呼べばいいじゃろっ？」

「時遣いでTimeですか。良いんじゃないですか。そういうのは嫌いじゃないですよ。」

・・・お茶が美味しいです。

・・・あれ？

「何故、緑茶が？」

「ワシが持つてきてるからにきまつとろつ。」

「あ！コーヒーとチヨコレート！！！」

「・・・黒姫・・・キャラ崩壊しておるぞ・・・お主・・・冷静な
のが売りだったのではなかったのか・・・？」

「・・・チヨコレートを完全に忘れていました・・・。また食べれ
ない日が続くのでしょうか・・・。」

「金はあるのか？」

「叔父さんから貰ってください。」

「あやつか。月に1度ならば構わないじゃろつ。ワシも買い物に行
くからのつ。」

・・・叔父さんごめんなさい。

迷惑ばかりかけてしまつて。

ですが、これは譲れない事です。

心身安定の為に必要なものです。

・・・まあいいですかね。

どうせ私が居なくなつたのならば大量のお金は叔父さんの物となる
のです。

少しぐらい出してもらいましょう。

第5話（後書き）

第5話読んでいただき有難うございます。

第6話

「・・・で？時遣い、貴方の術式は？」

「唐突に話を戻したのう。ワシ自身は水じゃな。姿を変えて見せる事が出来るのじゃな。」

「どういう事でしょうね。」

「それで移動が出来るのであれば、水を扱える人ならば全て世界移動が出来る事になるのでは？」

「ワシは300歳などではない。まだ113歳じゃ・・・な。多分そのぐらいじゃのう。」

「成る程、噂とは尾ひれがつくものですからね。ですが、それはまだという歳ではありませんよ。その姿を維持している理由は、その本ですか？」

「違うのう。これは水の術式使用の為じゃ。姿を変えたりするのに役立つからのう。」

「時の術式とは、ただの受け継がれし能力じゃな。お姫さんの儀式と同じ物じゃ。」

「・・・成る程。」

「一代に一人限りといった所ですか？いや・・・違いますね。死んだ時に受け継がれる。そんな所ですか。」

「・・・ほう・・・何故ワシが死ぬと分かった？時を操るといえば死なないという風に想像するものじゃがな。」

「この術式は意識化でしか発動しないと予想したからです。それに加えて300年という噂も嘘ではないのでしょうか？貴方のお父さんお母さん誰かは知りませんが、その人が死んだから貴方が時遣いでもなったのでしょうか？」

「そうじゃのう。首を撥ねられたらワシも死ぬ。即死でなければ戻す事が出来る。ただそれだけじゃ。その時にこの因果を渡し、死ぬ。」

次は誰に渡るかのう。」
「そうですか。」

「では、早くその姿を元に戻して頂けませんか？タイムさん。」

「その前に、歴史食い。これを直すのじゃ。」

「・・・めんどう。」

「直せ。」

「・・・はい。」

手に持っていたイヤリングを取られた。

手元が光っている。

「ずっと手に持っているわけにはいかんじやろう？」

「・・・直せるのですか？」

「物体に関しては、あやつが最善じゃな。」

「・・・はい。お姉ちゃん。」

・・・私が着けていた物と同一だね・・・。
壊れてしまった所が分からないぐらいだね。

「どういう事ですか？これも術式？」

「壊してしまったという歴史を食ったのじゃよ。」

・・・成る程そうですね・・・。対人物に関しては時遣いが物体に
関しては歴史食いが。

とてつもなく便利ですね・・・。

「これは・・・相性が良いといったところではありませんね・・・。

「歴史食いはまったくの特異性じゃな。何があったのかは知らん。」

「ワシも100年生きてきてこのような奴は見た事がないのじゃから。」

「媒体などは無いのですか？」

「無い。増幅器などいらないうった所かのう。」

また卑怯なのが現れましたね……。

まあ良いです。

左耳につける。

チリン。

懐かしいね……。

「タイムさん。えっと……ルークちゃんが良いかな？ありがとうございます。」

これは大切な物だから……直してくれて助かったよ。」

「……どういたしまして。お爺ちゃん、戻る。」

タイムさんが頷き、ルークちゃんが本の山に戻る。

「良いのですか？」

「これからの話にあやつは関係ないからのおう。あやつは俗世から離れたのじゃ。これ以上お主には関わらせん。」

「そうですか……可愛かったのですけどね。」

水が……。

……水がタイムさんの周りに集まっていきます。

これが姿変えの術式と云った所でしようか。

「これで良いかのう……？久しぶりじゃ。本来の姿に戻る事などあまり無いからのおう。」

「・・・どういう事でしょうか？」

「15歳ぐらいの見た目。それは良いです。老いなどほぼ無いのでしょうから。」

「タイムさん。・・・何故？」

「この”黒髪”か？」

「・・・そうです。」

「100年前いや正確には98年前じゃったか。その時の勇者がワシじゃ。」

「死んだと聞きましたが？・・・いや違いました。剣を杖に・・・」

「あやつを消した後、その時の能力がある事にきづいた。」

「あやつとは・・・災厄の事でしょうか？」

「この能力を持った時に、ワシは縊り付いた。今ではその時死んでいれぱと思わない事も無いのじゃがな。」

「・・・永遠に近い命というのはどうなのでしょうね。」

「良い事ばかりでは無いとだけいっておこうかの。」

「そうですか。」

「ワシはすぐに元の世界に戻る為、壊滅した国の地下へ行った。」

「召還した人は？」

「死んでいたのう。自害じゃったよ。首に剣を当て、次の勇者など呼ばせないとだけ血で書かれておったのう。」

「そうですか。」

「ワシはその時に移動の力を得た。それだけじゃ。エルニール帝国はそれ以降、勇者を呼べていない。今は……名前が違ったかのう？」

「何故こちらの世界へ戻って来たのですか？」

「どこへ居ても一緒じゃからな。死なない。老いが無い。人と違うというのは迫害されるものじゃ。」

ふう……頭が回らなくなってきたね。

理解するだけでも疲れてくるね。

学校の授業と全く変わらない……いや、理論が良く分からない時点でこちらのほうが大変かな。

「少し休むとするか。」

「はい。ありがとうございます。」

「黒姫、お主飯は作れるか？」

「ええ……普通になら。」

「今晩は普通の飯が食えるのう……。」

「……一体何を食べているんですか。」

「歴史食いは本を読む以外にも実験好きという趣味があつてのう……。」

料理にいらぬ物を入れてしまう人ですね……。

「……分かりました。御礼は料理でお返し致しますよ。」

「ほっほっほ。楽しみじゃのう。」

手料理を誰かに食べさせる。

久しぶりの感覚だね。

野口君は美味しいしか言わないからね。

まあ……それだけで十分なのだけでも。

お弁当を作ってあげて学校で渡した時など……ふふふ。

また振り出しに戻ってしまった。

ゴール間近にも振り出しに戻るがある、定番だね。

いいよ。

何度でも

何度でも。

近づくだけだよ。

第6話（後書き）

第6話読んで頂き有難うございます。

第7話

玉ねぎを・・・

しらたきは無いのですね。

ジャガイモを・・・

醤油と日本酒・・・後少しの生姜を。

「良い匂いがしてきたのう。」

「肉じゃがですよ。」

「ワインは入れんのか？」

「あのワインですか・・・？」

あの色が何色もあるワインをですか・・・
美味しいのですが、どうなのでしょうね。

うん美味しいですね。

いつも通り。変わらない味。

「今日は私の手作りなのですから、異世界の味に拘る必要は無いと思いますよ。」

「そうかもものう。」

食事を机に並べてゆく。

「いただきます。」

「黒姫の料理と、ふむ……美味しいのう。歴史食い、お主も少しは練習したらどうじゃ？」

「……いただきます。……嫌ならお爺ちゃんが作れば良い。」

もぐもぐと食べていく。

あ……

「ルークちゃん。汚れていますよ。」

口の周りを拭く。

「……ありがとう。……そういえば名前……。」

「ああ、く……いや南だよ。私は南。」

「……南お姉ちゃんありがとう。」

「初めて笑ってくれたね。」

可愛い笑顔だね。

銀髪で顔も良い。

将来はすごい美人となるのだろうね。

「黒姫。お主、これからどうするのじゃ？」

「お城へ行くだけです。小林さんと野口くん。二人を助けて、災厄とやらを全て終わらせ、

家へと帰るのです。約束しましたから。」

「死ぬと思うのじゃが？」

「覚悟の上です。野口君の記憶さえ戻れば、後は何とかしてくれるでしょう。」

「……信頼と無謀は違うのじゃが？」

「ええ、無謀でしょうね。ですが、この世界に味方など私にはいません。ああ……そういえばエルさんがいましたか。ですが、味方はしてくれないでしょう。」

「2・3日ここへ泊まっていくなのじゃな。火を放つだけで敵う相手ではない。」

「・・・良いのですか？」

「お主が気に入った。そういったはずじゃが？」

「・・・ありがとうございます。」

なんででしょうね。

いつからでしょう。

他人の善意が簡単に信じられなくなったのは。

子供の時は親切だと思った事が、大人になるにつれて信じられなくなっていく。

考えている事が想像出来る。

・・・これは囲碁を打ち始めてから酷くなりましたね・・・。

考えすぎもどうかと思います。

度を超えると被害妄想とかになってしまっそうですしね。

気をつけましょう。

「今日は休め。風呂に入りたいのならば、お主自身の火で勝手に焚くのじゃな。ワシは寝る。」

・・・もう夜でしたか・・・。

時間がたつのが早いですね・・・。

「ルークちゃん、こちらで良いのですか？」

家の外、裏側に回って来た。

「・・・うん。」

「ここに火をつけて、どれぐらいで焚けるのでしょうか・・・。」

「・・・半刻。」

「そうですか。では”火よ。”」

手の平から火が出る。
・・・そういえば焦っていましたが先程、あちらの世界でも火が出ましたね。

これは・・・ああ・・・そういえば小林さんも使っていましたね。姿を変えていたのですから。

薪が燃える。

火ですか。

私自身はこの火は熱く感じない。

ですが、物に当たった後は熱さを感じる。
不思議ですね。

・・・ああ、分かりました。手の平から投げた瞬間に火となるのでしょうね。

それまではただ、”体内から取り出した何か”というやつですか。
気とか念とかそういうのでしょうかね。

「ルークちゃん、一緒にお風呂に入ろうか。」

「・・・」

首を振られた。

「なんでかな？」

「・・・お風呂苦手。」

「苦手ならば克服しないとね。」

「・・・苦手。」

ルークちゃんと手を繋ぎ、お風呂へ向かう。

「一人で脱げるかな？」

「・・・大丈夫。」

服を脱ぐ。

そういえばドレスは置いてきてしまったね。

「……ルークちゃんは結構胸があるのだね……。
まだ13〜14歳といった所なのだが……。」

ぺた。

「……ぺた。」

女の価値は胸などではないのだよ。

髪を洗う。

「……南お姉ちゃんの髪……綺麗。」

「そうかい？触ってみる？」

「……うん。……すごいさらさら。」

「そうだろう？これは私が自慢出来る所だからね。」

「……わたしもお風呂入ればなれる？」

「ああ、私よりも綺麗になるだろうね。」

「……お風呂……入るようになる。」

「良い事だね。きちんと入るのだよ？」

「……うん。」

母性とはこういう事なのだろうね。

桜ちゃんや葵ちゃんが入った時にも思った事だ。

小さい子の面倒を見てると自分が優しくなつた気になれるよ。

「……野口君と囲碁をしている時は全く優しくなれないからね……。」

その後に桜ちゃんとお風呂に入った時は癒されるよ……。」

湯船に浸かる。

「ふう……。」

髪を纏めるのが毎回大変なんだがね……。」

この湯船に入る感覚はやっぱり忘れられないね。
やはり、私は日本人なんだ・・・と自覚させられる。

「・・・南お姉ちゃん・・・熱い。」

「・・・どうやって冷やせばいいのだろうね・・・。」
「ワシが冷やしてやるう。」

水が放たれた。

少しぬるいかな・・・まあ小さい子が入るのだから・・・。

「・・・何をしているのですか？」

「ワシも入ろうかと思つてのう。」

「後にしてくださいエロ爺。」

「ほっほっほっ黒姫、お主脱いでも胸が・・・。」

「殺しますよ。」

髪を巻いていたタオルで身体を隠す。

「はぁ・・・ルークちゃん外に居ては風邪を引いてしまいます。ぬ
るくなりましたし入ってください。」

「・・・ちようどいい。」

「そうかい。」

・・・外が見える。

周りは森だらけで民家は近くになさそうだから安心だけどね。
星が見えるというのは良いね。

温泉に入りに行きたいね・・・。

野口君と二人で温泉旅行というのも・・・悪くないかな。

・・・何かしてくるのかな・・・？

・・・私から言わないと何もしてこないだろうね・・・。

・・・いやどうだろうね。

もう私達も大人になったのだから。

幼馴染の範囲を超えた事なのだろうね。

・・・そっいえば髪がまた濡れてしまったね・・・。

ドライヤーなど無いのだから・・・乾かすのに時間がかかりそうだね・・・。

火力が調節出来ればいいのだが・・・。

・・・調節・・・想像力。

身体を離れなければ温度は感じない。

色々使えそうな物は出てきたね。

第7話（後書き）

第7話読んで頂きありがとうございます。

第8話

「ごそ
ごそ

何か動いている……。

「……南お姉ちゃん……起きて。」

「後5分……。」

「……起きて。」

「あと……。」

「起きるのじゃ黒姫！」

「あ、おはようございます……。」

昨日はルークちゃんを抱きしめて寝てしまったのですね……。それは悪い事をしましたね……。

「……南お姉ちゃん起きた？」

「はい。起きましたよ。」

「やっと起きたか……黒姫。お主は本当に朝が弱いのが……。」

「……なんでここにタイムさんがいるのですか？」

「ふむ……黒い下着も良いと思ったが？白も悪くないのっ？」

「工口爺。早く出て行ってください。」

「ほっほ。黒姫。」

「なんですか？」

「あの後、お主の家へ行ってドレスは持ってきてやったぞ。」

「……タイムさ……。」

「意外と下着は子供っぽいのが……。水色やら……。」

「それ以上言うのなら、私の名前に賭けて貴方を……。」

「おお……怖い怖い。適当に箱に入れてきたからのう後はお主で

なんとかかせい。」

ふう……朝から血圧を上げる人ですね……。
まあ……こんな格好で寝ている私も私ですがね……。

「黒姫。飯を食った後、ワシに付き合え。」

「どつという事でしょうか？」

「薪割りじゃよ。」

「……はい？」

……薪割り？

やって出来ない事はないでしょうが……。

1本の大きな木の前にタイムさんが立っています。

「水よ。」

水の塊がタイムさんの目の前に……。

「細く……細くじゃ。」

段々と小さくなっていきます。いえ小さくではなく……棒状……
？回転している？

「見とれ黒姫。」

ヒュッ

ズ、ズズズ……

木が……ずれていきます。

「水で切ったのですか？」

「そうじゃな。水というのは、圧縮すればするほど、出力を増す。」

ああ……そうですね。水は石をも切れる物ですね……。

「それが想像力といった所ですか……。」

「そうじゃな応用を利かせれば何でも出来る。それがこの術式じゃよ。ワシならば水で出来る事ならばなんでも出来るという事じゃな。」

「……なるほど。」

想像力さえあれば何でも出来るというのは嘘ではない事はわかりました。

ですが……何故、薪割り？

「そこに、切った木が何本がある。あれを昼までに薪にするのじゃ。勿論。お主の術式でじゃな。」

「……私は火ですよ？燃えて炭になってしまふのでは？というか薪割りなんてする必要はないのでは？昨日お風呂に使った薪もルークちゃんにかかれば……戻ってしまうのでは？」

「そんな便利な物ではないのじゃよ。歴史食いの術式は炭になってしまったものを木に戻すことは出来ないという事じゃ。」

「……成る程。薪と炭では別物と。」

「薪に火をつけた直後にルークちゃんが術式を使えば元に戻る。けれども違う物体になってしまうと戻せないと。中々に使いがたいのかもしれないね。」

「そうじゃのう。黒姫、お主誰も殺したくないのじゃろう？」

「……出来ればしたくはありません。……ですがもう覚悟は……。」

「わざわざ手を汚す必要はあるまい。」

「……そうですね。」

「薪割りをする。木自体を燃やさなければいいのじゃ。」

「……そんな事……。」

「お主次第じゃな。頑張るのじゃぞ。」

「……行ってしまいました……。」

まあ何はともあれ実践ですね……。

木の塊を切り株に乗せる。

……重いです。

私は文科系なのですよ……。

「はあ……はあ……。」

燃やさない。

……いやまずは……火で……どうやって切るかを想像しましょう。

……それでいて……人を殺さないという武器はなんでしょうか……。

……ああ……ありましたね。鞭です。

「火よ。」
想像。

鞭の形を想像して。

段々と細くなっています。

木に向かって……振ってみますか。

パーン

……当たった部分だけが傷ついて……少し燃えています。

「どうしたら……良いのでしょうかね。」

いや、鞭というのに捕らわれては駄目です。

剣だったとしてもやり方次第で殺しはしないでしょう。

剣の形を想像する。

「これだったら剣を買ってきたほうが良いのでは……。」
「まあ良いです。お金も無い事ですしね。」

木に向かって切りつける。

ズバツ

「真つ二つに……。」

ポツ

「……燃えてしまいましたね……。」

火力の調節は難しいですね……。

もっと抑えて、抑えて。

……何個切ったでしょうか……。

結構……というかすごく疲れてきました……。

あたり一面木の燃えカスだらけですね……。

……もう一度。

……いや違う。

想像して。

……温度を低くするから駄目なのは？

・・・高く。高く。
もっと高く。

赤い火では駄目です。
青く青く。

青くなるまで燃えてください。
もっと。
もっと。

切れ味を鋭くすれば良いのです。
瞬間的に火が漏れ出さないように。
完璧に剣の形を作る。

・・・綺麗です。

「青い・・・炎の剣ですか。エクスカリ・・・あんな伝説の剣と比べちゃ駄目ですね。」

木を切る。

さっきとは違う。

何も手ごたえが無い。

トン

切り株を叩いた音がした。

「・・・真つ二つです。」

切り口は・・・燃えていないですね・・・少し黒くなっていますが・・・上出来でしょう。」

「ほお・・・黒姫。なんじゃその剣は。お主人殺しはしたくなかったのではなかったのでは？」

「殺さない為です。これは殺さない為に・・・出来たものだ・・・思いたいのです。私の意志に従う剣です。」

「ほっほっほ。初めて見る術式じやのう。剣自体に火を纏わせたのは見た事があるが・・・そのような使い方は初めて見たのう。・・・名前でも付けるか？」

「・・・いえ。小学生の時でしたら楽しくつけれたかもしれませんが・・・まあ名前をつけるとしたら、ブルー・・・プラネットでもつけましょうか。」

「青い惑星とな。何故その名前なんじゃ？」

「野口君が好きな漫画の宝石の名前なんですよ。」

「お主はいつも勇者の為じやのう。」

「・・・ええ。私の全てですから。」

第8話（後書き）

第8話読んで頂き有難うございます。

第9話

「……ふう。」

「沢山……切ったの……。」

「そうですね……。切りすぎました？」

「1月はしなくてよさそうじゃな。」

「そうですね。それは良かったじゃないですか。老体に鞭を打たないで済むのですから。」

「お主も言うの……。」

数百本の薪が積んであります。

少し楽しくなってきたてきってしまったのはご愛嬌でしょう。

力を入れなくても切れるのですよ。

楽しくなってもききます。

……お腹が空きました。

「今日は何を作りましたよかね……。」

「カレーがいいのう。」

「また異世界ぽくないものをご希望ですね……。」

「お主が薪をわつとる間に鶏を捕まえておいたからのう。」

「……そうですね……。言っておきますが捌けないですよ？」

「分かつとるわ。ワシが捌いて水で煮込んでおいた。臭みもこれで少しは消えたじゃろうて。」

「そこまで出来るならば自分で作れば良いじゃないですか……。」

「分かつとらんのう、黒姫。他人が作ってくれるからこそ美味しいのではないか。」

「……そうですね。」

……そうかもしれませんね。

「・・・南お姉ちゃんはお料理上手。」

「そうかい。」

ルークちゃんの頭を撫でる。

「そういえば、タイムさん。」

「なんじゃ？」

「お父様達はどうなっているのですか？」

「知らんのう・・・。」

「・・・えらい無責任ですね。執事長さん・・・。」

「ワシが居なくなるのはいつもの事じゃからのう。1月ぐらいならば何も問題あるまい。」

「そうなのですか・・・。それで済むのですか、結構放任主義なのでね・・・。」

「・・・本当に大丈夫なのでしょううか？」

かなり心配なのですが・・・。

「のう、黒姫。」

「なんですか？」

「城にいくのじゃろう？」

「ええ。」

「ここからは歩いて10日はかかるのじゃが？」

「途中に街などあるのでしょうか？」

「お主、金はあるのか？」

「・・・そういえば、ああ換金してもらいましょうか？」

「タイムさん、換金してください。貴方はあの世界で買い物するの
でしょう？」

「そうじゃな。1000円当たり1シグラ当たりでどうじゃ？」

「1シグラ？どれぐらいですか？」

「どこその宿で1泊は出来る金額じゃな。これじゃ。」
銀色のコインが渡される。

「これで1泊ですか・・・安いんですね。」

「価値が違うからのう。」

「今1万円が確かバックの中にあるはずですよ。これを換金して下さい。」

「10シグラじゃのう。ほれ。」

「タイムさんちようど良いですよ。貨幣についても教えて頂けますか？」

「めんどろじゃのう・・・トラビアはそんな事も教えていなかったのか？」

「はい。ですが金色の貨幣は見せてもらいましたね。後確か、銅色もありましたか。」

「そうじゃな。まず銅色のやつは1グル 100グルあれば1シグルとなる。100シグルあれば1ゴグルとなる。分かったか？」

「はい。10万円が金貨1枚と。10円が銅貨1枚と。」

「お主、頭は良いのじゃな。」

「普通じゃないですか・・・？」

「普通でしょう。100倍と1/100をすれば良いだけの話ではないですか。」

「・・・後は、その髪じゃな・・・。」

「出来れば・・・染めたくは無いですね。」

「ふむ・・・ワシが姿を変えてやる事は出来るが・・・元に戻せんのう。」

「・・・どういう事でしょうか？」

「その水の術式で他人の姿は変えられないのですか？」

「変えられる。じゃが、100%同じ姿には戻らん。黒姫、お主顔が変わっても良いか？」

「良くないですね・・・。染める・・・しかないのでしょうかね。」
「染める・・・染めたくは無いですね。」

やむを得ないのでしょうか……。

「……タイムさん。」

「なんじゃ？」

「術式とは、媒体を通して……身体から出せるのでしたね……」

「そうじゃが？」

「少し失礼します。」

椅子から降りて正座をする。

「何をしとるのじゃ？」

「火よ……。」

目の前に青い炎がある。

手の中に……

身体に……

顔に……

髪に……

「……なんとも。黒姫、お主。本当に術式を知らなかったというのか？」

「……どつですか？」

「黒姫……いや蒼姫とでも呼べば良いのかのう？」

「……南お姉ちゃん……すごく綺麗。」

真つ青な髪になってますね。

「似合っていますか？」

「良く似合っておるぞ。黒とはまた違う雰囲気が出るのう。」

「……中々疲れましたが……術式といつのはこつこつ風にも使えるのですね。」

「そんな使い方をしたのはワシが見た限りお主が初めてじゃよ。」

「なんでも、一番は良いものです。」

「先程、何故正座などしたのじゃ？」

「ああ……私は囲碁を打ちますからね……。その姿勢が一番集中出来るのですよ。」

「……囲碁を打つのかお主。後で何局か打ってもらおうかのう……」

「マグネット式はありませんよ？」

「十分じゃ。」

「では、後で打ちましょう。タイムさん。」

「そうじゃな蒼姫。」

黒じゃなくても似合っているといってくれかな・・・野口君は。

ふふ、顔を赤くして言ってくれそうだね。

早く記憶を戻してあげないとね・・・。

準備は・・・出来たかな。

ルークちゃんとお別れなのは寂しいけれども・・・

・・・嫌な事はさっさと終わらせてしましましょう。

第9話（後書き）

第9話読んでいただき有難うございます。

第10話

パチ

パチ

暖炉の火が燃えている。

「黒姫。」

「なんですか？動揺作戦ですか？打っている最中は動揺などしませんよ？」

「・・・違うのう。お主、不思議な手を打つのが。」

「そうですね？」

「基本的には普通じゃ、じゃが・・・前半の山場などどうみても・・・悪手な手を打つ時があるといったところか？」

「・・・漫画の影響ですよ。」

「そうじゃったか。」

？・・・？・・・？・・・？・・・？・・・？

中学生3年生のある日。

「南！南！囲碁しようぜ！」

「・・・一体全体どういう事なんだい？突然囲碁とは？
今まで囲碁を打った経験などないのだが？」

「これだよこれ！この漫画超おもっしねーんだよ！」

「・・・また漫画の影響かい？そろそろ漫画は卒業したほうが良いのでは？」

「男はいつでも少年なんだよ！

大冒険！

主人公覚醒！

弱い主人公が段々と強くなる！

ヒロインを助け出す！

男のロマンたるロマン！」

「私は栗が食べたいね。」

「マロンじゃねえよ！栗が食べたいなら終わったら家にくれば山ほどあるわ！」

「そうかい。それは楽しみだね。」

ルールブックを読む。

「奥深いね。トランプやオセロと違ってルールが複雑な感じだね。

・・・ところでこの碁盤はどうしたのだい？」

「買った！3ヶ月の小遣いなくなっちゃった！」

「よくやるね・・・。まあ・・・野口君のお金だからね。まずはル

ールブックを読みながら打つとしようか。」

「そうだな。」

パチ

パチ

「これで、この石がもらえるのかな？」

ジャラ。

10個程の石をとる。

「な！なんでだよ！」

「これで石が囲まれているはずだが？」

「・・・本当だ。どうなってんだ！南お前本当に初心者かよ！」

「初めてやったよ？まあ最初なんだ、最後までやってみようか。」
「そうだな……。」

パチ

パチ

「これ……どうやって勝敗見分けるんだ……？」

「……石が大量にあるね……地とはどうやって……。」

「まあ引き分けでいいだろ！栗食いに行こうぜ！」

「……明らかに私が勝ったような気がするがね……。まあ栗につられておくとしようか。」

「そーそー。遊びに本気になっちゃいかんのだよ！南君！」

「野口君。君はいつも勝負に本気のようにだが？」

「……細かい事は言いつこなしだ！」

大量の石が手元に転がってる。

「南！今度はまけねーぞ！」

「そうかい。」

毎日学校から帰って来て二人で1局打つ。

頭の体操になっていいかもしれないね。

「み、南様……チヨコレート……おもちしました……。」

「ふむ。ありがとう野口君。あ、後コーヒーもいれてくれるかな？」

「なんで俺が！くそー！次はまけねーからな！」

「罰ゲームをつけようといったのは君じゃないか……。」

「俺が勝ったら南！お前メイド服な！」

「・・・そんな物持っているのかい・・・？」

「かあさん色々服あるからな！なんか見た時無い服が沢山あるんだぜ！」

「・・・雪さん・・・一体どんな趣味をしているのだい・・・？」

「・・・ご主人様。これで良いかい？野口君？」

「・・・お、おう！南！コーラが飲みたい！」

「・・・買って来なければ無いのだがね・・・。この格好でそれ・・・。」

「どうした？」

「・・・毒をくらわば皿までだよ？野口君？ふふふ。」

「ご主人様、買い物にいきたいので外へ一緒に行って頂けますか？」

「な！外にでるのかよ！その格好の南をつれて・・・。」

「さあ、行きましようか。ふふふ。」

「みなみいいいい！！手を引つ張るな！」

商店街までやってきた。

「南ちゃん可愛い服着てるねえ。」

「ありがとうございます。」

「克也くん・・・良い趣味してるわねえ・・・。」

「うるせえ！」

商店街のおじさん、おばさん達に笑われた。

高校生になった。

「南！囲碁部作るうぜ！」

「また唐突だね・・・。一体なんだというんだい？」

「学校の囲碁部去年で潰れたんだとさ！3人いりゃ部活になるみたいだしな！」

「そうなのかい？」

「そうすりゃ大会にも出られるし良いだろ！」

「野口君・・・君は陸上部だったと思うのだが・・・？」

「先生は許可くれたぜ？趣味の範囲なら構わんだってさ！」

「・・・部長や顧問の先生は？」

「部長は南な！俺部活掛け持ちだから部長やれないしな！顧問は見つけといたから！」

「・・・無責任だね・・・まあ良いよ。」

「やっぱりいー！これで昼休み打つても変な目で見られなくてすむぜ！」

「別に私は気にならないがね。」

「俺は気になるんだっての！」

毎日。

毎日。

そんな代わり映えの無い日を過ごしていました。

？・・・？・・・？・・・？・・・？

「投了じゃな。」

「ありがとうございます。」

「ほれ、勝利者の特権じゃ。」

「これは？鞆？」

「ワシの鞆じゃな。術式を使って、物が沢山入る鞆になっている」

「・・・そうですか。大切なものなのでは？」

「量産品じゃよ。」

「そうですか。」

茶色い革のシオルダーバックですか。

・・・こういう物も作れるんですね・・・。

「もしかして、あの照明器具もタイムさんが？」

「そうじゃな。あの明かりは苦労したわい。」

あれはのう、中に小さい蠟燭が3本入つとる。

術式を使用し、蠟燭が倒れた場合とある一定の長さになった場合に発動するようにしとる。」

「・・・ある一定の長さや倒れた場合、元の長さや場所に戻ると。」

「そうじゃな。」

「便利ですね・・・。」

ファンタジーですね・・・。

いや、火がでたり水を出したり。

・・・そういえば。

「タイムさん。空を飛んだり出来ないのですか？それが出来ると楽なのですか？」

「できんのう。そのような想像した事もなかったわ。」

「空を飛ぶモンスターなどは居ないのですか？」

「おる。翼が生えたでかいトカゲみたいのがのう。」

・・・それはドラゴンでは・・・？

トカゲで済ませていいものなのでしょうか？

「それを倒す時は一体どうやって・・・。」

「お主・・・火の玉を出した時方向を変えられたじゃろう？矢でも一緒じゃよ。」

・・・ああ成る程追跡するという事はほぼ100%当たるとい事ですね。

「だから空を飛ばなくても良いと・・・。」

「そうじゃな。飛べたら飛べたで気持ちの良いものじゃろうがな。」

鞆に物をつめる。

全て入るのでしょうか？

「そういえば取り出す時はどうすれば？」

「欲しい物を念じれば良い。」

「そうですか。」

「例えば・・・こうじゃな。」

バサッ

鞆からドレスが出てきました。

「成る程。」

ドサッ

「何をしていますのですか？」

「いやなに・・・手違いじゃよ。フオフオフオッ。」

下着がばら撒かれました。

「本当に・・・変態ですね。」

「爺になると趣味が偏るもんじゃ。黒姫は全く動揺せんからつまらんのじゃがな。」

明日には・・・出発です。

野口君は元気に・・・まあ元気でしよう。

焦っても詮無い事です。

目的は、はっきりとしているのですから。

第10話（後書き）

第10話読んで頂きありがとうございました。

第11話

森の中を進む。

3つの足音が進む。

「どうしてこうなったのでしょうかね……。」

「それは、歴史食いに言うのじゃな。」

「……タイムさん？歴史食いは俗世から離れたのでは？」

「そうじゃな。人との関わりを拒絶しておったのじゃがのう……。」

「

一人で出発するつもりでした。

タイムさんもそのつもりだったのでしょうか。

これ以上、迷惑をかけるつもりなどなかったのですがね……。」

30分前

「……南お姉ちゃんと一緒に行く。」

手を握られた。

「……ルークちゃん？」

「……お姉ちゃんと一緒に行く。」

「……お母さんと同じ。」

タイムさんに目を向ける。

首を振られた。

「ルークちゃん、私はこれから危険な事をする。命の危険もあるはずだね。」

着いてくるとルークちゃんも危ない事に巻き込んでしまう。」

「……一緒に行く。」

「何故だい？私がお母さんと似ているのかな？」

「・・・違う。お母さんが死んじゃう前の日と同じ顔をしてる・・・
気がするの。」

「・・・。」

目を瞑る。

私は、そんなに駄目な顔をしていたのかな。

こんな幼い子にまで・・・分かるような顔をしていたかな。

「歴史食い。お主は足手まといじゃぞ。」

「・・・危ない所には近づかない。・・・駄目？お爺ちゃん。」
ため息を1つ。

首振りを2つ。

「黒姫、歴史食いを連れて行ってやってくれんかのう？本以外での
ワガママなど今まで言った事がなかったからのう。とりあえずワシ
も王都までは着いて行くしかないじゃろうな。」

「・・・そうですか、分かりました。では、ルークちゃん一緒に行
くとうしょうか。」

「・・・うん。」

必要最低限な物を用意して、次の村へと歩いていった。

「歴史食い、お主自分で歩けなくなったらならば、戻ると誓え。」

「・・・うん。」

そうでしょうね。

自力で歩けなくなっても1度や2度ならば私やタイムさんで助けて
あげられる。ですが・・・ずっとは無理でしょうね。

サクッ

サクッ

草の葉を踏みしめて歩く。

大きな森ですね。

所々しか日の光が入らない森。

タイムさんのあつた家以外には手が付けられて居ないのでしよう。

ガサッ

遠くの草が揺れた。

「何かいるのでしょうか？」

「モンスターじゃ、黒姫準備をせい。」

「・・・良く分かるんですね。」

「当たり前じゃろう。ここはワシの庭みたいなものじゃ。」

2匹の・・・鶏？

大きさは2mはありましようか？

「ほお・・・大物じゃのう。黒姫、今日の食料じゃな。」

「・・・あれを食べるのですか？」

「勿論じゃな。昨日も食べたじゃろう？」

「あれが、そうですね・・・。」

食べ物になる前を見たらあまり食べたいとは思わないですね。

ですが食料節約は大事な事でしょう。

10日分は鞆にいれてありますが、何が起るかはわかりませんか
らね。

『きいいいいいいいい！』

「嫌な声ですね・・・。」

甲高い声。

私達のご飯になる気はないですよ？

「黒姫、1匹は任せたのじゃ。頭を落とすのじゃな。それで十分じゃ。」

「……はい分かりました。」

「炎よ。」

手の平の前に蒼い炎が出る。

手を鶏に向ける。

投げる必要は無い事が分かった。

近づく必要も無い事が分かった。

「伸びて下さい。」

蒼い炎から1本の糸が鶏に向かう。

左に逃げましたね……。

「左へ。」

1本の糸が鶏を追う。

触れる瞬間を狙う。

「ブループラネット。」

糸の先が剣先へと変わる。

首が飛んだ。

「……ふう。」

「お主よくそんな芸当が出来るのう……。」

”生き物を殺す”というのはきついですね。

「黒姫、歴史食いを少し離しておくのじゃ。」

「・・・分かりました。」

気をつかわれてしまいましたね。

ルークちゃんは、こちらの世界の人間。殺し、殺される弱肉強食の世界の人間。

この程度ではなんとも思わないのでしょうか・・・。

「・・・南お姉ちゃんいこ。・・・お爺ちゃんの邪魔しちゃうよ。」

「そうだね。少し水が飲みたいね。」

冷たい水を飲んで頭を冷やしたい所だね。

夜になった。

「黒姫、お主動物を殺した経験は？」

「1度だけ、こちらの世界へ来た時に大きな猪を。ですが、その時は頭も働いていませんでした。それに加えて人が死にそうでした。

今のような状況とは違います。」

「そうじゃったか。こちらの世界は日本とは違うのじゃぞ?。」

「そうですね。日本は良い国なのだと、異世界で思うとは・・・。

動物を殺した事も意識せずお肉が食べられるのですから、そんな事が幸せだとは思いませんでした。」

パチ

パチ

焚き火の火が灯る。

ルークちゃんの頭が私の膝の上にある。

髪を撫でる。

「・・・う。」

寝苦しいのかな？
話が終わったら横にしてあげないとね。

「戻りたくならんのか？」

「なりません。」

「即答なのじゃな。今なら戻してやらんこともないのじゃが？そのイヤリングを置いてゆけば、あちらの世界ではお主は一般人じゃ。」

「これは絆です。野口君との大事な大事な思い出です。もし日本に帰ったとしたら今度は本当に野口君の事を思い出せないという事でしょう？」

「じゃな、こちらの世界の事など忘れて。勇者の事など忘れ。一人の女として生きるのじゃな。」

「無理です。絶対に後悔します。」

「思い出せないのじゃぞ？」

「それでもです。」

「【お主が勇者を殺す事になるかもしれんぞ？】」

「・・・ああここですか。」

先日のような問答では無いのですね。

視線が違います。

本気・・・という事でしょうか。

私が・・・本当に殺す可能性があるかと。

「前も言ったでしょう。私は野口君と一緒にいたい。私が殺してしまふのでしたら、一緒に死ぬだけです。時遣い・・・ええ。覚悟の上ですよ。」

「お主の覚悟を疑って悪かったのう。」

「大丈夫です。私が殺す可能性など0なのですから。」

「フォッフォッフォ。妬けてしまふのう。」

「妬くような歳ではないでしょう。」

「男はいつでもいつまでも、少年なのじゃよ。」

「・・・そうかもしれませんね。」

パチ

パチ

焚き火だけが森に響く。

第11話（後書き）

11話読んで頂き有難うございます。

第12話

1日と数時間。

やっと森を抜けましたね……。

「とりあえず一段落という所でしょうか。」

「そうじゃのう。」

何度かのモンスター襲撃がありました。とりあえずは大丈夫そうですね。

私は慣れてしまうのでしょうか。この生活に慣れてしまうという事は普通の生活へは戻れないのでは無いでしょうか。

……いえ、何を考えているのでしょうか。もう普通では無いというのに。

「後数時間も歩けば小さな街に着く。黒姫、今の内に言うておく。」

「なんででしょうか?」

「街へ行ったら別行動じゃ。」

「……どういう事でしょうか?」

「ワシはお主を気に入っている。歴史食いもそうじゃろう。じゃが……馴れ合いはせんというだけじゃ。今まではワシ以外に情報を手に入れられない、じゃから手を貸してやっていたにすぎん。黒姫、お主はお主の生き様を晒せ。」

「……そうですか。タイムさんとルークちゃんはただ着いて来ているだけ。私は私のしたい事を自分の責任で行えというわけですね。」

「そうじゃな。ワシ達はお主のやった事に対して何も言わん。じゃが手助けもせん。ここからはお主自身で情報なり、金なりは手に入られるのじゃからな。ああ……歴史食いが居る分歩みが遅いのは、ワシが道案内をしとる。それで5分5分じゃろう?」

「……そうですね。」

という事は街の中でのお金や、泊まる先、ご飯は全て私自身でなんとかしろと。

道中で私に動物を殺させたのは……ご飯を食べさせてあげる為だったと。

厳しいですね……。いや優しいのでしょうか。私がこの世界で生きていけるように示してくれている。働かざる物食べるべからず、弱肉強食の世界。

「今日はその街で宿にワシらは泊まる。ワシらは時間も金もある。お主が出ると決めた日に宿まで来るのじゃな。」

「はい。分かりました。」

「これも渡しておく。」

「……通行証ですか。」

お父様達と一緒に見たものですね。

木のカードにミナミ・クサカ。と書かれています。

お父様達のは金色でしたね。あれは貴族という事でしょうか？

「これが私の唯一の身分証明書と言う所ですか。」

「それはまだ完成しておらん。」

「……では街へは入れないのですか？」

それは困りますね……。完成させるのも私への仕事という事でしょうか？

「完成させるだけじゃよ。黒姫、お主の髪の毛を1本寄こすのじゃ。」

「

プチッ。

「これで良いですか？これで何を？」

「まあ、見ておれ。」

髪の毛を近づけて……。え？

「吸い込んだ？」

「そうじゃ。黒姫、指を近づけるのじゃ。」

プチッ

「いたっ……。どうい事ですか？」

「血を吸い込んだのじゃ。これで完成じゃな。」

銀色のカードへと変わっていました……。

名前の横に”認定”と書いてありますね。

「これがお主の身分証じゃ。この木は一人一つは絶対に渡される。じゃが無くした場合、再度手に入れるには1ゴグル必要となるのじゃ。普通の者ならば2度と手に入れられん。1ゴグルあるのならば1月は飯に困らんじやろうからな。この世界ではこの通行証があればある程度なんでも出来るからのう。まあ……もし無くして悪用されたのならはお尋ね者となるだけじゃがな。」

「……怖いカードですね。」

「運転免許証と大差ないじやろう？無くさねば良いだけの事じゃ。」

「私はまだ運転免許証を持っていませんよ。」

3時間程歩いたでしょうか。

「見えてきたのう。」

「あれですか。」

遠くに石の壁が見えてきました。

「ようこそ。イクルエルへ。討伐者の方々ですか？商いの方でしたら荷物を一度見せて頂きますが？」

「討伐者じゃのう。」

「そうでしたか。では通行証を見せて頂けますか？……エリック・トール……ミナミ・クサカ。ルーク・シュタ……シュタイン様！？失礼致しました。どうぞお通り下さい。」

「勤めご苦労じゃ。」

「いえ、シュタイン様にお会い出来ただけでも光栄です。」

「これは駄賃じゃ、とっておけ。」

「・・・ありがたく頂きます。」

「タイムさん貴方の通行証は何故名前がエリックなのですか？」

「適当じゃよ。本名なぞ忘れた。」

「もう一つ良いですか？ルークちゃんの通行証は・・・何故シユタインに？」

「確かルークちゃんは妾の子で、シユタイン性を継いで居ないはずでは？」

「ワシが使うからじゃよ。」

「ああ・・・成る程そうでしたね。」

「黒姫、さあここからお主は別行動じゃな。ワシらはこの街で一番でかい宿におる。その金があれば3日は宿に泊まれるじやろう。じやが・・・王都までは後3つの街がある。最低でも3シグルは稼ぐのじゃな。飯も食うのじやろうから10シグルは必要と考えるべきかのう？」

「そこまで教えて頂けるのですね。」

「死なれても困るからのう。」

「お金を稼ぐ。アルバイトなどほとんどした時が無かったのですがね・・・。」

「・・・南お姉ちゃん・・・また明日ね。」

「ルークちゃんまた明日。」

さて・・・一人になってしまったわけですが。まだ昼過ぎといった所でしょう。とりあえず泊まる所をなんとかしないとイケないですね。

誰でも良いから話しかけて宿の場所を聞き出すとしましょうか。

「すみません。」

「・・・なんだいあんた？」

灰色の髪、蒼い瞳、釣り目で身長が結構高い。175cmといった所かな？

「こちらの街へは初めて来たばかりで、安く泊まれる宿などがありましたら教えて欲しいのですが？」

「ああ・・・あんた討伐者か？」

「はい。」

討伐者とはなんでしょうか・・・。

「女の討伐者とは・・・あんた強いんだな。」

「それ程でも無いと思いますよ。」

「あの宿が安いな、雑魚寝だな。」

「・・・申し訳ありません。一応個室の宿が前提でお願いします。さすがに男の人達と一緒に寝るのは嫌ですね。」

「じゃあ、中心に近い宿に行くといい。あの噴水の周辺の宿ならば、安心して寝る事は出来るだろうよ。」

「ありがとうございます。」

(INN)

アイエ又エ又・・・これが宿のマークでしょうか？

扉を押し、中へ入る。

「すみません。こちらの宿の値段を聞きたいのですが？」
受付の女の人の人へ尋ねる。

「3シングルとなります。朝食、夕食をつけるのでしたら1シングルずつ追加となります。」

「・・・分かりました、とりあえず夕食をつけていただいで1泊したいのですが部屋は空いていますか？」

「大丈夫ですよ。4シングル確かにお預かりしました。では、こちら

へどござ。」

殺風景だね……。

ベッドと机以外に何も無い。

いや、そんなものでしょう。

「……ふう。」

鞆を置きベッドに倒れ込む。髪がバサッと広がったのが分かった。とりあえず休む場所は確保といった所かな。

「起きれるのかな。自力で起きなければいけないというのは久々だね……。」

仕事は何をすれば良いのかな。

……ふふ。なんだか少し楽しくなってきたね。

討伐者というのは多分モンスターを狩る職業なのでしょう。あまり……したくは無い仕事ですが背に腹は変えられません。

多分日雇いの仕事などほほ無いでしょうからね。それを探すぐらいならば討伐者でお金を稼ぐべきでしょう。私にはその力があるのですから。

……野口君。

一人は寂しいよ。

第12話（後書き）

第12話読んで頂きありがとうございます。

第13話

さて、ここで寝ていても始まりません。

タイムさんは、ヒントを出してくれたじゃないですか。

” 10シングルを稼げ。情報を自力で手に入れる。”

これに意味があるのかは分かりませんが私の成長になるのでしょうか。一人で臨機応変に動けるようになれ。といった所でしょうか。

髪を整え、ショートパンツに着替える。ここからは何があるか分かりません。とりあえず動きやすい服へ着替えておいたほうが良いでしょう。

さて、討伐者になるにはどうすれば良いのかを聞きにいくつもりでしょう。

受付の人は・・・ああ居たね。

「すみません。」

「なんででしょうか？」

「討伐者となるにはどうすれば良いのですか？」

「討伐者への志願ですか？・・・貴女が？」

・・・どういう事でしょうか。

「いえ、女の人の討伐者というのは少ないと聞いていましたので、でしたら外を出て反対側のSUBと書かれている建物へどうぞ。そちらで説明を受けて頂ければ。」

「はい、分かりました。」

SUB・・・SUBと・・・

(SUB)

ああ、ここかな？・・・えらく廃れてるね。薄暗い。営業をしているのかな？

カラン

「お？お客さんかい？倒して欲しいモンスター、人。情報は分かるだけだしてくれ。」

「・・・すみません。討伐者志望なのですが・・・。」
ヒゲが生えた赤髪、40過ぎといった所でしょうか。出来れば優しいそうな女の人の方が良かったのですが・・・。

「あんたが？やめとけやめとけ。1匹も倒せず死ぬぞ？金が欲しいのなら・・・あんたなら娼館で人気がでるだろうよ。」

・・・馬鹿にしていますね。それもそうでしょう。こんな小柄でそれも女と舐められるのも当然ですか。

「・・・どうしたら討伐者となれるのですか？」
「・・・本気か？」

「ええ短時間で10シングル以上稼がないといけないのですよ。」
「そんな端金、5日程働けばすぐだろうよ。わざわざ討伐者にならなくてもな。」

「1日で稼ぎたいのですよ。後、出来れば情報屋のような方と知り合いたいので。」

「・・・あんた・・・まあ良い。まずカードを出せ。」
カードを見せる。

「ミナミ・クサカと。よつと。」
指を押し付けられた？どういう事でしょうか？

「これであんたは討伐者だ。10シングルだったらそのへんの紙でも見てくれ。」

・・・カードの色はそのままですが・・・認定の所が討伐者認定に変わっていますね。

一般市民から討伐者へと変わったといった所ですかね。

「ありがとうございます。」

ざっと紙を見渡す。

「美人さん！」

これなんてどうだろうね。15シグル。絵がああ鶏になっているからあれを3匹狩って来れば15シグルと。結構楽なのかな？

「ちょ、呼んでるんだけどー？」

「・・・私ですか？」

「そうそう！新米なんだろう？俺達と一緒にモンスター倒しにいかねーか？」

軽薄な人・・・いやなんでしょう。違和感が・・・。

「いえ、結構です。一人でなんとかするのを選ぶつもりですので。」

「・・・ふーん・・・そうか。強いのか？」

「どうなのでしょうね？比べる相手があまり居なかったもので。」

「一人だともしかしてがあるからな。とりあえず討伐者になったやつらはある程度の徒党は組むもんだ。一人でだと怪我をした時に困るからな。」

くらっ

・・・久しぶりな気がしますね・・・。

・・・

「げぼっ・・・」

「ひゃっはっは！新米が一人でいきがってっからそうなるんだよ！お前程の上玉ならいくらでも稼いでもらえそうだな！娼館で死ぬまで稼いでもらおうかねえ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

今のは分かりやすかったね。いつもこれぐらい分かりやすいと良いのだけど……。

さて、どうしましょうか。

「おいおい、お嬢ちゃん？どうした？顔が真っ青だぜ？」

「いえ、お気になさらず。ええ、そうですね。初の獲物ですから慎重に行くとしましようか。もしよろしければ、ご一緒して頂けませんか？」

「美人さんの頼みだからな！しょーがねえ！着いて行ってやるよ。」

銀髪さん1人……いえ違いそうですね。3人程でしょうか。

「あんた、馬は乗れるかい？」

「いえ、乗れません。」

「そんじゃ、歩いていくとしますかねえ。」

街を出て平原の方へ向かう。

「そのモンスターを狩るんだったら、こつちだな。」

「そうですね。森でも見た気がしますが？」

「森はあぶねーからな。視界はわりいからな。討伐者であそこで狩りをするやつはいねえな。」

「そうですね。」

「いたぜ。」

……目の前に2匹の大きな鶏がいますね。草を食べているのでしょうか？

「お嬢ちゃん、あんたは1匹な。俺が1匹を仕留める。」

「ええ、良いですよ？」

「じゃあ、いくぜ。」

バツ

二人で草むらから飛び出す。

その瞬間、私の身体が背中から押される。

「げほっ。」

「ひゃっはっは！土よ！」

剣を地面に突き刺したのが見えた。

草が私の身体に絡まる。

「・・・どういふ事だい？」

手首と足首を倒れた状態で固定されているね。

「俺達は人専門の討伐者だつての！モンスターなんてからねーんだよ！おい、出て来い！こいつは上玉だぜ。顔は良い。それにこの成り。こりゃ娼館で稼いでもらわねーとなあ！」

2人の仲間も出てきたね。

手が伸びてくる。

「私に触らないでもらえるかな？」

「これからお楽しみだつての！売る前に試させてもらわねーとなあ！」

「・・・死にたいのかい？」

「お前程度に抜けられる程、柔い術式じゃねーよ！」

「抜けたりなどしないよ。」

「何をい・・・。」

燃える。

身体を縛ってる草が全て。

いや違うね。

この平原全てを燃やし尽くしてあげよう。

「お前・・・火の術式使いか。こっちにもいるからな！相殺となるだけだぜ？」

「火？何を言っているのかな？」

ひゅん

水と火の矢が飛んでくる。

「炎よ、私の壁となれ」

蒼い炎の壁に当たり、矢ごと燃えつきる。

「な！お前武器も使わず術式を・・・その蒼い炎はなんだ！」

「うるさいね。私の火は全てを燃やす炎だよ。火程度と比べられては困るね。」

「炎よ、3人の武器を・・・全て燃やしてあげて。」

3本の炎の糸が3人に向かってゆく。

「残念だったね。娼館に売られるのは君達のほうだったようだよ？フフフ。」

「ちっ、新米だと思って・・・うお！」

届いた。

「きえねえ！俺の剣が・・・。」

「命があるだけましだと思っただね。」

肩を抑えてる3人組み。

とりあえずお金だけは奪っておくかな。慰謝料だね。私に触ろうとした罰だよ？」

「とりあえずお金を出して貰えるかな？」

「な！てめえ！」

「死にたいのかな？」

「・・・ちっ。ほらよ。」

じゃら

「結構入っているね。ゴグルも入っている。もういいよ。とっとと尻尾を振って帰りなさい負け犬。」

「絶対にお前は殺す。その顔覚えたからな！」

「そうかい。いつでも来るといい。」

3人が見えなくなる。

「・・・ふう。」

力があるといっても、やはり私は一般人だよ・・・。ハツタリに引つかかってくれて助かったね。・・・人を殺す事など出来そうにもないね。

野口君、君は何を考えて殺すという事をしているんだい？

モンスターといっても・・・動物。勇者だから殺す。討伐者だから殺す。害があるから殺す。・・・今の大きい鶏達は害がなかったよ。食べる為に殺すのなら自然の摂理だね。けれども・・・お金の為に殺す・・・。

人間というものは、どこの世界であってもどこであってもその土地の害にしかならないのだろうね。

罪深い生き物なのだろうね・・・。

第13話（後書き）

第13話読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3918y/>

野口君観察日記

2011年11月28日11時16分発行